

# 新 人文学

Annual Bulletin  
of the  
New Humanities  
Vol. 22

【巻頭言】

## 天に唾する

——排外主義にまつわる国民的自画自賛と健忘症／  
怒りと笑いと憂いのAI狂騒曲

大森 一輝

【論文】

## 穂村弘の「異化」理論について

山田 航

## 説話における天皇と僧

—『今昔物語集』を中心に—

伊藤翔太

## Eからの手紙、それから

—三浦綾子『銃口』前史としての『石ころのうた』—

林 香苗



●【資料紹介】

## 翻刻『八雲路日記 三上』(二)

武田佑希子

【集報】 令和六年度 大学院文学研究科

学位論文題目一覧／

文学研究科教育・研究発表活動／編集後記

# Annual Bulletin of the New Humanities

---

Vol. 22

December 2025

---

## Contents

### Foreword

Kazuteru OMORI Spitting into the Sky: Self-Adulation and Amnesia in our Discussion of Foreign Tourists and Immigrants / An AI Rhapsody of Anger, Laughter, and Concern

### Articles

Wataru YAMADA On Hiroshi Homura's "Defamiliarization" theory

Shota ITO The Emperor and the Monk in Tales :Focusing on the "Konjaku Monogatarishu"

Kanae HAYASHI A Genetic Study of Ayako Miura's "Ishikoro no Uta" as the Prehistory of "Juko"

### Document Introduction

Yukiko TAKEDA Reprint of "Yakumoji-Nikki 3(1)" Part 2

### Notes

### Editorial Notes

〔巻頭言〕

# 天に唾する

——排外主義にまつわる国民的自画自賛と健忘症／怒りと笑いと憂いのA I狂騒曲

大森一輝……………002

〔論文〕

穂村弘の「異化」理論について 山田航……………012

説話における天皇と僧——『今昔物語集』を中心に—— 伊藤翔太……………050

Eからの手紙、それから——三浦綾子『銃口』前史としての『石ころのうた』—— 林香苗……………074

●〔資料紹介〕

翻刻『八雲路日記 三上』(一) 武田佑希子……………126

〔彙報〕

令和六年度 大学院文学研究科 学位論文題目一覧……………140  
文学研究科教育 研究発表活動……………146  
編集後記……………148

# 年報 新 人文 学

【第二十二号】

二〇二五年十二月発行  
目次

Annual Bulletin  
of the  
New Humanities

Vol. 22

# 天に唾する

——排外主義にまつわる国民的自画自賛と健忘症／

怒りと笑いと憂いのAI狂騒曲

大森 一輝

## かつての日本人

「日本に来る／住む外国人は傍迷惑だ。民度の低い連中、いや、そもそも文化や生活習慣が違う奴らとは、付き合えないし、決してわかり合えない」という類の声がネットで増幅され、リアルな世界にも溢れている。「文化の違う外国人」は、移動先の社会に完全に同化しない限り、受け入れられないし、受け入れるべきではないのだろうか？ 日本人も、当然のことではあるが、日本の外に出れば、「異文化を持ち込む外国人」になる。この理屈で言えば、日本人の海外旅行、ましてや海外移住も、現地社会との間に不可避的に摩擦を引き起こすから制限・拒絶されるべきだ、ということになってしまう。

「日本人だけは特別だ」というのは、剥き出しの自民族優越主義でしかないだろう。いつの間にか、「日本人は、清潔で、礼儀正しく、他人を思いやる」民族だということになってきているようだが、これは、私の個人的な経験・実感とは著しく異なるし、これとは正反対の姿を記録したのも、枚挙に暇がない。

例えば、二〇二五年九月八日にNHKで放送された「映像の世紀バタフライエフェクトシリーズ昭和百年③高度成長やがて悲しき奇跡かな」には、今から見れば目を覆いたくなるような場面がいくつも出てくる。昭和三〇年代の日本人は、平気でどこにでも物を捨てた。道には紙屑が山となり、川は生ごみや排水で悪臭を放っていた。列車の床には空になった駅弁や空き瓶・新聞紙などが放置され、さながら「巨大なゴミ箱のようだった」というナレーションとともに、俄には信じ難い車両内の様子が映し出される。男はどこでもタバコを吸い、どこにでもポイ捨てし、男も女も会社に遅れそうなきには線路の上でもお構いなしに走る。これが、ほんの六〇数年前（私が生まれた頃）の「日本人」の実態である（キャプチャ画像を載せることも考えたが、本誌はオンライン公開しているため、著作権法で認められる「引用」の範囲を超える可能性があり、断念した。興味のある人は、ぜひ番組を見てもらいたい）。こうした人たちが海外旅行をすれば、容易に予想されるように、現地の人たちの鬻ぎを買うことになる。以下は、すべて『読売新聞』からの引用である。「日本人が何気なくすることで現地の人に一番いやがられているのはブラジルでは立ったまま用を足すこと、ハワイでは海水パンツでなく、下着のパンツで泳ぐこと」（一九七〇年八月一日夕刊）。「日本の皆さん、ハワイに観光に来た時には、外で…立小便をしてはいけません。…また食堂のウエートレスのお尻をなでてはいけません」（一九七四年三月一四日投書欄）。他にも、「団体客が列車内で、ブリキカンに火をたき、ラーメンをつくり、女の乗客に抱きつい

た（ドイツ）ことや、バスルームでクズかごを湯オケに使用（ロサンゼルス）したり、人前でバンドをゆるめ、腹巻から財布を出す（パリ）など、マユをひそめることばかり」（一九七〇年八月一三日）。オーストラリアでは、マーケットに「日本の団体さんが来ていて、万年筆何本、香水何十個、時計何個と書いたメモを手に持ち、カウンターに並んでいた。店員が（生活必需品を買いに来た地元の人）のところへ来て、恐れ入りますが、店の閉店までにあなたの順番はこないだろうから、別の店へ行つてくださいと言ったという」（一九七七年三月一八日投書欄）。一九八〇年代に入ってから、パリのホテルのレストランでは、「ツアーの日本人男性が十人程テーブルについていた」が、「突然そのテーブルから演歌が聞こえ始めた。ややしばらくして、手拍子を打ち、次々に大声で歌う。レストランには他の外国人観光客も多数食事をしていたが、あつげにとられて眺めていた。そのうちに不快感をあらわにし、食事を中断して席を立つ人もいた。」それにもかかわらず、「歌が一段落したと思つたら、ワインの瓶を持ちテーブルをわたり歩き、だれかれの見境もなくワインをついでいる」（一九八一年一月二〇日投書欄）。やりたい放題である。

これらは、一部の不届き者の所業ではない。逆に、報道されたのは氷山の一角である。私と同年代かそれより年長の人たちは、当時の日本人団体海外旅行客がどれだけ世界中で嫌われ蔑まれていたのかを、直接・間接的に知っている（にもかかわらず、知らない／忘れたふりをする人のなんと多いことか）。建物の中や路上で「群がる」のも日本人の悪い癖だった。そのため「ほかの人は通ろうにも通れない」ことに気づかず、気づいても気にしない。「海外旅行でも、日本の大都市でも、ほとんどが未知の人との接触である。それをスムーズにするには、他人に対する思いやりを持つことではなからうか。それがど

うも、日本では戦後、追いつけ、追い越せと、他人のことはそっちのけにして、自分のことだけに専念するようになってしまった。その結果が、海外での日本人の行動になって現れているのである」(一九七三年一〇月七日)。

「確かに、昔は、不潔で、非常識・無神経だったのだろうが、今は違う」と思うかもしれない。日本人は変わったのだ、と。だとしたら、かつて海外に行った日本人が嫌われたのと同じように今の日本で嫌われている外国人も、変わるはずではないか。もうひとつだけ例を挙げる。実は、「爆買い」の元祖も日本人だったのである。一九八〇年代後半、いわゆる「バブル期」の、金回りが良くなった日本人は、次のような買い物をしていた。「ブランド商品を買いきり、まるで獲物でも射止めてきたかのように、大きな買い物袋をいくつも持って町中を集団で歩き回る」(『日本経済新聞』一九八八年九月四日)。「パリのサントレノやロサンゼルスのレストランのロデオ・ドライブでは、イナゴのようにブランド商品を食い尽くす日本人団体客に対する、売り子の軽べつに満ちたまなざしを見かけることが多くなった。売り上げに占める日本人のシェアが七割といわれるルイ・ヴィトンでは、日本で普及しすぎてブランド価値が低下しかねない」という問題に直面している」(『朝日新聞』一九八九年二月二〇日)。

現代日本で非難されている外国人の行動は、すべて日本人が先にやってきたことである。この数十年で自分たちはお行儀よくなれたのなら、羽目を外している外国人をもっと温かく見守る余裕を持ってないものだろうか。海外で嫌われていた頃の日本人だって、「あいつらは絶対に変わらない」と思われていたのに、変わったのだから。今の私たちが「人はみんな生まれつき○○で、変わるなどあり得ない」と考え、変わるのは日本人だけで外国人は変わらないと本気で信じるのは、(同じように思われていた)

かつての日本人（と自分との連続性）を全否定する行為としか言いようがない。

もしかして、日本人は、傍若無人・自分勝手な未熟者から、都合の悪い過去をなかつたことにし同じ道を後から辿っている人たちに己の醜さを転嫁して足蹴にする傲慢な卑怯者に「変わった」のだろうか。

## これからの学生

※この節は「です、ます」調で書きます。また、個人が特定されないように、事実関係をぼかしたり、一部変更したりしています。

生成AIが学生の行動を変えつつあることを実感させられた最近の事例を二つ紹介します。いずれも、やったこと（いや、やらなかったこと）のツケは、自分に返ってくるという当たり前の話に過ぎないのですが。

授業で見せた映像に対する感想・質問を出させる課題で、映像ではまったく触れられておらず、授業ともほとんど関係のない、第二次世界大戦後のアメリカの農業政策と現代日本のコメ不足のことを書いてきた学生がいたので、直接連絡を取って、どういうことか尋ねたら、作品そのものではなく時代背景を論じたのだ、という返答があり、そうだとしても授業との関連がわからない、と再度説明を求め、同時に、他の授業と取り違えている、あるいはいろいろ調べAIにも相談しているうちに混乱したのであれば、正直にそう言うよう促したところ、黒人への差別を制度化する社会構造という意味で関連がある、

とずいぶん強引なことを言い出したので、具体的にどのような関連があるのか説明してくれなければならぬから、ともう一度突き返したら、農業に関わる制度が弱者に負荷をかけ差別を助長するのだ、というような抽象的なことを言う一方で、いきなり高市政権のコメ政策に言及し始め、全然話が噛み合わないもしかして、と思い、一連のメールのやり取りをAIに読ませて、AIが書いたものかどうかを判定させたら、「ほぼ確実にAIが書いたものです（九五%以上）」という答えが出ました。映像を見ておらず授業内容もわからないので具体的なことは一切書かず（書けず）制度論で押し通し、必然性がないのに突然日本の農政について語り出すのは、抽象論でごまかし余計な知識を詰め込むことで相手を煙に巻くAIの典型的な挙動なのだそうです。AIのインチキをAI自身が指摘するというシニールな展開になりました。

つまり、この学生は、AIに課題の答えを書かせ、それを疑われるとAIに言い訳メールを書かせた。そしてそれをAIに見抜かれたわけです。

AIの回答の全文（結構長いもの）をそのまま送り、これには反論できないだろう、と思っていたら、反論にならない反論を送り返してきて、AIなど使っていない、と言いつ張り、しかしこれ以上はもう結構です、と逃げようとしたので、それなら口頭試問をします、と呼び出したところ（あまりにも疑わしい場合、本人に釈明を求めることがある旨をあらかじめ通告しています）、応じたので、面談しました。映像の中身や視聴後の私の解説の内容を聞いたところ、授業を欠席し映像も見えていないことは白状しましたが（動画配信サービスでもネットでも見られないものなので、自分で見ることはできないです）、その場になかったので、私が何を言ったのかもわからないから）、この期に及んでも、課題の答えは

自分で調べて考えた、と言うので、課題やメールの中で使われている専門用語について問い質したところ、まったく答えられない。ここでようやく、AIを使った（というか、AIが書いてくれたけれども自分では意味のわからない答えをそのまま提出した）ことを認めました。

もうひとつは、もっと長いレポートにAIを使った事例です。どう考えてもその学生のレベルで書ける文章ではないのに注が全然付いておらず、分析の際の類型化やラベルの付け方がプロっぽくて、ワードの使い方（表の作り方）も一人でやったとは思えないものを送ってきたので、他人の文章の盗用/AIが出力したもののそのままの流用/協力者の存在の隠蔽は、研究倫理に悖る不正行為になりかねないと厳しく言い渡したうえで、面談しました。

パクリかAIか代筆か、と詰め寄ったところ、AIを使ったことは認めましたが、使い方は、文章を論文っぽくしてもらっただけで、アイデアや骨格は自分のものだと言い張る。それならば「表象の進化のイデオロギー的な回収過程」とか「メッセージが市場と受容の回路を通じて循環する仕組み」つて、どういうこと？と問い返すと黙ってしまう。それでも、中身は自分のものだと言って譲らないので、次のような指示を出しました。

自分で意味を説明できない言葉・フレーズ・段落は、すべて削除するか、意味を説明できる表現に書き換えるか、残すのなら意味を説明できるよう勉強してくること。必要のない術学的な英語の略称は、すべて日本語にすること。

つまり、学生らしい稚拙な（元の）文章に戻せ、ということなのです。学術的で滑らかな文章を書くな、という指導をする日が来るとは思いませんでした。しかし、この学生はそれほど優秀ではないので

AIにやらせすぎてバレたものの、適切な（いや、不適切か？）プロンプトを与えれば、今や「大学生らしい文章」をAIに書かせることもできるため、学生が自分では「学ばない」決心をしたら、もうお手上げです。

どちらのときも、私は、最初は腹を立て、途中から学生の愚かさに失笑し、そしてAIの進化（と人間の退化）に驚き、私たちの行く末に不安を感じました。

AIを賢く利用するのは、これからの学生には必要なことですが、AIの出力とは違うことを自分の頭では一切考え（られ）ず、AIの言ったことをそのまま自分の考えであるかのように言うようになる、人間がAIを使っているのか、AIに操られているのかわからなくなります。そして、操られるだけの人間、AIにできることしかできない人間は、もう要らない、ということになりかねない。

AIで時間と労力を節約しているつもりの方は、浮いた時間と労力を何に使うつもりなのでしょう？自分のやりたいことをやるために必要な、生きる力をどうやって養い、その力をどこでどう発揮するつもりなのでしょう？

手を抜けるところは抜いてもいいのかもしれませんが、便利なものはうまく使いこなせばいい。でも、それが自分たちの首を絞める滅びの道にならないよう、人としての生き方を、AI任せではなく人として、一人一人があらためて考えるべきなのだ、強く思います。

（おおもり かずてる・北海学園大学大学院文学研究科教授）

---

---

# 論 文



穂村弘の「異化」理論について 山田航

説話における天皇と僧——『今昔物語集』を中心に—— 伊藤翔太

Eからの手紙、それから

——三浦綾子『銃口』前史としての『石ころのうた』——

林香苗

---

# 穂村弘の「異化」理論について

山田航

## 1 はじめに

現代短歌を代表する歌人であり、現代短歌理論をリードする批評家でもある穂村弘<sup>〔1〕</sup>（一九六二年～）は近年、短歌の方法論として「異化」を頻繁に唱えている。本稿では、その穂村弘が近年において短歌理論で用いている「異化」という語および概念に着目し、使用例の変遷、使用ジャンルの範囲、従来の「異化」の概念との差異を検証したうえで、穂村弘の「異化」理論の独自性を明らかにしていきたい。

穂村が「異化」という概念を用語として直接的に使うようになったのは二〇一五年ごろからであるが、

その短歌理論に「異化」の語が頻出するようになるのは、第四歌集『水中翼船炎上中』（講談社、二〇一八年）刊行前後からである。もつとも、それ以前から「異化」に近い表現を用いており、それについては「4」で詳述することとする。

「異化」は従来、文学理論や演劇理論における重要な概念であった。しかし穂村の用いている「異化」の語はそうした従来の概念とは完全に合致しない部分も多く、穂村が現代短歌に合わせて構築した独自の概念といえる性格が強い。本稿では、現代短歌理論の用語として穂村が独自に定義してきた内容について具体的に論じていきたいと思う。

## 2 日本における「異化」の受容

「異化（オストラネーニエ）」とは『集英社世界文学大事典』によると、「ロシア・フォルマリズムの主要概念の一つ。表現対象をなじみのある自明なものではなく、新奇で〈異様〉なものに思えるようにする手法」と定義されている。ソ連の文学理論家ヴィクトル・シクロフスキー（一八九三年～一九八四年）<sup>②</sup>が、「方法としての芸術」（一九一七年）で唱えた概念である。現代では「異化」の訳語で定着しているが、日本に紹介された初期には「異常化」や「奇異化」とも訳されていた。

「ロシア・フォルマリズム」とは前出事典によると、一九一〇年代半ばから一九二〇年代半ばのロシアで展開された文学研究および文学批評運動である。従来の印象批評、イデオロギー批評、文学テクス

トの伝記的解釈を退け、テクストを自律的なものとみなし、作品の内容よりも形式的な技法を重視した。「異化」はその中心にある技法であった。

そしてドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒト<sup>(3)</sup>（一八九八年～一九五六年）は、ロシア・フォルマリズムに影響を受けて演劇用語としての「異化（もしくは異化効果）」を提唱・実践した<sup>(4)</sup>。「見慣れた日常的現実に対して疑念を抱かせ、視点を変えて未知なるものを理性的に発見、認識させる効果」（石澤秀二『世界演劇辞典』、東京堂出版、二〇一五年）と定義される。一九三六年に自作『まる頭ととんがり頭』の注の中で初めてこの術語を用いている。

ブレヒトによって「異化」は演劇理論の重要概念となった。しかしブレヒトの術語としての「異化」は本来の「オストラナーニエ」から意味が拡散し、「カフカのようなそれ以前の作品の解釈などにも援用されることになったが、そういう場合は、対象を異化するというだけの意味で誤用されることが多い」（『集英社世界文学大事典』）、「現在、独り歩きして用語のみが一般化している」（『世界演劇辞典』）と、定義のあいまいさを指摘されている。

日本にロシア・フォルマリズムが紹介されたのは一九二八年（昭和三年）のことで、シクロフスキー『文学と映画』が脚本家の八住利雄の翻訳で刊行されたのがきっかけである。同書では始めの数ページをフォルムとは何かという問題に費やし、その上で「異常化」と名付ける概念を説明しているという<sup>(5)</sup>。また同年には、ロシア文学翻訳家・除村吉太郎が演劇雑誌『悲劇喜劇』にてシクロフスキーの論文「方法としての芸術」（本文中では「手法としての藝術」<sup>Формы искусства</sup>と表記されている）を引用して、「Ostranenie（奇異化）」の概念を紹介している<sup>(6)</sup>。

ロシア・フォルマリズムの潮流にいち早く反応したのは、いわゆる「新感覚派」と呼ばれていた作家の横光利一（一八九八年～一九四七年）だった。彼は『文藝春秋』一九二八年一月号に寄せた文芸時評で、形式主義（フォルマリズム）<sup>⑦</sup>に絡めてシクロフスキーについて言及している。

だが此の形式なるものが、いかなるものであるかと云うことを知らしめた批評家は、殆ど日本にはただ夏目漱石一人にすぎなかった。しかし漱石の形式論は、作者と作品とをひつつけて考えた、古臭いものであったのだ。そこへ、千葉亀雄氏が、新しき形式論として、新感覚派の鞭を振られた。ロシアに於ては、シクロフスキーが形式主義を振り上げて、目下闘争の火花を散らしている<sup>⑧</sup>。

ここで横光は新感覚派を「形式主義」とみなしており、ロシアやドイツなど世界中に形式主義の潮流が来ている中で、日本でも新しい形式主義者（フォルマリスト）が続々と現れていると指摘している。これはすなわち、「内容が形式を決定すると云うに相等し」<sup>⑨</sup>いマルクス主義芸術と社会的リアリズムへの批判であった。これをきっかけにマルキシズム文学の批評家・蔵原惟人との論争へと展開することになる。

横光はかなり早い段階でシクロフスキーに注目していたが、あくまで「作者と作品を分離させる」というところを重視しており<sup>⑩</sup>、「異化」の理論には言及していない。形式主義者を自認していた作家・歌人の中河与一（一八九七年～一九九四年）の著書『フォルマリズム藝術論』（天人社、一九三〇年）でも、シクロフスキーからの引用がたびたびなされる中に「異化」の語は含まれていない。このように、昭和

初期には「新感覚派」の作家たちによってロシア・フォルマリズム自体への関心は持たれていたものの、「異化」の理論はさほど重視されていなかったようである。

戦後になるとブレヒトの戯曲が日本でも広く演じられるようになったことから、演劇用語として「異化」の概念が広まった。一九五六年にはドイツ文学者の前田敬作が「従来の演劇では、舞台と観客とのあいだに感情移入の作用による『同化』が成立つわけだが、『異化』はまさにその逆である<sup>(11)</sup>」と論じており、「異化」に対して感情移入作用を指す「同化」の語が生じている。演出家・俳優の千田是也(一九〇四年～一九九四年)<sup>(12)</sup>が一九六〇年代にブレヒトの演劇論の翻訳を進めたことは、「異化」概念の浸透にとりわけ強い影響をもたらした。

ロシア・フォルマリズム由来の「異化」の概念を再び掘り起こし、日本に広く浸透させたのは小説家の大江健三郎<sup>(13)</sup>(一九三五年～二〇二三年)である。「僕はヴィクトル・シクロフスキーによる『異化』の定義を、われわれ共有の道具としたいと思う<sup>(14)</sup>」と宣言したうえで、日本文学に対して「異化」の方法を適用する読みを進めていった。たとえば本居宣長『石上私淑言』の中のながむる、という言葉の成立について書いた文章に対しての小林秀雄の考察に、「異化」の方法を見出している<sup>(15)</sup>。さらに現代文学についても、吉行淳之介『夕暮まで』(新潮社、一九七八年)にみられる異様なほどの緊迫・緊張に満ちた会話シーンについて「ロシア・フォルマリストの用語をもちいれば、それは『異化』された会話ということになる<sup>(16)</sup>」と評している。

さらに『新しい文学のために』(岩波書店、一九八八年)では「異化」の例として、刊行当時のベストセラーであった俵万智(一九六二年～)の歌集『サラダ記念日』(河出書房新社、一九八七年)を挙げて

いる。

さきの若く生きいきした言語感覚の短歌でいえば、サラダという言葉、記念日という言葉が、この歌をつうじていかに新しく洗いきよめられていることか。それには端的にサラダプラス記念日という言葉のしくみが効果をあげている。加えて伝統に根ざす短歌そのものの呼吸が、効果を助長している。こうした仕方も、ひとつひとつの言葉を「異化」するやり方である<sup>(17)</sup>。

サラダという日常的な語に対し、記念日という語は非日常に属する語である。なぜなら「記念日」は一年にたった一日しかない特別な日を指すからだ。さらにいえば、サラダ記念日の一首によって通俗化してしまったものの、本来「記念日」は建国記念日や独立記念日に代表されるように国家に関わる特別な日に冠されることの多い語だ。大江は、このレベル差のある二つの語の組み合わせが「異化効果」を生む要素になっていることを指摘している。

一九八七年には近世文学研究者の乾裕幸が、坪内稔典の俳句を論じる過程で、「切字あるいは句切れは、異階層言語の衝撃的な出会（『異文化遭遇』<sup>カルチャー・ショック</sup>）を可能にし、日常的に馴れ合った現実を生き生きと異化してみせるだろう<sup>(18)</sup>」と述べており、シクロフスキーや大江と同じ用法で「異化」を用いている。短歌や俳句といった日本の伝統文学にも「異化」概念を導入する例が、一九八〇年代後半にはすでに現れていたことになる。

### 3 穂村弘の用いる「異化」の変遷

ここでは、穂村弘が過去に「異化」の語を用いてきた実例について紹介したうえで、その用法の独自性について検討していきたい。穂村が明確に「異化」の語を用いた初期の例が、国際短編映画祭につながる「ショートフィルムの原案」公募・創作プロジェクト「BOOK SHORTS」のウェブサイト上のインタビュー（二〇一五年一〇月二日）にみられる。このインタビューはフジモトマサルとの共著』による『によつ記』（文藝春秋、二〇一五年）の刊行を受けてのものである。』によつ記』シリーズは二〇〇五年から『別冊文藝春秋』で始まった連載で、日記形式のエッセイという建前で書かれているものの、その実態は架空の体験を綴ったいわゆる「嘘日記」といえる。

同様の試みは岸本佐知子や川上弘美などにも先例がみられるが、『によつ記』シリーズは文字数が少なく行分けを多用しており、詩のような形式で書かれている点が他の作家とは異なっている。詩の形式で書いていながらエッセイという体で出版するというのがこのシリーズの特色であった。インタビューの中では『によつ記』冒頭に収録された「エイプリルフル<sup>19</sup>」という文章についてこう語られている。

この文章のポイントは、4月1日という日付と、エイプリルフルという言葉がタイトルだけに

あつて、本文の4行ではそれが全く説明されていないということでしょう。ただ、それは後から自分で読んで思うことで、書くときは勝手にそういうことになるんです。僕はそれを「言葉が異化されている」と呼んでいます。フィクション、ノンフィクションの尺度では説明できない言葉の運動ですね<sup>(20)</sup>。

ここで重要なのは「フィクション、ノンフィクションの尺度では説明できない」という部分だろう。『世界音痴』(小学館、二〇〇一年)以降エッセイを多数執筆するようになった穂村だが、その頃から「この話は実話か」と訊かれることになった。『本当か嘘か』というのは社会的な基準に合わせた実用的な言葉の尺度であり、芸術上の基準ではそこはたいして重要ではないと考えていたことから、実用的な言葉の尺度から逃れたいという意図により、この「異化」の語を導入してみせたようだ。

その後、俳人・堀本裕樹との共著『短歌と俳句の五十番勝負』(新潮社、二〇一八年四月)に収録されたあとがき対談に「異化」(正確には「異化作用」)の語が登場する。

穂村 僕は全体に、きっちり書いてしまうと、何か異化作用が起らないように思えて。自分でも思いがけないことを書きたいという感覚がかなりあるんです。もちろん短歌にはそれが入っていないと成立しないんですが、どうすれば自分でも思いがけないことが書けるのか、ということを重視するので、逆にどうでもいいことを書いてしまう。風呂の椅子が透明で見えないとか、消しゴムかいたらその滓がうようよ動くみたいなことを書きがちなんです<sup>(21)</sup>。

この対談にはこれ以降もたびたび「異化作用」の語が登場する。「火星移民選抜適性検査プログラム」のような造語を使用した短歌や、「朝起きて、食卓の上に蒸しパンとかがあって、それに体温計が刺さっていたらうれしいな<sup>(22)</sup>」のような奇想といえる短歌に対して「異化作用」の語が用いられている。

穂村はさらに、二〇一八年一〇月のインタビューにてこのように語っている。

歌集に、それぞれの夜の終わりにセロファンを肛門に貼る少年少女、っていう歌があるんだけど、あれはひとことでは、蟻虫検査なんだよね。朝、お尻に変なセロファンを貼って、封印して、学校に提出する非常に奇妙な儀式で。それを蟻虫検査ということばを使わずに表すと、文脈からその行為が切り離されて、奇怪な儀式に見えてくる。それが異化ということですよ。

「家庭画報」二〇一八年一〇月九日<sup>(23)</sup>

引用されている短歌は第四歌集『水中翼船炎上中』(講談社、二〇一八年)収録のものだが、この歌集の刊行前後から、穂村の短歌理論には「異化」の語が頻出するようになってきている。

続いて、全国大学生生活協同組合連合会の季刊誌「読書のいずみ」一五六号(二〇一八年一〇月)掲載の「座・対談」の記事を紹介したい。この記事は対談相手の杉田佳凜が大学院生ということもあってか、『短歌と俳句の五十番勝負』と比較すると講義のような側面が強い。

杉田 歌論や私が以前参加させていただいたシンポジウムでのお話から、「異化」という言葉が穂村さんの中でキーワードになっていないかと思いました。短歌の形式が持っている異化効果とは、どのようなものだと考えられていますか。

穂村 異化の前提にあるのは文脈なんですよね。さっきの例で言うと「蟻虫検査」という文脈。読者の中には、それを知っている人と知らない人がいますよね。あるとき突然「セロファンを肛門に貼る」という奇妙な言葉の連なりを見せられて「自分はそれを知らないけど、背後になにかあるかもしれない」そう感じさせるのが詩の機能だと思えます。少し話が飛躍するように感じるかもしれませんが、全ての文脈を知っているのは神。人間は神ではないから、文脈のすべてを見通すことはできません。短歌や詩はそのことに関わって存在していて、どこかで垂直方向の神に向かって書いているというところがあると思っています。文脈が見えないときに面白いと感じる人が好むものというか。

この「異化の前提にあるのは文脈」という主張は、穂村の「異化」理論の中でも独自性の強い部分である。一般的な「文脈」の語意は「文章の流れの中にある意味内容のつながりぐあい。多くは、文と文の論理的関係、語と語の意味的関連の中にある。文章の筋道。」(小学館『大辞泉』)というものであるが、穂村がここでいう文脈とは、「他者とのあいだで共通の理解があること」という意味合いであるようだ。「セロファンを肛門に貼る」歌は、蟻虫検査を知っている人と知らない人とは文脈が異なることを意識したうえで詠まれている。蟻虫検査を知っている人にとってはノスタルジーである一方で、知らない人から

すると異郷の奇妙な風習のように感じられる。そしてその背後に想像を掻き立てるものがあるかどうかを、「詩の機能」として捉えている。

一方で大江が『新しい文学のために』で解説している「異化」はレトリックとしての側面が強い<sup>(24)</sup>。たとえば一三世紀なかばに成立した説話集『古今著聞集』の一篇「小式部内侍、歌に依りて病癒ゆる事」の中に、「あくびさして」という言葉が登場することを紹介している。みやびやかな短歌とみやびやかな宮殿の中に突如、一挙に日常的でユーモラスな雰囲気にする言葉が挿入されているのである。

あくびさしてという「異化」された言葉が、はっきり表記されない主格として、先行するおそらく鬼という言葉を「異化」する作用を、ひとつの文節のなかで果たすのである。(中略)ところが、あくびをかみ殺したような声をたてるもの、ということ、その鬼がいかに日常的な、手にふれる肉体をそなえたようなものとしてうかんで来る。ものとして、鬼が天井裏にひそんでいる実感がある。ありふれた事物を、見なれぬ、不思議なものに感じさせる――そのようにして、その言葉は洗い流し、そこに眼をとどめさせる――、それが異化の作用である。(中略) この場合、ある抽象的・概念的な言葉を「異化」するやり方として、それに肉体を感じさせるといふ効果も成立している。悲しみという言葉を示すことで、具体的に悲しんでいる肉体を感じさせうるなら、その文脈において、悲しみという言葉は「異化」されているのだ<sup>(25)</sup>。

ここで用いられている「文脈」の語は、状況によって言葉の使い方は変わるといふ意味合いで、穂村

が用いている「文脈」と比較するともっと一般的な用法に近い。みやびやかな精神世界と、肉体を感じさせる日常的な世界とでは本来言葉のレベルに差があるのだが、あくびさしてという語がそのレベル差を強引に埋め合わせる役割を担っている。それによって悲しみという語が、「悲しい、泣きたくなる」という感情を指す通常の意味合いとは違うように使われている印象を読者に与えていると大江は論じている。「サラダ」と「記念日」を組み合わせることと本質的には同じである。

大江の「異化」理論における「文脈」とは、あくまでひとりの人間の中にある過去の言語体験の蓄積を指す。一方、穂村の「異化」理論は必ずしもそうではない。「セロファンを肛門に貼る」という行為は、世代によって「文脈」が異なり、「日常／非日常」にそれぞれ読みが分離する。したがって、穂村はあくまでも短歌という詩型における限定的な「異化」の方法であることを意識しているようである。

穂村の「異化」理論の特殊な部分は、世代や文化が異なる者たちの間で何らかの文脈の食い違いが発生したとき、他者に対する理解としてそこに立ち現れる想像力のかたちを「異化」と捉えているところにある。つまり、「異化」を対話（ダイアローグ）の一形態として解釈している。

ただし穂村のこのような「異化」観は現在のところ、歌人全体で広く共有されているわけではない。異なる捉え方をしている例として、現代口語短歌における「異化」の手法について二〇二二年ごろから数回にわたって考察を発表している桑原憂太郎の論を紹介したい。桑原は、現代口語短歌における「異化」を次のように説明している。

短歌の世界で「異化」の手法として分かりやすいのは、日常にあるコトやモノを別いかたで表

現してみる、という手法である。いかなれば比喩表現のバリエーションなんだけど、そうやって別のいいかたで表現することで、日常の見慣れていたコトやモノが、違ってみえてくる、というところに表現の面白さがあるわけだ<sup>(26)</sup>。

桑原憂太郎『現代短歌の「異化」について』まとめ

ここで桑原は「異化」について「比喩表現のバリエーション」と断じており、レトリックの一種と捉えている<sup>(27)</sup>。ここで語られている「異化」とはあくまで短歌の表現を読み物として面白くさせるためのテクニクであり、穂村の解釈にみられるような対話の手法ではない。このことから、穂村の「異化」理論がまだ現代短歌における通説となりえていないことがわかる。しかし「4」で詳述するように、それに付随する理論の中には現代短歌に影響を与えているものもある。

#### 4 「オートマティック」と「共感と驚異」

先述したように、穂村弘が「異化」の用語を積極的に口に出すようになるのは二〇一八年ごろからだ。それ以前から穂村はすでに「異化」理論の影響を感じさせる用語を使っている。本章では、二つの用語に着目し、それぞれを説明していきたい。一つは「オートマティック」であり、もう一つは「共感と驚異」である。

まず、一つ目の「オートマティック」についてみていきたい。『短歌という爆弾』(小学館、二〇〇〇年)

収録の「猫又歌会」<sup>(28)</sup>の講評の中で、穂村はたびたび「下句がややオートマティックですね」「これは決して『オートマティック』とは言えない。要は『オートマティック』っていうのは自分で書いてるつもりで実は何かに書かされてる言葉なのでよくない、ということなのです」という講評を加えている<sup>(29)</sup>。この「オートマティック」という表現は、「異化」の対義語としてシクロフスキーが用いていた「自動化」ときわめて似通っている。

この「自動化」は、水野忠夫の訳では「自己運動」<sup>(30)</sup>、除村吉太郎の訳では「機械化」<sup>(31)</sup>となっているが、『新しい文学のために』では大江が『ロシア・フォルマリズム論集』(現代思潮社、一九七一年)に従って「自動化」の語を用いているため、本稿ではそれにならう<sup>(32)</sup>。大江は「なぜなら僕らはまずもの、と関係しつつ、この世界で生きているのだから。言葉のつきあいは、まずそのようなもの、との関係の、代行である。それは言葉について意識的になるなら、すぐにもわかるはずのことだ。ところがその実生活でのもの、との関係には、自動作用が起る。もの、ものとして意識し、受けとめるということがなくなる」<sup>(33)</sup>と解説している。文学的表現が「日常・実用的」な表現に取り込まれることを「自動化」と称している。穂村が講評で用いていた「オートマティック」は、「手垢がついている」「慣用句的である」という意味合いであるが、その指し示している内容は「自動化」とほぼ同一のものといっている。

もつとも、この「オートマティック」はあくまで歌会における技術論的な講評に用いている語であり、穂村も「オートマティック」と評した歌に対しての改作案を提示してみせている。つまりこの時点では穂村は、単に「レトリックが十分に練られていない」と感じた歌に対して「オートマティック」の語を用いている。

二つ目の「共感と驚異」もまた、「異化」と通底するものである。この理論については『短歌という爆弾』収録の評論「麦わら帽子のへこみ 共感と驚異」で早い時期から論じられている。

短歌が人を感動させるために必要な要素のうちで、大きなものが二つあると思う。それは共感と驚異である。共感とはシンパシーの感覚。「そういうことってある」「その気持ちわかる」と読者に思わせる力である。(略)ここで短歌に不可欠なもうひとつの要素である驚異について考える必要がある。共感⇨シンパシーの感覚に対して、驚異⇨ワンダーの感覚とは、「いままでみたこともない」「なんて不思議なんだ」という驚きを読者に与えるものである<sup>(34)</sup>。

「共感と驚異」は穂村を代表する短歌理論の一つとして、この後にたびたび繰り返されることになり、いくつかの国語教科書にも採用されている<sup>(35)</sup>。そしてこの「共感と驚異」はそのまま、「自動化と異化」のアナロジーとなっている。

この評論の中で穂村は、短歌の初心者の作品をいくつか例に挙げたうえで、こう論じている<sup>(36)</sup>。

それぞれ自分の体験や気持ちに素直につくったことがわかる作品だが、それにもかかわらずこれらの歌には読者を感動させる力が弱い。読者より先にまず歌の作者が自分で自分に共感してしまっているために、他人と共有できる感動を生み出すには至っていないのである。他人に共感するのに比べて、自分で自分の気持ちに共感することはたやすい。この容易さは、自分自身の本当の心に向

かつて言葉を研ぎ澄ますということから限りなく遠いところにある。他人に作者は定型に言葉を組み立てただけで満足してしまい、そのために、結果的に生み出された作品はめざしたはずの共感からも遠ざかることになる<sup>(37)</sup>。

これはまさに、短歌定型というものに對する「自動化」が起こった例を指摘している。短歌定型が「日常・実用的」な表現の中に落ち込んでしまったということである。もつともここにおいては具体的な改作案などは出されておらず、歌会における技術論的な用語であった「オートマティック」とは多少異なっている。

そしてこの「共感と驚異」の理論は、その後さらなる展開をみせる。エッセイ集『整形前夜』(講談社、二〇〇九年)では「共感と驚異」のタイトルにて三回にわたって、詩や短歌が世間に広く読まれにくい理由について考察している。

「共感(シンパシー)」と「驚異(ワンダー)」、言語表現を支えるこれらふたつのうち、「泣ける」本、「笑える」本を求める読者は、圧倒的に「共感」優位の読み方をしているのだろう。言葉のなかに「驚異」など求めていないのだ<sup>(38)</sup>。

「共感と驚異」(『整形前夜』)

「麦わら帽子のへこみ 共感と驚異」では石川啄木や俵万智といった高い共感性を獲得した歌人についてもふれていたものの、ここでは詩、短歌、俳句といった韻文が「驚異」を志向する文学であり、散

文（とりわけ小説）は「共感」を志向する文学というように、二項対立で区分されるようになっていく。そして若者は「驚異」との親和性が高いのに対し、年齢を重ねて今までに得たものに意味や価値を信じたいという気持ちが強くなった者は世界や他者や歴史への「共感」に結びつくのではないかと考察している。つまり、加齢とともに世界に「自動化」されていった者たちが「共感」を求めようになるというわけである。ここにおいて、「共感／驚異」と「自動化／異化」のアナロジーが決定的に完成する。

また補足として、穂村がたびたび語っている「怖い歌はいい歌」という理念についてもふれておきたい。これは穂村が雑誌『ダ・ヴィンチ』(KADOKAWA)にて二〇〇八年より連載している投稿短歌のコーナー『短歌ください』にて登場した一文であり<sup>(39)</sup>、そこからたびたび繰り返し返して発言されるようになって、現代短歌において広く影響を与えた理念となっている<sup>(40)</sup>。「自動化」されてしまった存在が、「異化」されたものに対して抱く感情が恐怖であるという発想から、「怖い歌」を重視していると考えることができさる。

## 5 「異化」の散文への応用

先述した通り二〇〇五年連載開始の『によっ記』が、穂村が「異化」の理論を明確に意識したうえで書くようになった最初のエッセイである。しかしこれもまた先述した通り、『によっ記』は行分けを多用しており、詩に近い形式を用いていた。

完全な散文の形で「異化」への志向をあらわにするようになるエッセイは、『絶叫委員会』(筑摩書房、二〇一〇年)だろう。筑摩書房のPR誌「ちくま」に二〇〇六年四月から連載を始めたもので、「印象的な言葉たちについて書いてみたい<sup>(41)</sup>」というテーマのエッセイである。日常の中にある、必ずしも文学作品として発表されたわけではないけれど印象に残ったさまざまな言葉に対して書き記した内容となっている。極度のパニック状態に陥ってしまった女性社員がとっさに叫んだ「バーベキュー、バーベキューって何回やっても駄目なんです!」<sup>(42)</sup>や、昭和末期の時代に駅の伝言板に書かれていた「犬、特にシーズ犬<sup>(43)</sup>」といった例が挙げられている。いずれも何らかの文脈をもって発されている言葉ではあるのだろうが、そこから切り離して単独で引用されたときに「異化」が起きている。同書はもともと「名言集的なものをやってみよう<sup>(44)</sup>」という意図で始めたが、しだいに「偶然性による結果的ポエム」についての考察にシフトしていったとあとがきに記されている<sup>(45)</sup>。

そして次に注目したいのは『整形前夜』(二〇〇九年)に収録されている、「変」になる」という一篇である。なぜなら、『整形前夜』があくまで言葉そのものを主題としていたのに対し、この一篇では「身体性」に対する「異化」が主題として取り上げられている点が新しい傾向であるからだ。

階段を下りているとき、何かの拍子に「変」になることがある。あれ、あれ、おっとっと、という感じでうまく歩けない。体内のリズムと実際の動きが不意にずれるというか。あれってどういう現象なんだろう。何も考えずに脚を動かしているうちは全く問題なかったのに、「階段を下りている脚」が意識に入った瞬間に、いきなり自然さが乱れて歩けなくなる。それまでどんな風に下りてい

たのか、考えてもわからない、というか、考えるからわからないのか<sup>(46)</sup>。

多くの読者はこのエッセイについて、誰もが思い当たるような身近な体験を語った「共感」優位の読み方で受け止めただろう。しかし、この一篇はむしろ「驚異」を多く含んでいる。この「日常的な行為がうまくできなくなることがある」というのが、シクロフスキーが「方法としての芸術」の中で「自動化」の例として引用した、レフ・トルストイの日記の一節と対照的な内容を記している。そのため注目に値するのである。

トルストイは掃除をしながら部屋を歩き回っていたときに、ソファを拭いたかどうか思い出せなくなったという体験から、無意識のうちの行動はなにもしなかったのと同じことであると確信する。そして多くの人々が無意識のうちに過ごした生活は、もはや生活自体がなかったのと同じではないかと考えるようになる<sup>(47)</sup>。「階段を下りている脚」が意識に入った瞬間に階段の下り方がわからなくなるといえるのはちょうどその反転といえる。慣れきった動きの中でも、のとしての身体を意識してしまうことで、身体が非日常的なものへと「異化」されるといえる現象である。

穂村はこの一篇を、散文の一形式であるエッセイとして書いている。二〇〇五年ごろから短歌にかぎらず散文においても「異化」を主題とするようになったのが穂村作品の流れであるが、散文という形式が一般に「共感」へと傾きやすいことへの批判意識から、散文においても「驚異」を追求するために「異化」の力を用いようとしたのだと読むことができる。「変になる」は、日常の身体性に対する「異化」が主題となっている点が、穂村の文学的キャリアの中でも重要な意味を持っている。穂村にとってエッ

セイは、短歌ではそれまであまり意識してこなかった「身体性」を意識して書かれるものという新しい位置づけを与えられるようになっていく。

先述の通り穂村は「怖い歌はいい歌」という理念をたびたび語るなど、恐怖を「異化」の発露として重視する傾向がある。それは散文にも反映されるようになり、日常的な恐怖のエピソードを多く綴ったエッセイ集『鳥肌が』（PHP研究所、二〇一六年）を発表している。「PHPスペシャル」二〇一二年一月号からの連載が初出となっている。

恐怖といっても奇譚や怪談の類は皆無であり、「怒りのツボ」が人によって異なることよって起こったトラブルなど<sup>(48)</sup>、コミュニケーションの失敗が引き起こす日常的な恐怖がテーマとなっている。たとえば面識のない隣人から物音へのクレームとして何らかの攻撃が来るというのは世間によくある話で共感性の高いエピソードであるが、同書に収められている一篇「隣人たち」では、「ネームプレートを焦がす」「上の階から水を垂らす」「ドアの前に米を撒かれる」などといった奇妙な攻撃手段の話が様々に語られている<sup>(49)</sup>。ここでは、加害者にとつては「自動化」されている行為がもはや一般常識の範囲を逸脱したものであり、被害者にとつては「異化」であるという非対称性が恐怖につながっている。

このように穂村の「異化」理論は、「共感と驚異」や「日常の中の恐怖」というかたちで、短歌のみならずエッセイの中にも積極的に導入されている例がみられる。先述の『によつ記』が二〇〇五年に連載開始した頃から散文の中でどのようにして「異化」を表現するかという実験はすでに始まっていたが、二〇〇九年ごろから「身体性」の観点を導入することで、その試みが完成するようになっていく。さらに『鳥肌が』で語られているエピソードの多くが、「文脈」を共有しない者どうしが衝突してしまった

ことによるコミュニケーション崩壊への恐怖であることは、「異化の前提にあるのは文脈」という発想と深く関わっている。『鳥肌が』の元となる連載が始まった二〇一二年ごろには、「異化」を対話の一形態として捉える考え方が確立していったことになる。

## 6 『田園に死す』と『水中翼船炎上中』

「異化」という概念そのものは穂村が初めて短歌に導入したわけではなく、二〇世紀のうちから複数の使用例がある。たとえば河野裕子が一九八三年に阿木津英の歌に対して、「いいたいことだけを、さつさと叙述しておわるから、歌は尻切れトンボでギクシヤクする。それは、なめらかな短歌のリズム、短歌的抒情への反作用、異化作用として積極的にはたらく」と評している<sup>(50)</sup>。また荻原裕幸は穂村との対談「口語短歌の現在、未来」(『歌壇』一九九九年二月号)の中で「一九九〇年代のはじめころ、ぼくの分析では一九九四年、大震災と地下鉄サリン事件の前年まで、従来の短歌定型に対して、口語を入れる、記号を入れる、あるいは過剰なオノマトペを入れるとかたちでの異化効果を狙った表現が、定型を壊すのではなくて新しいかたちで定型を生かすという効力があつたのですが、その後、バブルが崩壊したかのように効力が失われたような感じがしています」と発言している<sup>(51)</sup>。ただし先例はいずれもレトリックとしての「異化」であり、穂村が用いているほど独自の定義をされたものではない。

先述したように穂村が「異化」理論を前面に出すようになったのは第四歌集『水中翼船炎上中』

(二〇一八年) からであるが、実際は第三歌集『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』(小学館、二〇〇一年。以下『手紙魔まみ』と略する)の時点で「異化」の方法への意識は強く現れている。この歌集は「まみ」(モデルは雪舟えま<sup>52</sup>) という女性から届いた手紙をまとめて歌集にしたという設定であり、「切手なしで手紙が届いている」など非現実的な要素を散りばめることで、フィクションとノンフィクションの境目を曖昧にする仕掛けを施している。雪舟えまという他者の言語感覚に刺激を受けて制作された歌集であることからして、「フィクションとノンフィクションの尺度では説明できない言葉の運動」という二〇一五年時点の「異化」の定義は、エッセイの執筆および『手紙魔まみ』の制作経験から来ているのではないかと考えられる。二人称を「きみ」のように抽象化させず具体的な名前をつけて詠み込むという試みは寺山修司「夏美の歌」(歌集『空には本』所収)などに先例がみられるが、『手紙魔まみ』は作者の名前(ほむほむ)が二人称に使われているという転倒した表現を用いている。従来の短歌では作中に登場する一人称が全て同一人物を指し、さらに狭義では作者自身と同一視して読まれるというルールがあった。『手紙魔まみ』はそのルールを壊すことが「異化」の方法になっていた。

一七年ぶりに刊行された第四歌集である『水中翼船炎上中』は、一章からなり、全三五九首が収められている。この歌集がそれまでの穂村の歌集と比べてはつきり異なる点は、寺山修司『田園に死す』(白玉書房、一九六五年)という先行の歌集を明確に意識して作られているところである。『田園に死す』では故郷青森県が土俗的で前近代的な「村落」共同体として、過剰なまでにデフォルメした形で描写されている。その手法は紛れもなく「異化」といえる。この寺山の「異化」は、敗戦を経てもなお「村落」共同体を脱することができない戦後日本社会への痛烈な批判となっている。

一方で『水中翼船炎上中』では寺山における青森県にあたるものを、自らの幼少期にあたる高度経済成長期という時代そのものに移し替えたくえで、寺山の土俗性とはまた異なる種類のグロテスクなノスタルジーを表現するという「異化」を試している。

スパゲティとパンとミルクとマーガリンがプラスチックのひとつの皿に  
夏休みの朝のお皿にきらきらとコンフレーク零れつづける

五組ではバナナはおやつに入らないことになったぞわんわんわんわ  
おいしいわいわかるいわすてきだわマーガリンを褒めるママたち

意味まるでわからないままばしばしとお醤油に振りかける味の素  
一年生になったら一年生になったらと歌う子供の顔が老人

『水中翼船炎上中』(二〇一八年)

穂村は転勤族の家庭に育つたため、地理上の「故郷」を明確に持たない<sup>(53)</sup>。そのかわり、テレビをはじめとしたメディアの影響によって同時代の日本人が植え付けられていた国民総中流意識そのものを「故郷」と捉えた。この総中流意識とは、昭和・平成期の日本人の大半が抱えていた共同幻想であった。日本社会学会調査委員会が一九五五年から実施していた調査によれば、自らは中流に属するという意識が最も伸びたのは一九六〇年代から七〇年代の間であり<sup>(54)</sup>、一九六二年生まれである穂村の少年期と重なる。

その表れとして、『水中翼船炎上中』では高度経済成長期に一般家庭に根付いた商品や文化が多数、歌のモチーフに選ばれている。たとえばスパゲティやコンフレーク、バナナ、マーガリンなどは、いずれもグローバルゼーションの結果として昭和期の日本に登場し、総中流意識と結託したものである。この総中流意識が、日本全体を「村落」共同体として統一した。『水中翼船炎上中』は『田園に死す』のオマージュであると同時に、「村落」共同体は、具体的な土地と結びつかずともグローバルズムのもとで生き延びうるという反論にもなっている。

穂村が「異化」の前提としている「文脈」とは、『水中翼船炎上中』における昭和期の国民総中流意識のように、時代によって規定された国民意識の単一性から来る共通体験を指しているように思う。それは上の世代でいえば戦争体験や学生運動の体験がもつばら念頭に置かれている一方で、下の世代に対してはそういった共通体験が薄れてきたことが、穂村が二〇〇〇年代に「短歌的な武装解除<sup>(55)</sup>」と呼んでみせた、一見するとレトリックを放棄したかのようにみえる過剰なまでに素朴な口語短歌につながっているとみているようだ。

『田園に死す』と『水中翼船炎上中』の比較論の先例としては、寺井龍哉「修司と弘一『田園に死す』と『水中翼船炎上中』の時空」(『T r i 短歌史プロジェクト』第七号、二〇一九年)を挙げることができる。

寺井は、寺山が歌集『田園に死す』およびその同名映画で試みたのは「空間のドラマ化」および「空間のデフォルメ」であったという理解を穂村がしているとまず整理する。そのうえで寺井はこの「デフォルメ」という理解について疑問を呈している。

「青森」に関する事実が「デフォルメ」に先立って存在しており、方法的な自覚に基づいて「デフォルメ」が施されて作品化したという関係が成立しているわけではない。むしろ「デフォルメ」によってはじめて事実との差異が発見され、「デフォルメ」なしには事実の輪郭をつかむことすらできないというのが『田園に死す』の思想ではなからうか<sup>(56)</sup>。

寺井は、そもそも寺山には「青森」をデフォルメして描こうという方法意識があったわけではなく、自然とそういう表現が出てきたもののではないかと論じている。『田園に死す』跋文にて寺山が「記録」という言葉を括弧付きで提示したのは歌集の内容が事実の客観的な記録ではなく、のみならずそもそも事実の客観的な記録ということ自体が欺瞞であり、そのようにしてしか「自分の原体験」を「反芻」することはできないと考えていたからと捉えている。そのうえで、「デフォルメ」という言葉はこの意識にはふさわしくないと主張する<sup>(57)</sup>。

『水中翼船炎上中』には「読者へのガイド」として各章の時間的な背景を説明した栞が付されており、それによれば「現在」から始まって「子供時代」へと帰り、「母の死」を経て「現在」に回帰するという構成になっている。この構成について寺井は、「穂村もまた寺山のように『反芻』を試みるのだが、その『反芻』された内容の不安定性への自覚を穂村のほうが明白に露呈させて見せている。自覚の深淺はともかく、穂村はより無防備である<sup>(58)</sup>」と論じる。

しかし、寺井の指摘には見落とししている点が二つある。一つは『水中翼船炎上中』の収録歌は前作『手

『紙魔まみ』(二〇〇一年)以降の作品だが、「デフォルメ」という方法意識を自覚するようになったのはせいぜい二〇一二年ごろのことであり<sup>59)</sup>、全ての歌が「デフォルメ」の方法意識に基づいているわけではないことである。穂村自身もそもそもデフォルメして描こうという方法意識がないまま、自然とそういう表現になったという歌も少なくはない。『水中翼船炎上中』は寺井が念頭に置いているほど、方法意識に特化した短歌ばかりが収められているわけではない。

もう一つ、穂村の親が寺山と同世代であり<sup>60)</sup>、穂村が寺山について考えるときにはおのずと親の生涯も視野に入ってくる点である。『水中翼船炎上中』では、青森から東京への片道切符を握り生涯子供を残さなかった寺山の背後にある「影」として、子供を育て上げるために「転勤族」という生涯を選び取った昭和一桁世代たちのリアルがずっと貼り付いている。『水中翼船炎上中』は必ずしも「自分の原体験」だけにこだわった歌集ではなく、終戦によって新しい価値観を持たざるをえなかった「戦中世代の原体験」も同時に包含されている。主人公とその親は世代間の「文脈」をすり合わせる対話を重ねながら、ともに「自分の原体験」を作り上げていった。その点において、「父」は不在で「母」の内面はあえて描かれない『田園に死す』とは対照的な性格を持つ。そして「まみ」と「ほむほむ」による対話構造であった『手紙魔まみ』の方法論は、この部分において引き継がれている。

また寺井の論では、『水中翼船炎上中』は『田園に死す』から方法を撰取するとともに、村上春樹の初期作品にみられる「すべて消費に向っている」性向と意識を共有しているのではないかと指摘している。穂村と東直子との共著『しびれる短歌』(筑摩書房、二〇一九年)の中で穂村が、俵万智、加藤治郎といった同世代の歌人と自らを括り、バラバラでありながら共通しているのは欲望に対して肯定的であること

と語っている。それを踏まえたうえで、寺井はこう指摘する。

穂村も村上も、自身の消費行動に際して特別な論理を用意する必要はなかった。ということは特別の自覚も要しなかったということである。穂村と村上に時代を背負う側面があったとすれば、消費は重大な要素になるだろう<sup>(61)</sup>。

ただここでは、『水中翼船炎上中』が「親との世代間対話」で構成される歌集であることを見落としている。確かに『シンジケート』など穂村の初期作品は「自身の消費行動」を主題としていたかもしれないが、少なくとも『水中翼船炎上中』についていえば、むしろグローバルゼーションのもとで「消費行動に際して特別な論理を用意」する必要があった親世代の消費行動もまた主題としていた。マーガリンを褒めることや、意味がわからないまま醤油に味の素を振りかけることなどは、いずれも消費行動に際しての特別な論理である。穂村は『水中翼船炎上中』においては、「親Ⅱ戦中世代の少年少女」が戦後昭和という時代において「生まれ直し」を経験し、新しく積み上げ始めた「原体験」を背負う試みを進めたのであり、そのために親と同世代である寺山の『田園に死す』の方法を借りたのではないかと考えることができる。

犯人は崖から墜ちて、母は云う、あれ、あのひとは死んだのかい

ああ、死んだ、父は答えて厳かにポットを鳴らす、ういーん、いーん

おまえの名前はなんだっけ？ 繰り返し繰り返し訊く子のペンネーム

「家族の旅」『水中翼船炎上中』(二〇一八年)

両親との会話を詠み込んだ歌としてはこういったものがあるが、この世代にはフィクションの楽しみ方だったり、ペンネームを使ってもう一つの世界を生きているという感覚を理解できないまま大人になることがあるのだと知った穂村の「驚異」から作られている作品である。ここでは確かに異なる「文脈」を持った者どうしの衝突が起こっているのだが、しかし穂村はこの親世代の言動こそむしろプリミティブで魅力的なものではないかと問いかけるために「異化」を用いている。

もう一つ『水中翼船炎上中』の先行研究に、ユキノ進「『水中翼船炎上中』という冥界巡り」(『短歌研究』二〇一二年二・三月号)がある。この論は歌集の主人公を作者である穂村弘自身と完全に重ねることはあえてせず、世代の近い架空の主人公として読むことにとめていいる。つまり、形式主義を採用している。ユキノはこの論において、中学生生活を描いた章「チャイムが違うような気がして」の後に続く「二十世紀の蠅」の章では主人公がすでに成人となっており、青春期が全く描かれていないことに注目している<sup>(62)</sup>。

また「子供時代」の各章で父の存在感が一貫して希薄であるのに対し、近過去である「家族の旅」の章では年老いた父の姿がリアリティをもってはつきりと描かれていることも指摘する。母はマーガリンやコーンフレークといったグローバリゼーションの産物を積極的に受け入れ、さらに「母と警官」の象徴的な姦通を暗示させると解釈できる歌が二首みられることから、警官とはアメリカのメタファーであ

るといふ説を唱えている。父は軍や制度など家父長的「国家」のメタファーであり、母は土地や文化など「母国」のメタファーであるとユキノは論じる。この議論は、アメリカ文化を積極的に受け入れる妻の姦通を描いた小島信夫の小説『抱擁家族』（一九六五年）を論じた江藤淳の評論『成熟と喪失』：母の崩壊（一九六七年）を踏まえたものである<sup>(63)</sup>。

「外庄」ではなく客としてあるいは「トモダチ」として主人公俊介の家に迎え入れられたアメリカ兵のジョージはやがて妻の時子と関係を持つ。そのことを江藤は「近代日本の社会が「父」のイメージを稀薄化し、敗戦がさらに支配原理そのものを否定した」ことと関連付けて「父の欠落」の問題として読んでいる。『水中翼船炎上中』にはその同じテーマが繰り返し返されているのだ。「家に警官を招き入れる母」は「国土に外国の軍隊を駐留させる日本」のメタファーである。それが「象徴的な姦通」であるのだ。

ユキノ進 『水中翼船炎上中』という冥界巡り（後編）

そして歌集に特徴的にみられる青春期の欠落とは、成熟する機会を逸したまま成年になることを表している。歌集では母の死が象徴的なテーマとして扱われるが、母の死を経てもなお未成熟である主人公は（父性原理を失った「日本」が未成熟なまま母を求め続ける姿に重ねられていると論じている<sup>(64)</sup>。つまりユキノの読解は、成熟する機会を逸した一九六〇年前後生まれの同世代の男性たちを象徴化した存在が『水中翼船炎上中』の主人公であるというものである（そして飛躍であることは留保しつつ、そ

の中には長きにわたって皇太子であつた徳仁が含まれていると指摘する。

ユキノの論の弱点は、引用されている二首<sup>(65)</sup>だけでは「母と警官の姦通」と解釈するには弱く、江藤淳の論理と辻褃を合わせようとすぎていることである。また「警官」というモチーフそのものは村の初期作品から頻繁に登場するものであり<sup>(66)</sup>、間抜けな権力者の象徴として詠まれてきた傾向がみられる。それらを同様にアメリカのメタファーと解釈することは難しい。

しかしユキノの論は、「父」「母」の表象を重視している点で寺井の論より深堀りがされている。また特定の世代を「主人公」「父」「母」にそれぞれ象徴化して読むという方法は、口語短歌の先駆として評価される平井弘<sup>(67)</sup>（一九三六年）が『前線』（一九七六年）で試みた、出征して帰らなかった上の世代を「架空の兄」に仮託して詠む手法を想起させる。

## 7 おわりに

穂村弘は「異化」をレトリックではなく対話の形式と解釈している点が、現代歌人の中でも珍しい特徴である。しかし『短歌という爆弾』（二〇〇〇年）において歌評用語として「オートマティック」を用いていた時点では、まだレトリックの一種とみなしている部分もあった。

「異化」に対する独自解釈を深めていった要因として、『手紙魔まみ』（二〇〇一年）の制作以降、他ジャンルの作家との対談やコラボレーション的な試みを増やすなど、「他者性や不確定要素の導入」を積極的

に行ってきた点を挙げる事ができる。また『絶叫委員会』や『鳥肌が』といった他者のエピソードを聞いたうえで書くエッセイが増えたことも他者性の導入の一環である。さらにいえば「猫又歌会」にて、従来の歌壇にはあまりいなかったタイプの人物（スポーツ選手など）の言語感覚に多くふれた経験も影響しているのではないかと考えられる。

この「他者性や不確定要素の導入」という試みについては自ら「僕は自分の世界が壊れるギリギリのところまで他者性やなんらかの不確定要素を導入しないとクリエイティブになれないとなぜか思い込んでしまつて」と語っている<sup>68</sup>。加齢とともに「自分の世界」が固定化してきたことを打破する手段として、異なる「文脈」を持った者たちとの対話を通じて新しい言語表現を獲得しようとする。それが穂村弘独自の「異化」の理論であると考えられる。

そして他者性と不確定要素のうち、より重視しているのは後者なのではないかと思う。コントロールのきかない未知の出会いが起こったときに生じる新しい想像力に賭けることを、「異化」の語に託している。『絶叫委員会』で用いていた「偶然性」の語も、「不確定要素」と同義であろう。

寺山修司は劇団「天井桟敷」を立ち上げて一〇年ほど経った一九七〇年代後半あたりから、自らの演劇の基本概念に「出会い」「偶然性」「想像力による組織化」というキーワードを多用するようになった<sup>69</sup>。それは単に虚構の世界だけで完結してしまう偶然ではなく、観客にとつての現実生活と想像上の体験との出会いでの偶然性が問題にされている<sup>70</sup>。穂村もまた歌人としてデビューして一〇年ほど経ったあたりから、出会いの偶然性をイメージションの源泉として重視するようになっていく。

穂村弘は現代短歌の理論として「異化」をたびたび唱えているが、それはロシア・フォルマリズムや

ブレヒト、大江健三郎などが唱えてきた従来の「異化」理論とは隔たっており、テクスト上だけにとどまらない文学的実践を意味している。それはむしろ、寺山が唱えた演劇の基本概念に近い。しかしシクロフスキーが唱えた「日常を奇異なものとして見る」という核の部分は純化されて残っているように思う。ただし穂村が具体的にどのような理論に影響を受けて「異化」の語を用いるようになったのかは判然としておらず、それは今後の課題となる。

(やまだ わたる・北海学園大学非常勤講師)

#### 〔註〕

- (1) 歌集『シンジケート』(一九九〇年)でデビューし、萩原裕幸(一九六二年)が提唱した「ニューウェーブ短歌」の代表的な存在として注目されるようになる。評論集『短歌の友人』(河出書房新社、二〇〇七年)などにより現代短歌の批評家としても後続に影響を与えている。
- (2) 『日本大百科全書(ニッポニカ)』(小学館、一九九四年)によると、父がユダヤ人、母がドイツ系ロシア人の家庭に生まれ、ペテルブルク大学在学中に「詩的言語研究会(オポヤーズ)」を結成。ロシア・フォルマリズムの批評運動の中心メンバーとして、未来派をはじめとする前衛運動と同伴者文学に強い影響を与えた。
- (3) 『改訂新版 世界大百科事典』(平凡社、二〇〇七年)によると、二〇世紀を代表する劇作家の一人。アウグスブルグに生まれ、一九二二年に『夜打つ太鼓』でクライスト賞受賞。ベルリンのドイツ座文芸部員となり、感情移入に基づく演劇の否定を体系化してゆく。ナチスの迫害によって北欧やアメリカに亡命し、第二次世界大戦後は赤狩りを逃れるためにスイスに移住を経て東ドイツに帰国した。

- (4) 『集英社世界文学大事典』(集英社、一九九六一—一九九八年)によると、「異化効果」とはドイツ語では *verfremden* と表記するが、元来の標準ドイツ語には存在せず、自らの芸術概念に適用するためにシュヴァーペン方言にある言葉から採用したという。
- (5) 山口昌男「映像と文学—半世紀遅れの書評の試み」(『國文學 解釈と教材の研究』一九七七年六月増刊号)、六一—二頁。
- (6) 除村吉太郎「ファルスに就ての断片二つ」(『悲劇喜劇』一九二八年一月号)、六二頁。
- (7) 内容よりも形式を重んじる文学理論としての形式主義(フォルマリズム)は二〇世紀初頭において、ロシアに限らず世界各地で起こっていた。ラマーン・セルデン『現代の文学批評 理論と実践』(鈴木良平訳、彩流社、一九九四年)では「フォルマリズム的な研究方法」の下にアメリカ型とロシア型の二つのフォルマリズムを含めている(二二頁)。
- (8) 平野謙・小田切秀雄・山本健吉編『現代日本文学論争史 上巻』(未来社、二〇〇六年)、五六五頁。
- (9) 注8に同じ、五七〇頁。
- (10) 千田実「形式主義文学論争について」(横光利一の内容形式論)『明治大学大学院『文学研究論集』(文学・史学・地理学)』第三八巻、二〇一三年、八九—一〇〇頁。
- (11) 前田敬作『異化』手法と機能主義』(『新日本文学』一九五六年二月号)。
- (12) 一九二四年、築地小劇場創立に参加。一九二七年に渡独してベルリンで労働者演劇活動に従事し、帰国後一九三二年に日本で初めてプレヒト『三文オペラ』の翻案『乞食芝居』を上演した。一九四四年に俳優座を結成し、戦後は新劇界のリーダー的役割を担った。
- (13) 注2同書によると、東大仏文科在学中に学生作家としてデビューし、一九五八年に『飼育』で芥川賞受賞。出口なしの閉塞状況下の青春をみずみずしい翻訳調の文体で書き、第三の新人に数えられる。一九六七年の『万延元年のフットボール』以降、神話学的題材や道化の概念、ロシア・フォルマリズムの影響がみられるようになる。一九九四年、日本人として二人目のノーベル文学賞受賞。
- (14) 大江健三郎『小説の方法』(岩波書店、一九七八年)、二頁。

(15) 注14に同じ、五頁。

(16) 大江健三郎『方法を読む』講談社、一九八〇年、一一〇頁。

(17) 大江健三郎『新しい文学のために』(岩波書店、一九八八年)、三九頁。

(18) 乾裕幸『俳句の現在と古典』平凡社、一九八八年、二七二頁。初出は『銀河系つうしん』八号(黎明舎、一九八七年)。なおこれに先立って一九八六年にもすでに、夏石番矢句集『メトロポリティク』の書評内で「異化現象」の語を用いている(『俳句の現在と古典』二六二頁)。

(19) どきどきする。

新聞もテレビもネットも今日は信用できない。

危険だから一日中部屋に籠もっていよう。

外の世界では、みんなが互いに嘘を吐きまくっているのだ。

(『によによによっ記』文藝春秋、二〇一五年、四頁)

(20) <https://bookshorts.jp/homurahiroshi/> (二〇一五年一月九日参照)

(21) 穂村弘・堀本裕樹『短歌と俳句の五十番勝負』(新潮社、二〇一八年)、二二一頁。なお対談の実施は二〇一八年

一月一日と記されている。

(22) 注21に同じ、二二六頁。

(23) <https://www.kateigaho.com/article/detail/31460/page2> (二〇一五年一月九日参照)

(24) 大江は『小説の方法』でも「異化」という方法論について、僕はここまでおもに言葉、語のレヴェルでそれを考えてきた(六頁)と述べているが、それに続けて「異化」の有効性の広さは、むしろそれが語のレヴェルから文学のジャンルのレヴェルにまで、またそれを越えてすら力を発揮するところにある(六頁)と述べており、「異化」概念の拡散や飛躍について否定的な態度は取っていない。

(25) 注17に同じ、四〇―四一頁。

(26) 桑原憂太郎「現代短歌の「異化」について〜まとめ」(二〇二二年二月) <https://kazehouse.hatenablog.com/entry/2022/02/20/140509> (二〇一五年一月九日参照)

- (27) 桑原は「異化」そのものは散文の表現技法でも可能であることを踏まえたうえで、現代短歌独自の「異化」の技法として「(語り手)の変化」「語順の入れ替え」「強引な接続」「流れる認識」の四つのパターンを挙げている。
- (28) 編集者の沢田康彦が設立した短歌結社。東直子と穂村弘が選者役を務めており、FAXを用いた歌会の様子は、『短歌はプロに訊け!』(本の雑誌社、二〇〇〇年)として書籍化された。女優の本上まなみ(ペンネームは鷺まなみ)、水泳選手の千葉すずなどが参加した。
- (29) 穂村弘『短歌という爆弾』(小学館、二〇〇〇年)二七―二八頁。
- (30) ヴィクトル・シクロフスキー『散文の理論』水野忠夫訳(せりか書房、一九七一年)、一五頁。
- (31) 除村・前掲論文、六四頁。
- (32) R・スタイナー『ロシア・フォルマリズム ひとつのメタ詩学』(勁草書房、一九八六年、山中桂一訳)でも「自動化」を訳語に選んでいる(四二頁)。
- (33) 注17に同じ、三六頁。
- (34) 注29に同じ、一一六頁。
- (35) 大塚誠也「既習者が再び短歌と出会うとき―導入の工夫と実作の手引き―」(早稲田大学国語教育学会『早稲田大学国語教育研究』第三七巻、八四―九三頁、二〇一七年三月)によれば三省堂『明解国語総合』(二〇一三年)と桐原書店『現代文B』(二〇一四年)に採録されている。
- (36) 次の三首が引用されている。
- ワイン開け去年とちがうクリスマス 一人淋しくイヴを待つ 悦子
- ぎこちない留守番電話のメッセージ 故郷の母のあたたかみ知る 美和子
- おはようといつもの時間にベルが鳴る今日もきつとすてきな一日 鶴見智佳子
- (37) 注29に同じ、一一五―一一六頁。
- (38) 穂村弘『整形前夜』(講談社、二〇〇九年)、一〇三頁。
- (39) 『短歌ください』(メディアファクトリー、二〇一二年)の「内容に関わらず、怖い歌は全ていい歌だと思うのです」(五〇頁)が初出。

(40) 東直子・佐藤弓生・石川美南『怪談短歌入門 怖いお話、うたいましょう』(メディアアファクトリー、二〇一三年)、倉阪鬼一郎『怖い短歌』(幻冬舎、二〇一八年)など、恐怖をもたらす短歌をテーマとした書籍がこの後にたびたび出版されている。

(41) 穂村弘『絶叫委員会』(筑摩書房、二〇一〇年) 九頁。

(42) 注41に同じ、二四頁。

(43) 注41に同じ、四四頁。

(44) 寺山修司『ポケットに名言を』(大和書房、一九七〇年)も原文の文脈をあえて切り捨てて「名言」として載せているものが多数あり、その影響かと考えられる。

(45) 注41に同じ、一九五頁。

(46) 注38に同じ、一七〇頁。

(47) ヴィクトル・シクロフスキー『散文の理論』(せりか書房、一九七二年)、一四一―一五頁。

(48) 穂村弘『鳥肌が』(PHP研究所、二〇一六年)、一一七頁。

(49) 注48に同じ、八〇頁。

(50) 河野裕子『異化作用——阿木津英の歌』(『短歌』一九八三年一〇月号)、七七頁。

(51) <https://www.ne.jp/asahi/digital/biscuit/times14.html> (二〇一五年一月九日参照)

(52) 一九七四年。穂村弘と同じ短歌同人誌「かばん」に、一九九七年から二〇一三年まで所属。二〇一一年に歌集『たんぼるぼる』を出版。その後は小説も執筆する。

(53) 『短歌ヴァーサス第二号』(風媒社、二〇〇五年)に掲載された穂村弘年譜(入谷いずみ編)によれば、札幌市で生まれた後に二歳で親の転職のため神奈川県相模原市に転居し、一〇歳で親の転職のため横浜市、一一歳でやはり親の転職のため名古屋市に転居したと記されている。また、「角川短歌」二〇一九年四月号のインタビューによると、穂村の父は北見市出身の鉾山技師で、道内の炭鉱で働きドイツ留学も経験したが、帰国すると石炭という資源がすでに過去のものになっていたため建設会社に転職したという。

(54) 王維亭『日本における中産階級の成立と発展——明治から今現在まで』(千葉大学人文公共学研究論集)第四一

卷、二〇二〇年、一一八一—一三〇頁。

(55) 穂村弘『短歌の友人』(河出書房新社、二〇〇七年)、七六頁。

(56) 寺井龍哉「修司と弘——『田園に死す』と『水中翼船炎上中』の時空」(『短歌史プロジェクト』第七号、二〇一九年)三頁。

(57) 注56に同じ、三頁。

(58) 注56に同じ、六頁。

(59) 「角川短歌」二〇一九年四月号の穂村弘インタビューでは筆者(山田)からの示唆と語られているが、筆者と穂村の初対面自体が二〇〇九年のことなのでその時点で『水中翼船炎上中』の中核的な連作である「楽しい一日」(『短歌研究』二〇〇七年二月号)などは発表済みである。

(60) 穂村弘の父親は二〇二二年に九一歳で亡くなっているので、一九三二年ごろの生まれである。

(61) 注56に同じ、九頁。

(62) ユキノ進『水中翼船炎上中』という冥界巡り(前編)『短歌研究』二〇二二年二月号、七六一—七七頁。

(63) 江藤淳は一九三二年生まれであり、寺山修司や穂村弘の父親と同世代である。

(64) ユキノ進『水中翼船炎上中』という冥界巡り(後編)『短歌研究』二〇二二年三月号、一六三頁。

(65) 夜ママとおまわりさんが話してるサララップのなかの赤飯

警官におほぎを食べさせようとした母よつやつやクワガタの夜  
の二首。

(66) 警官を首尾よくまいて腸詰めにかじりついている夜の噴水(『シンジケート』)

「あの警官は猿だよバナナ一本でスピード違反を見逃すなんて」(『ドライブドライアイス』)  
などが挙げられる。

(67) 岐阜県生まれの歌人。岐阜青年歌人会の機関誌「斧」の創刊メンバーとなり、二年ほど活動。一九六一年に第一歌集『顔をあげる』発表後短歌から離れ、一九七六年に第二歌集『前線』を発表。口語体の表現手法は俵万智に影響を与えた。

- (68) 「穂村弘インタビュー」(『角川短歌』二〇一九年四月号)、六一頁
- (69) 正木喜勝「出会いの偶然性を想像力によつて組織すること…寺山修司の演劇論を読む」(大阪大学大学院文学研究科 演劇学研究室『演劇学論叢』、二〇〇三年、二〇四―二二六頁)
- (70) 注69に同じ。

# 説話における天皇と僧 — 『今昔物語集』を中心に —

伊藤 翔太

はじめに

『信貴山縁起』<sup>(1)</sup>（一一五七—一一八〇年頃の成立か）には、次のような場面がある。

延喜の帝、御惱重く煩はせたまひて、さまざまの御祈りども、御修法・御読経など、よろづにせらるれど、さらにえをこたらせたまはず。ある人の申すやう、「大和に信貴といふところに、行ひて、里へ出づることもなき聖さぶらふなり。それこそ、いみじく尊く、験ありて、鉢を飛ばせて、ゐながらよろづのありがたきこと々もをしさぶらふなれ。それを召して祈らせさせたまはゞ、をこたらせたまひなむものを」と申しければ、「さは」とて蔵人を使にて、召しに遣はず。

行きて見るに、聖のさま、いと尊くてあり。「かうく、宣旨にて召すなり。参るべき」よしいへば、聖、「なにごとに召すぞ」とて、さらに動き気もなし。

あるとき延喜帝、すなわち醍醐天皇は病によつて様々な祈祷や修法・読經を行つたが、効果が見られず癒えることがなかった。そのとき、験ある僧として信貴山の修業僧命蓮のことを聞いた。醍醐は命蓮のもとに藏人を遣り、治病のために召そうとした。しかし、命蓮は藏人から宣旨によつて醍醐のもとに参上すべきことを聞いても、全く動く様子が無かつたとする場面である。

この後、命蓮は藏人から醍醐の治病のための召であることを聞くと、「それならば参上せずとも祈り申し上げましょう」とし、信貴山に居ながら醍醐の病を癒すことに成功する。となれば、当然醍醐は命蓮を尊ぶことになり、人を遣わして、命蓮を僧都・僧正とし、居所の寺には莊園を寄進しようとする。しかし命蓮は、次のように醍醐の意向を拒否するのであった。

まづ、「僧都、僧正、さらにくさぶらふまじきこと」ゝて、聞かず。「又、かゝるところに、庄などあまた寄りなどしぬれば、別当なにくれなど出で来て、なか／＼なかむつかしう、罪得がましきこと出で来。たゞかくてさぶらはむ」とて、やみにけり。

ここで命蓮は、醍醐の意向を拒否する理由について、僧都や僧正となり、莊園などが寄進されることで、「罪得がましきこと」、つまり成仏の妨げとなる罪を生じる恐れがあるためとしている。罪を生じる恐れがある理由について、日本思想大系本の注は、「世俗的な僧位や財産を手にする、罪業を得るおそれが生じてくる<sup>(2)</sup>」と解説する。しかし、そもそも天皇の召まで拒否する必要はあったのであろうか。また、具体的にはどのような罪業が生じる恐れがあるのだろうか。

実は、このような天皇の召や意向を拒否する僧の姿は『信貴山縁起』の命蓮以外にも、一二世紀前半の説話集の『今昔物語集』（以下『今昔』）に散見される。よつて、命蓮の験力の強さや非俗性を強調するという、『信貴山縁起』内の表現の問題に限られるものではないと考えられる。

次章で確認するとおり、『今昔』で天皇の召や意向を拒否する僧は、現世の名利を離れた修行者として語られている。小峯和明氏は、このような僧たちを「脱体制的・偽悪的」な聖（睿実、増賀など）とし、社会体制から逸脱した存在のようでありつつ、内実には衆生救済の理念を抱いて俗世と密接に関わりあっているとみる。特に、卷一二―三五の睿実（説話内容は次章で取り上げる）に関しては、反俗的な行動を見せつつも「最終的に王権を加護し、安泰を保つ役割を十二分に果たしている」と評価し、単に王法を拒絶・背反した聖とはみていない<sup>(3)</sup>。しかし、王法を補完する面があつたとしても、天皇の働きかけを拒否する態度が描かれる意味については検討すべきと考える。

本稿では、主に『今昔』の説話にみられる天皇の召や意向に対する僧の態度について分析し、説話において僧が天皇の召や意向を拒否するという態度をみせるようになる背景について検討していく。

## 一 天皇の召や意向に対する僧の対応変化

### 1 天皇に従う僧―平安時代初期以前

『今昔』において、僧が天皇の召や意向を受け、それに対応することがみられる説話について、時代設定が古い順にみていき、僧の対応について確認していきたい。

「はじめに」では、『今昔』には天皇の召や意向に従わない僧の姿が散見されたとしたが、実は『今昔』においては、古い時代設定の説話では僧は天皇の召や意向を拒否することなく従い、時代が下ると僧たちは天皇の召と意向に対して従わなくなるという、僧の天皇に対する態度の変化がみられるのである。以下、本章では説話本文を引用しながら、この変化について確認していきたい<sup>(4)</sup>。

① 卷十一—四「道照和尚亘唐伝法相還来語」

今昔、本朝天智天皇ノ御代ニ、道照和尚ト云フ聖人在マシケリ。(中略)

然ル間、天皇道照ヲ召、仰セ給テ云ク、「近来聞ケバ『震旦ニ玄奘法師ト云フ人有テ、天然ニ渡テ正教ヲ伝テ本国ニ返来ル』ト。其中ニ、大乘唯識ト云フ法門有り。(中略)然ルニ、其教法未ダ此ノ朝ニ無シ。然レバ、汝チ速ニ彼ノ国ニ罷渡テ、玄奘法師ニ会テ、彼ノ教法ヲ受ケ習テ可返来シ」ト。道照宣旨ヲ奉ハリテ、震旦ニ渡ヌ。

①は、聖武天皇が元興寺僧の道照を召し、震旦に渡つて玄奘から法相を受けてくることを命じて、道照が震旦で法相の教法を受けて日本に持ち帰つてくるという記述である。

② 卷十一—五「道慈亘唐伝三論帰来神叡在朝試語」

然レバ、天皇此ノ由ヲ聞シ食シテ、忽ニ神叡ヲ召シテ、王宮ニシテ彼ノ道慈ト合セテ被試ケルニ、道慈ハ本ヨリ智リ広カリケルヲ、上ニ震旦ニ渡テ止事無キ師ニ随テ、十六年ノ間学シタル者也。神叡ハ本ヨリ智リ広キ者トモ不聞エリケレバ、天皇、智恵出来タリトハ聞シ食セドモ、「何計カハ有ラム」ト思シ食ケルニ、道慈論義ヲ為タリケルニ、神叡答ヘケル様、実ニ昔ノ迦旃延ノ如シ。然テ、論義百条ヲ互ニ問ヒ答ケル、神叡ガ智恵朗ニ勝タリケレバ、天皇是ヲ感給テ、共ニ帰依シ給テ、各

封戸ヲ給テ、道慈ヲバ大安寺ニ令住メテ三論ヲ学シ、神叡ヲバ元興寺ニ令住テ法相ヲ学シケリ。

②には、聖武が智慧ある僧となったという神叡を召し、入唐経験もあり元より智慧の評判も高かった道慈と論議をさせることがみられる。論議の結果、聖武は両者に帰依して封戸を与え、道慈を大安寺僧として三論を学ばせ、神叡を元興寺僧として法相を学ばせることにした。

③ 卷十一—一三「聖武天皇始造東大寺語」

天皇悲ビ歎キ給フ事無限シ。其時ノ止事無僧共ヲ召テ、「何ガ可為キ」ト令問給フニ、申テ云、「大和国、吉野ノ郡ニ大ナル山有リ。名ヲバ金峰ト云フ。山ノ名ヲ以テ思フニ、定テ其山ニハ金有ラム。亦其山ニ護ル神靈在マスラム。其レニ令申可給キ也」ト。

③は、大仏や堂塔の器物に塗るための金の不足を歎いた聖武が、当時の「止事無僧」たちを召し、金の不足に対する対応策を求めている。すると僧たちは、金峰山の神靈に祈請すべきことを奏上した。

④ 卷十四—四一「弘法大師修請雨経法降雨語」

今昔□□天皇ノ御代ニ、天下旱魃シテ、万ノ物皆焼テ枯レ尽タルニ、天皇此レヲ歎キ給フ。大臣以下ノ人民ニ至マデ、此ヲ不歎ズト云フ事無シ。

其ノ時ニ、弘法大師ト申ス人在マス。僧都ニテ在シケル時、天皇大師ヲ召テ仰セ給テ云ク、「何ニシテカ此ノ旱魃ヲ止テ、雨ヲ降シテ世ヲ可助キ」ト。大師申テ云ク、「我が法ノ中ニ雨ヲ降ス法有リ」ト。天皇、「速ニ其ノ法ヲ可修シ」トテ、大師ノ言バニ随テ、神泉ニシテ請雨経ノ法ヲ令修メ給フ。

④では天皇名が欠字となっているが、新編日本古典文学全集は、『日本後紀』逸文や『御遺告』以下の空海伝類などから、本話を天長元（八二四）年、または同四年の請雨経修法時の靈験を伝えたものと推定

し、欠字には「淳和」が入るとみている。その天皇に空海が召され、降雨の方法を問う。すると空海は自身の法の中に降雨の法があると言ひ、天皇はそれを修させたという。

⑤卷一三―三三「竜聞法花読誦依持者語降雨死語」

今昔、 天皇ノ御代ニ奈良ノ大安寺ノ南ニ竜苑寺ト云フ寺有リ。其ノ寺ニ一人ノ僧住ケリ。年来法花経ヲ読誦ス。(中略)

而ル間、一ノ竜有リ。此ノ講経読誦ノ貴キ事ヲ感ジテ、人ノ形ト成テ、此ノ講経ノ庭ニ来テ、毎日ニ聴聞ス。(中略)

其ノ時ニ、天下旱魃シテ雨不降ズシテ、五穀皆枯レ失ナムトス。貴賤ノ人皆此レヲ歎キ悲ム事無限シ。此レニ依テ、人天皇ニ奏シテ云ク、「大安寺ノ南ニ寺有リ。其ノ寺ニ住ム僧、年来竜ト心ヲ通シテ、親昵ノ契ヲ結ベリ。然レバ、彼ノ僧ヲ召シテ、『竜ニ雨ヲ可降キ由ヲ可語シ』ト可被宣下也」ト。

天皇此ノ事ヲ聞キ給テ、宣旨ヲ下シテ、件ノ僧ヲ召ス。僧宣旨ニ随テ参ヌ。天皇僧ニ仰セテ宣ハク、「汝チ年来法花経ヲ講ズルニ依テ、竜常ニ其ノ所ニ来テ法ヲ聞ク。竜汝ト語ヒ深キ由、世ニ聞エ有リ。(中略) 汝チ速ニ法花経ヲ講ゼムニ、其ノ竜必ズ来テ法ヲ聞カムニ、竜ヲ語ヒテ、雨ヲ可降シ。若シ此レヲ不叶ズハ、汝ヲ追却シテ、日本国ノ内ニ不可令住ズ」ト。

僧勅命ヲ奉リテ、大キニ歎テ、寺ニ返テ、竜ヲ請ジテ此ノ事ヲ語フ。竜此ノ事ヲ聞テ云ク、「我レ年来法花経ヲ聞テ、悪業ノ苦ビヲ拔テ、既ニ善根ノ榮ビヲ受タリ。願クハ、此ノ身ヲ棄テ、聖人ノ恩ヲ報ゼムト思フ。但シ、此ノ雨ノ事我ガ知ル所ニ非ズ。大梵天王ヲ始メトシテ、国ノ災ヲ止メムガ為ニ雨ヲ不降ザル也。其レニ、我レ行テ雨戸ヲ開テハ、忽ニ我ガ頸ヲ被切レナムトス。(中略) 願

クハ、聖人我ガ屍骸ヲ尋テ、埋テ、其ノ上ニ寺ヲ起テヨ（中略）ト。僧此ノ事ヲ聞テ、歎キ悲ムト云ヘドモ、勅命ヲ恐ル、ニ依テ、竜ノ遺言ヲ皆受テ、泣々ク竜ト別レヌ。

⑤は、国内が旱魃となった際に、天皇が竜と親交がある僧の話を書いてその僧を召し、竜の力を利用して雨を降らせようとする話であるが、天皇名は欠字であり推定もし難い。ただし、①～④説話と同じく、僧は天皇の召に応じて参上して天皇の命令に従っていることから、平安時代初期以前の時代が想定されているとみておく。

以上の①～⑤では、天皇の召や意向に対して僧が拒否することなく対応する姿がみられた。しかし、次にみる説話からは、こうした天皇の働きかけと僧の対応の関係が変化していく。どのように変化するのか先に述べておくと、『信貴山縁起』の命蓮のように、天皇の召や意向に容易に従わない態度が見られるようになるのだが、以下に説話本文を引用しつつ確認していきたい。

## 2 天皇と距離を置く聖人たち―九世紀半ば以降

### ⑥ 卷二八―二四「穀断聖人持米被咲語」

今昔、文徳天皇ノ御代ニ、波太岐ノ山ト云フ所ニ聖人有ケリ。穀ヲ断テ年来ヲ経ニケリ。天皇此ノ由ヲ聞食テ、召出シテ、神泉ニ被召居テ、帰依セサセ給フ事無限シ。此ノ聖人永ク穀ヲ断タル者ナレバ、木ノ葉ヲ以テ食トシテナム有ケル。（中略）

其ノ時ニ殿上人共頼咲テ、「米屎ノ聖々」ト呼ビ呼隍テ咲ケレバ、聖人恥テ逃テ去ケリ。其ノ後、行キ方ヲ人不知ズシテ止ニケリ。

早ウ、人ノ謀テ被貴ムトテ思テ密ニ米ヲ隠シテ持リケルヲ不知シテ、穀斷ト知テ、天皇モ帰依セサセ給ヒ人モ貴ビケル也ケリ、トナム語り伝ヘタルトヤ。

⑥は、「波太岐ノ山」に住む穀斷ちの「聖人」が文徳天皇に召され、神泉苑に住まわせられて帰依を受けたという記述から始まる。しかし、中略部分では「聖人」の穀斷ちは偽りであったことが若き殿上人らによつて暴かれる。そして、話の評語では、「早ウ、人ノ謀テ被貴ムトテ思テ密ニ米ヲ隠シテ持リケルヲ不知シテ、穀斷ト知テ、天皇モ帰依セサセ給ヒ人モ貴ビケル也ケリ」とされ、「聖人」は、人に貴ばれたい、と思ひ穀斷ちを偽つていたとする。

この話では、「聖人」は天皇の召に従つてはいるが、その「聖人」が実は名譽欲に驅られて穀斷ちを偽つていた僧とされていることには注意しておきたい。

⑦卷二〇―七「染殿后為天宮被燒乱語」

今昔、染殿ノ后ト申スハ、文徳天皇ノ御母也。良房大政大臣ト申ケル関白ノ御娘也。形チ美麗ナル事、殊ニ微妙カリケリ。而ルニ、此后常ニ物ノ氣ニ煩ヒ給ケレバ、様々ノ御祈共有ケリ。其中ニ世ニ験シ有ル僧ヲバ召シ集テ、験者修法有ドモ、露ノ験シ無シ。

而ル間、大和葛木ノ山ノ頂ニ、金剛山ト云フ所有リ、其山ニ一人ノ貴キ聖人住ケリ。年来此所ニ行テ、鉢ヲ飛シテ食ヲ継ギ、瓶ヲ遣テ水ヲ汲ム。如此ク行ヒ居タル程ニ、験無並シ。然レバ、其聞エ高成ニケレバ、天皇并ニ父ノ大臣、此由ヲ聞食シテ、彼レヲ召シテ、此ノ御病ヲ令祈メム」ト思食シテ、可召キ由被仰下ヌ。使聖人ノ許ニ行テ、此由ヲ仰スルニ、聖人度々辞ビ申スト云ヘドモ、

宣旨難背キニ依テ、遂ニ参ヌ。御前ニ召テ、加持ヲ参ルニ、其験シ新タニシテ、后一人ノ侍女忽

二狂テ哭キ嘲ル。侍女ニ神詔テ走り叫ブ。聖人弥ヨ此ヲ加持スルニ、女被縛テ打チ被賣ル間、女ノ懷ノ中ヨリ一ノ老狐出テ、転テ倒レ臥テ、走り行事能カラズ。其時ニ、聖人ヲ以テ狐ヲ合繫テ、此ヲ教フ。父ノ大臣此レヲ見テ、喜給フ事無限シ。后ノ病、一兩日ノ間ニ止給ヒヌ。

大臣此レヲ喜給テ、「聖人暫ク可候キ」由ヲ仰セ給ヘバ、仰ニ随テ暫ク候フ間、(中略) 聖人髯ニ后ヲ見奉ケリ。見モ不習ヌ心地ニ、此ク端正美麗ノ姿ヲ見テ、聖人忽ニ心迷ヒ肝碎テ、深ク后ニ愛欲ノ心ヲ発シツ。

⑦では、染殿後の病に際し、文徳天皇と後の父藤原良房が金剛山の「聖人」を召すことがみられる。「聖人」は度々召を拒んでいたものの、最終的には宣旨に従って参内したとする。「聖人」は後の病を癒すことに成功し、良房は大いに喜び「聖人」にしばらくとどまるように命ずる。しかし、「聖人」は、この滞在がきっかけで後の美しい姿を垣間見ることになり、思慮分別を失うほどの愛欲の心を生じてしまう。この後、引用は省略したが、「聖人」は後の御帳に侵入し、后を抱きすくめようとしたところ、捕らえられて牢獄に入れられてしまう。そして、后への思いが叶わないことを嘆きながら獄中で餓死し、たちまちに鬼となつてしまったことが語られる。

この話では、最終的には召に従っているものの、当初は「聖人」が天皇と良房の召を拒む姿勢をみせていたこと、良房の命に従つて内裏に滞在し続けた結果、鬼となるきっかけを得てしまっていることに注意しておきたい。

⑧卷十四—三四「老演僧正誦金剛般若施靈驗語」

今昔、山崎ニ相応寺ト云フ寺有リ。其ノ寺ニ老演ト云フ僧住ケリ。(中略)

而ル間、或人奏シテ云ク、「山崎ト云フ所ニ相応寺ト云フ寺有り。其ノ寺二年來住シテ、日夜ニ金剛般若經ヲ誦誦スル聖人有ナリ。名ヲバ壹演ト云フ。現世ノ名利ヲ離テ、後世ノ菩提ヲ願フ者也。彼レヲ召テ令祈バ、必ズ靈驗掲焉ナラム」ト。天皇然レバ可召キ由ヲ被仰下テ、使ヲ遣スニ、即チ召ノ使ニ具シテ參レリ。然レバ、仁寿殿ニ召シ上テ、彼ノ隼ノ巢ヲ昨タル間ニテ、金剛般若經ヲ令転読ム。四五卷許ヲ誦スル程ニ、忽ニ隼四五十許外ヨリ飛ビ來テ、隼毎ニ巢ヲ昨テ飛ビ去ヌ。其ノ時ニ、天皇壹演ヲ礼シテ、貴ビ給フ事無限シ。賞ヲ給ハムト為ルニ、不承引ズシテ返ヌ。

其ノ後、貴キ思ヘ高ク成テ被帰依ル、程ニ、天皇ノ母方ノ祖父、白川ノ大政大臣ト申ス人、老体ノ上ニ重キ病ヲ受テ日來ヲ經ニ、方々ノ御祈共有リ。就中、貴キ思エ有止事無キ僧共ヲ召テ、殊ニ令祈メ給フニ、露ノ驗無シ。而ルニ、天皇ノ、前ノ隼ノ事ヲ思食テ、壹演ヲ召テ遣ス。壹演召ニ隨テ參テ、大臣ノ御枕上ニシテ、金剛般若經ヲ誦誦スル、数卷ニ不及ザル程ニ、大臣御病ハ驗給ヌ。其ノ時ニ、天皇弥ヨ壹演ヲ貴ビ給フ事無限シ。感ニ不堪シテ遂ニ權僧正ニ被成ヌ。

⑧では、隼の怪を恐れた清和天皇が壹演の評判を聞いて仁寿殿に召しており、壹演は召に従つて参上している。そして、壹演金剛般若經を転読したところ隼は巢を啜えて飛び去つたため、天皇は壹演を貴び賞を与えようとしたが、壹演は辞退して去つた。その後、藤原良房が重病となり、天皇は再び壹演を召す。壹演は召に従つて参上して良房のために金剛般若經を誦誦すると良房は回復したため、天皇はますます壹演を貴び權僧正にしたとする。

⑨卷十二—三三「多武峰増賀聖人語」

今昔、多武ノ峰ニ増賀聖人ト云フ人有ケリ。(中略)

法花経ヲ受ケ習ヒ、頭蜜ノ法文ヲ学スルニ、(中略) 学問ノ隙ニハ、必ず毎日ニ法花経一部、三時ノ懺悔ヲゾ不断ザリケル。

而ル間ニ、道心堅固ニ発ニケレバ、現世ノ名聞利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思ケル間ニ、カク止事無キ学生ナル聞工高ク成テ、召シ仕ハムト為レドモ、強ニ辞シテ不出立ズシテ、思ハク、「我レ、此ノ山ヲ去テ多武ノ峰ト云フ所ニ行テ、籠居テ静ニ行テ、後世ヲ祈ラム」ト思テ、師ノ座主ニ暇ヲ請フニ、座主モ免サル、事無シ。傍ノ学生共モ強ニ制止スレバ、思ヒ歎テ心ニ狂氣ヲ翔フ。(中略)

而ル間、貴キ聖人也ト云フ事世ニ高ク聞エテ、冷泉院、請ジテ御持僧トセムト為ルニ、召ニ随テ參テハ、様々ノ物狂ハシキ事共ヲ申シテ逃テ去ニケリ。如此ク、事ニ触レテ狂フ事ノミ有ケレドモ、其レニ付テ貴キ思エハ弥ヨ増リケリ。

⑨では、世に「貴キ聖人」と評判になつた増賀を、冷泉天皇<sup>(5)</sup>は護持僧にしようとしている。増賀は召に従つて参上はするが、様々な物狂わしいことなどを言つて逃れていたとする。

⑩卷十二—三五「神名睿実持経者語」

今昔、京ノ西ニ神明ト云フ山寺有リ。其二睿実ト云フ僧住ケリ。(中略)

而ル間、円融院ノ天皇、堀川ノ院ニシテ重キ御惱有リ。(中略) 或ル上達部ノ奏シ給ハク、「神明ト云フ山寺ニ、睿実ト云フ僧住シテ、年来法花経ヲ誦シテ他念無シ。彼レヲ召テ御祈有ラムニ何ニ」ト。亦或ル上達部ノ宣ハク、「彼レ道心深キ者ニテ、心ニ任セテ翔ハゞ、見苦キ事ヤ有ラムト為ラム」ト。亦他ノ人ノ云ク、「験ダニ有ラバ、何ナリトモ有ナム」ト被定テ、藏人□□ヲ以テ召シニ遣ス。藏人

宣旨ヲ奉テ、神明ニ行テ、持経者ニ会テ、宣旨ノ趣ヲ仰ス。持経者ノ云ハク、「異様ノ身ニ候ヘバ、参ラムニ憚リ有リト云ヘドモ、王地ニ居乍ラ何デカ宣旨ヲ背ク事有ラム。然レバ可参キ也」ト云テ出立テバ、藏人定メテ一切ハ辞バムズラムト思ツルニ、カク出立テバ、心ノ内ニ喜ビ思テ、同車ニテ参ル。藏人ハ後ノ方ニ乗レリ。

而ルニ、東ノ大宮ヲ下リニ遣セテ行クニ、土御門ノ馬出シニ、薦一枚ヲ引廻シテ病人臥セリ。見レバ、女也。(中略) 藏人ノ云ク、「此レ極テ不便ノ事也。宣旨ニ随テ参給タラバ、此許ノ病者ヲ見テ逗留シ不可給ズ」ト。持経者、「我君々々」ト云テ、車ノ前ノ方ヨリ踊リ下ヌ。

「物ニ狂フ僧カナ」ト思ヘドモ、可捕キ事ニ非ネバ、車ヲ搔キ下シテ、土御門ノ内ニ入テ、此ノ持経者ノ為ル様ヲ見立レバ、持経者然許穢氣ナル所ニ臥タル怖シ氣ナル病人ニ、糸睦マシゲニ寄テ、胸ヲ搜リ頭ヲ抑ヘテ病ヲ問フ。(中略)

然テ後ニ、藏人ノ許ニ来テ、「今ハ然ハ参リ給ヘ。参ラム」ト云テ、車ニ乗テ内裏ニ参タレバ、御前ニ召シツ。「経ヲ誦シ給ヘ」ト仰セ有レバ、一ノ卷ヨリ始テ法花経ヲ誦ス。其ノ時ニ、御邪氣顯レテ、御心地宜ク成セ給ヒヌ。然レバ、即チ僧綱ニ可被成キ定メ有リト云ヘドモ、持経者固ク辞シテ逃ルガ如クシテ罷出ニケリ。

⑩では、円融天皇が病となり、様々な祈祷があつたが効果がなかつたため、法華経持経者として評判のあつた睿実を召すことにし、藏人が宣旨を奉じて睿実のもとを訪れている。藏人は睿実が召に応じないことを予想していたが、それに反して睿実は「王地にいながら、どうして宣旨に背くことができようか」として召に従い出立した。ところが、出立した睿実は道中で病人と出会い、「この病人に物を食わせ

てから夕方に参内する」と言つたため、藏人は「宣旨に従つて来たのなら、この病人のために逗留すべきではない」としたものの、睿実<sup>ニ</sup>は結局病人を看病してから参内した。御前に召された睿実<sup>ニ</sup>は法華經を讀み、円融の病を治した。これによつて僧綱とする定があつたが、固辞して逃げるように退出したとする。

⑧から⑩の説話では、僧が天皇の召に容易に従わない、もしくは召に応じたとしても役目を終えた後は天皇の意向を拒否して立ち去ることがみられている。これらの説話の僧たちは、いずれも都から離れた場所に居所を置いて修行を積んでいた「聖人」・「持経者」である。彼らは、「現世ノ名利ヲ離テ、後世ノ菩提ヲ願フ者」(⑧ 壹演)、「現世ノ名聞利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思ケル」(⑨ 増賀)、「年来法花経ヲ誦シテ他念無シ」・「道心深キ者」(⑩ 睿実)とされ、世俗的な名譽にとらわれない求道者として語られている。⑦の鬼となつた「聖人」も、「年来此所(金剛山)ニ行テ、鉢ヲ飛シテ食ヲ継ギ、瓶ヲ遣テ水ヲ汲ム。如此ク行ヒ居タル程ニ、驗無並シ」とされ、世俗から距離を置いていた僧とされているが、良房の命によつて内裏に滞在し続けた結果、鬼となつてしまう結果を招いている。これが壹円・増賀・睿実らとの違いであつたといえるが、この点は次章の検討において再び取り上げたい。

⑪卷二〇—四「祭天猗僧参内裏現被追語」

今昔、円融院ノ天皇ノ久ク御惱有ケルニ、様々ノ御祈共有ケリ。就中ニ御物氣ニテ有ケレバ、世ニ驗シ有ト聞ユル僧ヲバ、員ヲ尽シテ召テ、御加持ヲ参ニ、露其ノ驗シ無シ。

而レバ、極テ恐レサセ給フ間、人有テ奏テ云ク、「東大寺ノ南ニ高山ト云フ山有リ。其山ニ仏道ヲ修行シテ、久ク住スル聖人有ナリ。行ヒノ薰修積テ、野ニ走ル獸ヲ加持シ留メ、空ニ飛ブ鳥リ加持シ落スナリ。彼レヲ召テ、御加持ヲ奉セバ、必ず其驗シ候ヒナム」ト。天皇此ヲ聞シ食シテ、即チ

可召キ由ヲ被仰下テ、使ヲ遣シテ召スニ、使ニ随テ參ル。(中略) 既ニ内ニ參ヌレバ、御前ニ召テ、御加持參ニ、幾程ヲ經ズシテ、御病搔巾フ様ニ愈セ給ヒヌ。(中略)

而ル間ニ、此法師俄ニ帳ノ外ニ仰様ニ投被伏ヌ。上達部殿上人此レヲ見テ、「此ハ何ニ」ト怪シブ。天皇モ驚キ給ヌ。此法師投ゲ被伏テ、吉ク打テ被責テ後、云ク、「助ケ給ヘ。今度ノ命ヲ生ケ給ヘ。我年来高山ニ住シテ、天狗ヲ祭ルヲ以テ役トシテ、『一切レ人ニ貴バセ給ヘ』ト祈リシ驗シニ、此ク被召テ參タル也。此レ大キナル理也。今ニ至テハ大ニ懲リ候ヒヌ。助ケ給ヘ」ト

⑪では、円融天皇の病に東大寺南の高山に住む「聖人」が召され、御前に参上して加持をしたところ、忽ちに病が癒えたとする。しかし、「而ル間ニ」の前の中略部分には、あっさり病を癒した「聖人」を怪しんだ余慶や寛朝が正体を暴こうと、几帳の内にいる聖人に向かって加持をする場面が語られており、それによって「聖人」は「天猗」を祭っていた僧であったことが判明する。そして、「聖人」は「天猗」に「一切レ人ニ貴バセ給ヘ」と、人に貴ばれることを祈っていたとされるが、このような「聖人」の姿は、⑥の穀断ち僧が「人ノ謀テ被貴ム」との思いがあったとされていることに通ずる。

ここで、本章での説話の検討を整理しておく。平安時代初期までの①～⑤の僧たちは、天皇の召や意向に従っていた。しかし、時代が下ると、⑧⑨⑩でみられた世俗的な名譽にとられない聖人たちが天皇の召や意向に容易に従わないようになる。一方で、同じく聖人とされる僧でも、天皇の召に素直に従う者は、⑥や⑪の「聖人」のように名譽欲のある僧として語られていた。そして、このような僧の態度の変化の画期は、⑥⑦⑧の説話の時代、つまり九世紀半ばとなる。この時期になると、聖人とされながらも徳を偽っていた僧(⑥)や天皇の意向を拒否する僧(⑦⑧)が登場し始めるのである。

次章以降、本章で確認した僧の態度の変化の背景について検討していきたい。

## 二 「魔縁」としての王法への接近

説話における僧の天皇に対する態度の変化について、王法（天皇・朝廷）と仏法の関係変化という視点で考えてみたい。

巻一一一から巻二二一〇の本朝仏法史にあたる話群では、王法の支配の下で日本の仏法が確立・発展していく様が語られており、ほとんどが九世紀半ばまでの時代設定の説話である<sup>(6)</sup>。しかし、時代が下るとこうした王法と仏法の関係は変化していく。例えば、巻三二には王法が仏法に干渉して統治しようとする姿がみられ<sup>(7)</sup>、その干渉と統治が仏法の世界を破綻させる可能性を秘めていることがみられるという<sup>(8)</sup>が、それらがみられる説話の時代設定は、撰関期にあたる一〇世紀後半から一一世紀前半となっている。

例えば二三話では、慶命が藤原道長との人脈を利用して律師となり、多武峯の延暦寺末寺化も道長に頼んで実現させたことが語られている。王法に接近して世俗的な願望を叶えていく僧の姿がみられるが、川上知里氏がいうように、このような王法への接近は仏法にとつて危険を孕むものであった。二〇話をみてみると、靈験ある巖を有する靈巖寺の別当が、「行幸があれば自分は僧綱になれる」と思い、巖を行幸における御輿の通行に邪魔と思ひ破壊した結果、寺が荒廃したことが語られている。

このように、時代が下ると王法が仏法に関わることで、僧の世俗化や寺院の荒廃など、仏法への悪影響をもたらす可能性も生まれていた。「はじめに」で取り上げた『信貴山縁起』の命蓮も、天皇の僧都・僧正への任命や居所の寺への荘園の寄進の意向を、「罪得がましきこと」も出てくるだろう、として拒否していた。王法が仏法に関わることで仏法が悪影響を受ける可能性が生じたことは、前章で確認した時代設定が九世紀半ば以降の説話になると、聖人たちが天皇の意向に容易に従わないという態度をとるようになったことに関係しているのではないか。

このように考える場合、巻二―三四の記述が注目される。この話では、退位後の円融院が重病となつたため、法華持者として評判のあつた性空が召されることになるのだが、院の召使が房を訪れてその旨を伝えたところ、性空は「我レ、大魔障二値タリ。助ケ給ヘ。十羅刹」と泣き叫んだとされる。在位中の天皇ではなく退位後の院の召であるが、性空は召を「大魔障」、すなわち仏道修行に対する妨げと嘆いたのである。この話からは、王法が仏法に関わるのが悪影響となり得る時代のもつとで、聖人は王法との接近を仏道修行の妨げとして警戒するようになったために、天皇の召や意向に従わないようになった、と考えられるのである。

ちなみに、三二―四では、道心があり病を契機に出家した絵師の巨勢広高が、病が治つたことにより「公」に還俗を命じられ、嘆き悲しみながらも宣旨には逆らえないとして還俗させられている。ここでは、道心あつて出家した者が王法の干渉によつて世俗に引き戻される姿が語られており、まさに王法による仏道修行を妨げる行為といえよう。

また、性空の言う「大魔障」は単なる仏道修行の妨げには終わらない結果をもたらすものと考えられる。

これに関して、『今昔』(一二世紀前半)よりも一世紀ほど成立年代は下るが、『発心集』<sup>9)</sup>(二三世紀前半)をみてみると、僧の世俗への接近が修行の妨げとなる「魔縁」に関する記述が散見されるため参照してみたい。

例えば、俗人に仏の供養を依頼された増賀は、説法すべきことなどを供養に向かう道すがら考えていた自分自身に対して、「名利を思ふにこそ。魔縁便りを得てげり」との思いを抱き(一一五)、徳を隠していた時料上人は、結縁を希望する男に法華経読經の行を目撃された際に、「此の度生死を離れんと思ふに、此の志を人にしられなば、魔縁も力を得、信施も殊に重かるべし」とし、障りが生じることを避けるために隠徳していたとされ(八一―)、僧たちが「魔縁」を警戒していたことが窺える。さらに同話では、「今の世は天魔・盗人みちみちて、人の善根をうかがひさまたぐ」とし、魔縁は招きやすいものとしたうえで、「末世の比丘あらそひ深く、名利にまどへる故に、みづからなき徳を称す。妄語の中にすぐれたる重罪なり」として、末世の僧たちは争い深く、名利に惑い偽りの徳を称するといひ、これを妄語の中でも特に重い罪であるとする(八一―)。そして、「ふかく名聞に住して、なき徳を称じて人をたぶるかして」堂と仏像を造つた上人は天狗となつたとされている(八一―)。つまり、僧たちは「魔縁」に接触することによって名利に惑つて偽りの徳を称するという重罪を犯し、仏法に敵対する存在である天狗に墮ちてしまう可能性があつたのである。『信貴山縁起』の命蓮が天皇の意向を拒否する際に述べた「罪得がましきこと」の罪とは、具体的には、世俗的な僧位や財産得ることで、名利に惑つて偽りの徳を称してしまうという罪なのではないだろうか。実際、一二世紀・一三世紀の僧たちのなかには、無道心で傲慢な僧は天魔(天狗)となるという認識があり(貞慶『魔界回向法語』、慶政『比良山古人靈託』、無

住『沙石集』など)<sup>(10)</sup>、天魔の活動も警戒されていた<sup>(11)</sup>。

以上の『発心集』の記述も手掛かりとするならば、魔障・魔縁という仏道修行の妨げを招いて名利に惑い、さらには天狗となってしまうことに繋がる行為であるために、聖人たちは王法との接近を拒んでいたのである。確かに『今昔』においても、滝口の武士道範が天狗を祭る術を習得したことを語る巻二〇―一〇の評語に、「仏道ヲ棄テ、魔界ニ趣カム事、此、宝ノ山ニ入りテ手ヲ空クシテ出、石ヲ抱テ深キ淵ニ入テ命ヲ失フガ如シ」とあり、天狗を祭る術の習得が「仏道を捨てて魔界に趣く行為」と非難されている。説話の聖人たちが天皇の意向に容易に応じない態度をとったことが描かれる背景には、王法との接近が仏道修行の妨げとなり、さらには天狗となることにも繋がる、という一二世紀の僧たちの間に存在した思想があったと考える。一方で、前章で引用した⑥⑪説話にみられたすんなりと王法に接近する聖人は、まさに名利に惑い、偽りの徳を称する僧たちであった。

このように考えると、前章の⑦説話の聖人が、後の病を癒す役目を終えた後も内裏に滞在し続けた結果、鬼となってしまう結末を招いていることが注目される。鬼も墮落した僧が変じたという点において天狗と同類の存在といえよう<sup>(12)</sup>。この話には、世俗から距離を置いて修行を積む「聖人」であっても、王法とむやみに接近することによって道はずしてしまふという可能性が示されている。

よって、王法との接近により仏道修行が妨げられ、鬼や天狗になつてしまふような事態を避けるには、天皇の召を拒否し、そもそも王法と接近する機会自体を作らないことが最も確実な対策だったと考えられる。一方で、召を拒否しきれない場合には、ひとまずは召に応じて参上し、治病などの要求に対応した後は速やかに天皇のもとを去り、継続的に王法との関係を持たないようにするという方法も考えられ

る。このような方法は、特に前章引用史料⑧の壹円や⑩の睿実が召には従ったものの、褒賞や僧綱への補任を拒否したという姿に示されていると考える。

それでは、なぜ仏法にとって王法への接近が危険を孕む時代（前章・本章の検討によれば九世紀半ば以降）とは異なり、『今昔』にみられる奈良時代や平安時代初期の僧たちは天皇の召や意向に従い、王法との接近を厭わなかった（と描かれた）のであろうか。一つには、平安時代後期の者たちは、彼らの資質を優れたものとし、王法との関係を持つていたとしても名利に惑うことや憍慢になることもなく、仏道修行の妨げを生じる危険性が無かったとみていたためだと考える。『発心集』は、「悟り深く徳ある人は、諸天の擁護ひまなく」という理由で、天魔も悪事を働くことができないとしており（八一）、平安時代初期以前は「悟り深く徳ある」僧の時代と考えられたのではないか。もう一つには、律令制のもとで王法が僧の出家や修行を統制していたという時代認識の存在も考えられる。『今昔』巻一七―四九は金就行者の行を知った聖武天皇が、行者を讃えて出家を許可する説話であるが、この話の評語は「古へハ出家ヲモ、天皇ノ許サレ無クシテハ輒ク為ル事無カリケレバ、然モ懇ニ祈リ請ケル也ケリ」とし、天皇が出家を統制していたために行者は熱心に祈請したのだとしている。『今昔』の日本仏法史（巻一一―一〇）をみれば、平安時代初期までは王法と僧が接近することで日本仏法が確立されていったことが描かれており、この時期の両者の接近は仏法にとって好ましいものであったともいえる。

## おわりに

以上、本稿では、主に『今昔』の説話にみられる天皇の召や意向に対する僧の態度について分析し、天皇の召や意向を拒否するという態度がみられるようになる背景について検討した。

一章では、『今昔』における、僧が天皇の召や要請を受けてそれに対応することがみられる説話を確認した。そこでは、奈良時代から平安時代初期の僧たちは天皇の召や要請に従っていたが、九世紀半ば以降には世俗的な名譽にとらわれない聖人たちが天皇の意向に容易に従わないようになっていたことを確認した。一方で、聖人とされる僧でも天皇の召に素直に従う者は、名譽欲のある僧として語られていることも指摘した。

二章では、先行研究から、説話形成の背景には王法と仏法の関係変化があつたと推測したうえで検討を進めた。背景となつた王法と仏法の関係変化とは、奈良時代から平安時代初期は、仏法は王法と接近することで確立・発展していく時代であつたが、九世紀半ば以降は、王法への接近が僧の世俗化や寺院の荒廃などの仏法界への悪影響をもたらす可能性がある時代となつた、というものであつた。このような時代認識のもとで、九世紀半ば以降の時代設定を持つ説話において、天皇の召や意向を拒否して王法との距離を取ろうとする僧の姿が語られるようになったとし、具体的な説話形成の背景に、一二世紀の僧たちの、「王法との接近が仏道修行の妨げとなり、名利に惑って偽りの徳を称する罪を犯すことで天狗となってしまう」という思想の存在を指摘した。

しかし、本稿で確認したように聖人たちが天皇の召や意向に従わなくなる一方で、『今昔』においては「公」に従う仏法の姿もみられている。「公」とは「天皇」もしくは「朝廷」の意で解される語である<sup>13</sup>。例えば巻二一―五では、将門の乱が発生したことに對して、「公ケ」が顕密寺院に祈禱を命じている。また、巻三二―四では、出家後に病が癒えた巨勢広高に「公」が還俗を命じ、巻三一―二四では、比叡山に祇園が強引に末寺とされた、という山階寺大衆の訴えを聞いて、「公」が「御沙汰」を下そうとしている。各話の時代設定は、巻二一―五が朱雀天皇、巻三一―四が一条天皇の時代で、巻三一―二四は天皇名が記されていないが、良源が天台座主であったときの話である。よって、康保三（九六六）年八月から寛和元（九八五）年一月の時代が想定され、天皇でいえば村上・冷泉・円融・花山の時代にあたるため、三話はいずれも一〇世紀以降の時代設定といえる。この三話では、「公」が寺院や僧に對して指示や介入をしており、仏法側はそれらに従っているのである。

九世紀半ば以降の時代設定を持つ説話において、聖人のような王法と距離を置く仏法が描かれる一方で、王法と相依する顕密仏教の姿も描かれているのだが、この意味については改めて論じてみたい。

（いとう しょうた・文学研究科日本文化専攻博士課程三年）

〔註〕

- (1) 『信貴山縁起』は日本思想大系本(桜井徳太郎ほか校注『寺社縁起』(岩波書店、一九七五年))による。
- (2) 注(1) 桜井徳太郎ほか校注文獻二六頁。
- (3) 小峯和明「本朝〈仏法部〉の組織」(同『今昔物語集の形成と構造』所収、笠間書院、一九八五年、初出一九八三年)。
- (4) 以下、『今昔』本文の引用は新編日本古典文学全集本(馬淵和夫ほか校注訳『今昔物語集』①・②・③・④〈小学館、一九九九年・二〇〇〇年・二〇〇一年・二〇〇二年〉)によるものとし、説話内容に関しては、新日本古典文学大系本(『今昔物語集』三・四・五〈岩波書店、一九九三年・一九九四年・一九九六年〉)も参照した。
- (5) 本文には「冷泉院」とあるが、天皇の身体護持の祈禱を行う護持僧にしようとしたとあるため、退位した院としてはなく、在位中の天皇として増賀を召そうとしたものと理解する。なお、先行説話の鎮源『大日本国法華験記』下二八二には、「冷泉の先皇」とある。
- (6) 文中の語や文脈から時代設定を推定し得る場合、仏法史に含まれる説話の下限は卷一一―二八・卷二二―一〇の清和天皇(位八五八―八七六年)の時代もしくは、卷一一―三六の「明蓮」を命蓮とするならば、その活動時期から一〇世紀前半となる。しかし、これらの説話以外の多くは九世紀半ばまでの時代設定と推定される。前田雅之氏は、聖徳太子(五七四―六二二年)から智証大師(八一四―九二年)の時代を『今昔』が「仰ぐべき黄金時代である『古代』」とし、「日本仏法の濫觴と確立期」とする(『三国世界の王と天皇』(同『今昔物語集の世界構想』所収、笠間書院、一九九九年、初出一九八九年))。
- (7) 李市俊『今昔物語集』の寺院確執説話にみる王法・仏法相依理念の一齣(義江彰夫編『古代中世の史料と文学』所収、吉川弘文館、二〇〇五年)。
- (8) 川上知里『今昔物語集』の仏法と王法(『国語と国文学』九七―一〇、二〇二〇年一〇月)。
- (9) 以下、『発心集』は新潮日本古典集成成本(三木紀人校注『方丈記発心集』(新潮社、一九七六年))による。
- (10) 上島享「鎌倉時代の仏教」(大津透ほか編『岩波講座日本歴史 中世1』所収、岩波書店、二〇一三年)。
- (11) 慶政は天狗に、「いかなる意の人の、天狗道には来るや」と聞いたうえで、「慶政が所住の山寺は魔難有るべしや」と質問している(『比良山古人霊託』)。無住は『沙石集』卷一〇末―一一で京都の女人に憑いた霊のことばとして、「道

理を心得たるばかりにて道心なきは、魔道を出ぬなり」と記し、「この靈の云へる事を聞くに、聖教の道理に叶へり」として靈の言葉を認め、「名聞、利養、我執、憍慢ありて、真実の智慧もなく、戒行も欠けて、物に触れて執着ある」僧は必ず魔道に墮ちるといふ。そして『首楞嚴經』の、「多智禪定現前すとも、淫を断たざれば、必ず魔道に落ちて、上品は魔王、中品は魔民、下品は魔女となりて、皆、從衆あり。(中略)我滅度の後、末法の中にこの底多くして、世間に熾盛ならん。広く貪淫を行じて、善知識として諸の衆生をして、愛見の坑に落し、菩提の道を失はせん」といふ説を引いて、淫心を断たなければ魔道に墮ちることを説いている。

(12) 本話の表題は「染殿后為天宮被嬖乱語」とされ、説話配列としては天狗説話の部分に置かれているため、本話に登場する鬼は天狗と同類の存在とみなされると考えられる。

(13) 前田雅之氏は、「天皇」の意味の場合、「私的人格が全くなく、文字通り、公的性格しか有さない天皇」、「ものもの是非を最終的に決断する理念的「主権者」としての天皇」として用いられるとする(前田雅之注(6)文献)。「公」を「天皇」の意で読む場合は、個別具体的な天皇ではなく、抽象的な天皇の意になるといえよう。

### 【補記】

本稿は、二〇二四年一月一六日の国際シンポジウム第二回「世界にひらく日本宗教文化」における発表『『今昔物語集』本朝仏法部における天皇と僧—天皇の「召」と僧の対応を中心に—』を基としている。



# Eからの手紙、それから

——三浦綾子『銃口』前史としての『石ころのうた』——

林 香苗

## 序

二〇二五年、戦後八〇年、北海道新聞の特集「わたしたちの平和論」シリーズ「子供と戦争③」（六月一五日）で、「戦う自覚説いた若き教員」「三浦綾子さん 後悔赤裸々に」という見出しに続き、『石ころのうた』が紹介された。

三浦綾子（旧姓堀田、一九二二—一九九九）の自伝小説『石ころのうた』は、一九七二年四月号から一九七三年八月号まで、角川書店の月刊誌「短歌」に連載され、翌一九七四年四月に単行本として刊行

された。「平凡な一少女のわたしが次第に軍国時代の色に染められつつ、ついに敗戦にあつて挫折するまでの自分を、見つめてみたい」と書き出されるように、この作品には、故郷旭川で過ごした幼少時代を描いた『草のうた』に続く四年間の女学校時代と、人生で唯一過ごした旭川以外の地である炭鉱街歌志内での二年四カ月及び旭川での四年八カ月の、延べ七年に渡る希望に燃えた小学校教師時代、そして敗戦後絶望の中退職し、結核療養所入所後、後に綾子を創作と信仰へと導くクリスチャンで幼なじみの前川正と再会する一九四八年一月より前まで、つまり一三歳から二六歳までの激動の一四年間が綴られている。

文庫解説で同書を「三浦文学の地獄篇」<sup>(1)</sup>と述べる田宮裕三は、執筆直前、四九歳の綾子が難病血小板減少症（紫斑病）と診断され死を予感したであろうことに着目し、執筆動機を「いまわの贖罪」<sup>(2)</sup>とし、水谷昭夫<sup>(3)</sup>や小田島本有<sup>(4)</sup>もこの田宮の説を引用する。また、終戦後子どもたちの教科書に「墨塗り」<sup>(5)</sup>をさせた後自ら教師を辞めた理由を書き残したかったであろうことに執筆動機をみる佐古純一郎は、同書を「三浦文学の原点」<sup>(6)</sup>とも位置付ける。一方、高野斗志美は、炭鉱労働者の流入が急速に増加し農村地帯とは異なる独特な戦意高揚の雰囲気充滿していた当時の歌志内に着目し、空知郡神威尋常高等小学校教師時代は、綾子にとって「たんなる通過点ではなくて、なにかしら特別の感動的体験をした場所」<sup>(7)</sup>と捉え、わずか二年四カ月の「『歌志内体験』」をとりわけ重要視する。確かにそれは、綾子が川を詠んだ唯一の次の歌にも表れている。

炭塵に濁れる川の流るる街／神威の二年は唯に恋しき

〔川の歌〕<sup>(6)</sup>

川の町旭川に生まれ育った綾子だが、ここで歌われているのは神威に流れる「炭塵に濁れる川」と、そこで暮らした二年四カ月への愛しさである。

これら作家論的視点からの論評に対し、黒古一夫は、「彼女の自伝（小説）が他者に開かれている」のは、「激動する時代や社会のなかで翻弄された自分（の青春）と同じようなことを、次なる世代に二度と繰り返してほしくないという願いがあったからこそ、この自伝（小説）は客観性を獲得し」た<sup>⑦</sup>と作品論的視点に基づき、同書が強いメッセージ性を伴う「自伝」小説である点を評価する。一方、上出恵子は「自伝小説の可能性」<sup>⑧</sup>の中で、自伝も虚構で「あくまでも〈小説〉であり、本質的に〈文学〉」とし、フィクションとしての価値を同書に見て取る。

以上のように、『石ころのうた』はこれまで、執筆時期、執筆動機、描かれた内容や三浦文学における位相が三浦綾子論の中で論じられてきたが、二〇一五年に軍事・宗教学者石川明人が、『石ころのうた』単独の論考としては初の「三浦綾子の軍国教師時代とキリスト教」<sup>⑨</sup>を発表する。全章にわたり『石ころのうた』の内容を詳述するものの、終盤で「戦争問題」の答えを同書に見出そうとする石川は、「結局『権力の非情さ』という表現で国や政府の問題に収斂させてしまうならば、信仰的な人間観に基づく平和論というよりも、世俗的な平和運動としての批判や警戒の掛け声というニューアンスが強くなり、本来のメッセージを矮小化する」ものであるとし、「彼女の平和論の限界だ」とも述べる。

だが本稿では、この「権力の非情さ」は『石ころのうた』の末文で問題提起のみされ作品が閉じられているため、それ自体は描写されておらず、むしろ、作中で「わたし」に鋭く迫る青年「E」を執筆時

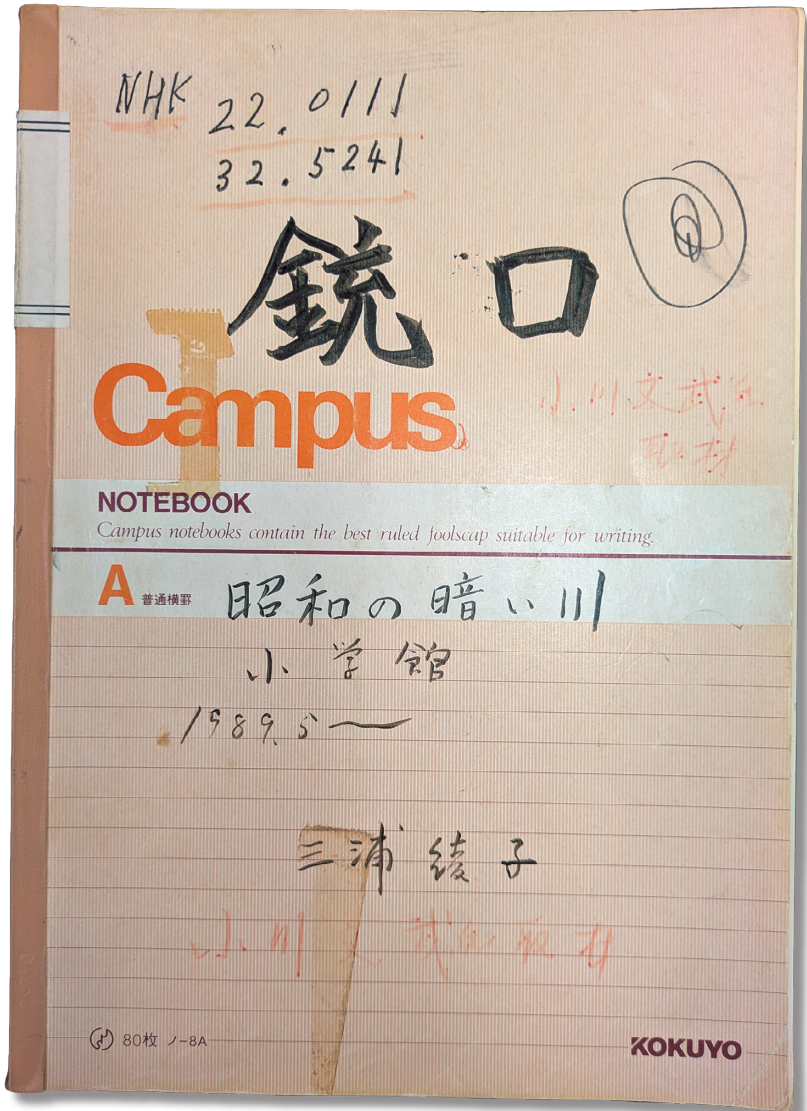
の綾子が効果的に造形し、作品終盤で敗戦後の「わたし」に「Eからの手紙」を再読させ「したたかな一撃をくら」わせたからこそ、それから四〇年の時を経て綾子が最後の長編小説『銃口』を執筆し、その中で「権力」が何によりどのように「非情」なものになっていくのかをついに描き切れたのではないかと、という仮説を提示する。つまり、『銃口』には『石ころのうた』という前史があり、さらには、『石ころのうた』に登場する青年「E」が作中で「わたし」に真剣に伝え続けた言葉があったからこそ、それが『石ころのうた』執筆以後の作家三浦綾子をも動かし続け、『銃口』に結実したのではないかと推測するのである。なお、高野<sup>(10)</sup>や小田島<sup>(11)</sup>も「Eからの手紙」に言及するものの、そのフィクション性については、管見の限り考察されていない。

これを論証するにあたり、本稿では上出の論考の延長線上に立ち『石ころのうた』に内在し得るフィクション性を念頭に置きつつ、Eの言動及びEの存在により浮かび上がる朝鮮半島出身の人たちの描写を検証する。そして、その過程で見出した幾つかの虚構性（特に、綾子が「Eの手紙」を再読する場面）について考察する。もちろん、Eのモデルと思しき人物が当時実在していたであろうことは、その「自伝」小説というジャンルを鑑み否定し得ないものの、作中のEの言動には、ノンフィクション（自伝）として読むには不自然な点が散見されるゆえである。むしろ、フィクションだからこそ実際にあったことを整理し誇張、拡大しながら登場人物のキャラクターを際立たせ創作していくことが可能となる。だからこそ描けたEの言動と、そこに込めた作者の意図を検証し、作中でEの言葉に反論する当時（一九四〇年頃）の堀田綾子（作中の「わたし」と、むしろEの言葉に共鳴する『石ころのうた』執筆時（一九七二年頃）の三浦綾子を対照し、『銃口』の執筆までに与えた影響を以下に考察する。

## 一、『銃口』創作ノート・三浦光世日記・三浦綾子の日記抄からみえるもの

『銃口』は、一九九〇年一月号から一九九三年八月号まで小学館の月刊誌「本の窓」に連載され、翌一九九四年三月に単行本上下巻が刊行された。その創作ノート七冊が、三浦綾子記念文学館に所蔵されている。一〜四冊目は主に、資料的内容（教育勅語関係資料・新聞記事・「臨時召集令状」・新聞社からのファックス・書簡等の貼付）、取材メモ的内容（主に夫の三浦光世の筆跡）、作品構想の断片的内容（登場人物名の変遷や年齢・史実・直筆カレンダー・北森家の間取り・聯隊官舎配置図等）の所謂「創作メモ」的内容であるが、作品とノートのページ順に連関性はない。日常の備忘録的メモや、『銃口』の直前に執筆していた現代小説『あのポプラの上が空』の創作メモも見られる。そして五〜七冊目は、綾子の弟鉄夫が資料を転記したものである。総じて、原稿用紙一一〇枚に及ぶ長編小説用の創作ノートとしては関連内容が極めて少ない一方で、作品の核心に関わる重要な記載が確認できる。

また、光世一四歳の一九三八年から、九〇歳の二〇一四年までの七十六年間を綴った日記（以下、光世日記）計六三冊も同文学館に所蔵されており、その調査・研究が二〇一九年から始まっている<sup>12)</sup>。これにより、綾子の創作を口述筆記で支えた光世の視点からも、三浦文学の背景を分析できるようになった。この光世日記と、綾子の日記風エッセイ（『生かされてある日々』この病をも賜ものとして 生かされてある日々<sup>2</sup>『難病日記』夕映えの旅人 生かされてある日々<sup>3</sup>以下、日記抄）を照合させることにより、日記抄では「〇月〇日」と記載されていた月日を特定することが、一部可能となった。次に引



『銃口』創作ノートの表紙（三浦綾子記念文学館所蔵）

用する日記抄中、月日を明記している箇所は、このようにして特定したものである。

そして、これらの一次資料を調査する中で、この度、『石ころのうた』に『銃口』前史としての連関性を見出すに至った。その関連箇所を時系列にし、次に引用する（エッセイは初出の年月日で記す）。

<p>一九八八年九月一二日（書簡）</p>	<p>「編集長眞杉章から綾子へ」昭和を背景に神と人間を書いてほしい「と新小説のテーマを提示される。」<sup>(13)</sup></p>
<p>○月○日（日記抄）</p>	<p>山内栄治さんの『民衆の光と影』に、大正天皇大喪の時の歌が出ていたことを思い出してノートす。これを新しい小説の冒頭に使い得たらと思う。（略）何か、暗い昭和を暗示するかのよな歌なり。<sup>(14)</sup></p>
<p>一九八九年五月（創作ノート）</p>	<p>「表紙」昭和の暗い川 / 1989.5 ~</p>
<p>七月一日（エッセイ）</p>	<p>「タイトル」黒い川の思い出<sup>(15)</sup></p>
<p>八月〇日（日記抄）</p>	<p>一応取材ノートには、「黒い河の流れ」と題してはあるのだが。<sup>(16)</sup></p>
<p>八月三一日（日記抄）</p>	<p>今日是一日、小学館の連載小説の資料調べ。戦時中には実に様々な暗黒な場面があった。灌漑用の貯水池を掘るために、囚人、タコと呼ばれた労働者、そして強制連行によって日本に連れて来られた韓国・朝鮮人などが過酷な労働を強いられた。／なぜ土を掘るだけの作業に従事して、人が次々と死んだのか。<sup>(17)</sup></p>

九月一四日(日記抄)

朝、床の中で、ふつと今度の連載小説の題名が浮んだ。／「銃口」／という題である。担当者の眞杉氏が、激動の昭和を背景に、神と人間の問題を書いて欲しいと言われた。その昭和の一面を、この「銃口」は象徴してはいまいか。(略)この難波大助事件は、昭和の暗い幕明けの予鈴と言ってもよい。<sup>18)</sup>

ここから、『銃口』のタイトル決定に至る変遷が見て取れる。そもそも、『石ころのうた』と『銃口』の連関性に着眼したきつかけは、「銃口◎」と大きく記されている創作ノート表紙(79頁掲載)に「昭和の暗い川／1989.5」<sup>17)</sup>とも記されていたことであり、これがタイトル「銃口」の原形と思われたことである。着目すべきは、それと似て非なる表現が、『銃口』の執筆に着手する前後の日記抄やエッセイに幾つか見られることである。

まず、一九八八年の日記抄に「暗い昭和」という記載があることから、綾子が新小説の背景「昭和」にはじめは「暗さ」を重ねていたことが窺える。同様に、創作ノートの表紙にも「昭和」「暗い」という言葉を用いたタイトルの原形が確認でき、「暗い」「昭和」を「川」に見立てている構想過程も窺える。

一方、同年七月一日発表のエッセイ「黒い川の思い出」では、「川」を形容する語が「暗い」から「黒い」に変化している。おそらく当初は、「昭和」をイメージとして「暗い」川と表現したが、「唯に恋しき」歌志内の思い出を綴るにあたり、綾子の心象風景として深く記憶に残っていた歌志内の川が「炭塵たんちんに濁り黒かったため、その色のままに「黒い」川と表したのだろう。

とはいえ、同年八月下旬頃の内容と思しき日記抄には、「一応取材ノートには、『黒い河の流れ』と題してはあるのだが」とあり、実際の創作ノート表紙の記載（昭和の暗い川）とは異なり、「昭和」の文字が消え、「暗い川」から「黒い河」へと変化し、表記に揺れが見られる。確かに、「黒い」とすることで新小説（『銃口』）に歌志内時代の思い出を投影できるが、「川」では混迷の昭和を表現するには充分ではなく、そこに大河のようなスケールを付すために「河」と記したのかもしれない。いずれにせよ、このようにタイトルについて様々に想いを巡らせながら、新小説のイメージを固めていったと思われる。

ところが、九月一四日の日記抄には「朝、床の中で、ふっと今度の連載小説の題名が浮んだ」とあり、このようにして「銃口」というまるで異なる題名となるのだが、では、最後に「黒い河の流れ」と記した「八月〇日」からこの日までのわずか数日間に、一体何があったのか。

そこで、八月三二日の日記抄の記載に着目する。この日綾子は、光世他数名と（光世日記より<sup>(19)</sup>）、『銃口』の資料調べとして、旭川近郊の美瑛町に一九三二年に建設が着工された「聖台ダム」を訪れている。そして、「なぜ土を掘るだけの作業に従事して、人が次々と死んだのか」と綾子は疑問を抱き、この「作業に従事」した人の中に「強制連行によって日本に連れて来られた韓国・朝鮮人などが過酷な労働を強いられた」と知ったことが記されている。そのことがなぜ「銃口」というタイトルに繋がるのかは、拙論「宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』——タイトル「銃口」をめぐる考察——」<sup>(20)</sup>に拠るが、この日の資料調べが『銃口』に登場する朝鮮人青年金俊明の造形にも影響を与えている、とも考えられよう。以上が、「黒い川」が流れる歌志内での体験を綴った『石ころのうた』に、『銃口』の前史としての位置づけをみる所以なのである。

では、三浦作品の中で「黒い川」や「朝鮮」に関する描写は、いつからどのように展開されてきたのか。

## 二、三浦綾子作品にみる「黒い川」と「朝鮮」描写

本章では、『氷点』で作家デビューした一九六四年からの約三〇年間における三浦作品から、「黒い川」と「朝鮮」に関する描写を調査する。その際、初期、『石ころのうた』、中期、『銃口』執筆期、そして晩年の五期に分け、その変遷を考察する。

以下、初出順（連載作品は、連載開始年で記す）に取り上げ、小説には「小」、伝記小説には「伝」、エッセイには「エ」、講演には「講」、インタビューには「イ」、対談には「対」と付す。

### 二一、『石ころのうた』以前（一九六四～一九七二年）作家歴一～八年

・一九六五（昭和四〇）年、綾子四三歳。

S字に流れる炭塵でまっくろな川を加代は橋の上に立ちどまって眺めていた。〔小〕井戸〔21〕

・一九六八（昭和四三）年、綾子四六歳。

汁粉のようにどろりとした、炭礦街特有の真っ黒な川が流れ（略）〔略〕だけど、小樽の家のほうが、この川よりもっとどす黴くろいわ。どす黴くろい川のような家よ〔小〕どす黴くろき流れの中より〔22〕

・一九六九（昭和四四）年、綾子四七歳。

①日本人そっくりの少年が、同年輩の白人の少年と、達者な英語で話している。彼は韓国人だという。（略）しかし、この元氣な異国の少年たちさえも、代々ここに住みついて来たかのような、やはり自然の中にとけこんだ感じがあった。〔エ〕「チミケップ湖」<sup>(23)</sup>

②炭塵に黒く汚れた小さな川が街を縫っていた。（略）「早く帰れ、オトウサンオカアサン待ッテルヨ」／朝鮮人は、優しく親切だった。（略）（二円で、先生の服を買えるだろうか）／清志は橋の上に立って、暗い川を見つめた。〔小〕「奈落の声」<sup>(24)</sup>

「黒い川」の描写が、これら初期の短編小説に確認できる。「まっくろな川」「真つ黒な川」「黒く汚れた小さな川」のように、川を様々に表記するのみならず、「どす黴くろい川のような家」のように、人間の強欲さ（原罪）の比喻として用い、小説のタイトルにも使用している。これは、「原初の闇の色である（創一…二）」<sup>(25)</sup> 黒に「恐るべき悪のしるし」というイメージを重ね試行した表現かもしれない。また、父から逃れたくて夜家を出た「奈落の声」の少年清志が見つめる先を「暗い川」と表記し、夜の情景と清志の心の内を効果的に重ねようとした様子も見て取れる。

一方「朝鮮」に関する描写は、白人も韓国人も大自然に溶け込む「同じ人間」として描くエッセイ「チミケップ湖」にまず確認できる。だが、既にそれ以前の新聞記事（一九六七年二月二日「朝鮮時報」朝鮮新報社）<sup>(26)</sup> にも、綾子は在日中央芸術団の公演を観た感動を綴っている。望郷の念を強く抱いてい

るであろうその「朝鮮人」を自身の小説に登場させ、「早く帰レ」と「優しく親切」に清志に対して語る。この場面には、朝鮮の人々に寄せる綾子の深い想いが表れている。

なお、「奈落の声」に描かれる子どもたちの「ウオーター！」の叫び声は、『石ころのうた』や『銃口』にも描写される。さらに、「奈落の声」の清志が旅芸人の子ゆえ二日間しか主人公真樹子のクラスに通えないという内容は、『石ころのうた』で「この子をモデルにして、わたしは『奈落の声』という短篇を書いた」<sup>27</sup>とも紹介される。「奈落の声」には後の『石ころのうた』、さらには『銃口』に繋がる原形があるとも言えよう。

次節では、『石ころのうた』<sup>28</sup>における「黒い川」と「朝鮮」描写のうち、特に重要な箇所を考察する。

## 二二二、『石ころのうた』(一九七二〜一九七三年) 作家歴九〜一〇年

・一九七二(昭和四七)〜一九七三(昭和四八)年、綾子五〇〜五一歳。

①川は、汁粉のようにどろりと黒かった。(略)だが、街を蛇行する五メートル幅ほどの川には、どころどころ小さい木の橋がかかっていて、その欄干にもたれて汽車を見ている子供たちの姿などには、なかなか詩情があった。  
(一五)

②橋の上だけが、ぼつかりと暗かった。その下を流れる炭塵に汚れた川も、無論暗くて何も見えない。／「先生、名誉って何ですか(略)改めて名誉とは何かと問われて、わたしはしどろもどろな返事をした。／「国のために死ぬって、そんなに、名誉なことかなあ。ぼくには、嘘のような気がするんです」  
(一五)

③ この学年に朝鮮人の子が十五名入学してきた。(略) 五、六年生かと思われる大きな男の子が、その一年生の中にいた。四月も末の雪がまた降りそうな寒い日、彼は廊下で会ったわたしに、／「先生、コレやるか」／と黒いセルロイドの筆入れをつき出した。(略) 中には、一味唐ガラシ粉がびっしり入っていた。彼はそれを、ふとい指でつまんで口に入れ、／「ああ、うまい。ヤルカ先生」(略) わたしはこの日以来、朝鮮の子供たちに、今までよりずっと親しみを持った。(一六)

④ 六年生の女生徒に宮本という朝鮮の子がいた。(略) その子が、朝鮮語の本を持っていた。受け持ちの教師が、／「この字は何と読むの」／と尋ねた。が、彼女は答えない。(略)「おとうさんが、教えてはいけないといいました」／と彼女はいつた。／わたしは、横つ面を殴られたような心地がした。わたしたちが、いくら朝鮮の子をかわいいと思ひ、生徒たちもまたなついていると思つていても、その間を隔てている目に見えない垣根のあることを、あらためて思い知らされたからだ。当時、わたしたちは、朝鮮人も同じ日本人だといひ、そのつもりでいた。だがその生徒の親たちの感情はちがつていたのだ。／朝鮮に住む子供たちは、泣くと、／「日本人が来るよ」／と、親にいわれて育つたという。(略) こんな言葉があつたことも、朝鮮人に対する日本政府の弾圧の実態も、わたしたちは戦後始めて知つたのであつて、炭鉦街の教師をしていたその時は知らなかつた。(略) わたしがもし聡明であつたなら、そうした少女の言葉から朝鮮人への圧政を鋭く嗅ぎとつたにちがいない。が、それは今にして思うことであつて、当時のわたしは、せいぜい民族の感情のくいちがひ程度にしか思つてはいなかつた。何という愚かな人間であつたことかとつくづく思う。(一六)

⑤ 黒い水の流れる川にかかつた橋の上で、朝鮮人と欄干によりかかつて何か話し合つてゐるEに会つ

た。わたしは彼に黙礼してそのそばを通り過ぎたが、やがてこの人とも、会うこともなくなるだろうと思つた。／その時、なぜかふいにわたしは涙がこぼれた。それは、彼への別離の感情でもあり、愛する街全体に対する、別離の感情のようでもあつた。

(七)

⑥ (さようなら、文殊よ) (略) 見ると、四年生ぐらいの男の子が、大きな風呂敷を棒につけてふつてゐるではないか。(略) Iは、誰もいない大曲の地で、わたしを見送ってくれていたのだ。／「先生、ほんとうにやめていくの？」(略) 戦後、わたしはたびたび、このIを思い出していた。彼の故国は北と南に二分された。どちらの国に彼がいるのか、もしくは戦争で故国に帰る機会も失つたことかと思ひながら、その無事をねがっていた。／先年、韓国の週刊誌に随筆を頼まれて、わたしはこのIとの別離を書いた。

(八)

⑦ 汽車は山腹に這い上がるように建つ神威校、まっくろい川にかかった橋、黒く光るずり山を右に見て神威駅に着いた。

(十一)

初期作品と比べ、「黒い川」の描写に変化を確認できる。「汁粉のように」という喩えや「どろりと」などの擬態語は、後のエッセイ(「川の歌」「黒い川の思い出」「歌志内と私」)にも用いられる新たな表現である。また、川にかかる木の橋から、登場人物が何かを見ていたり思案する場としての描写もある。それは先述の「井戸」や「奈落の声」にも共通するが、『石ころのうた』ではそれが一層効果的に用いられている。それゆえ、旭川に転勤した「わたし」が夏休みに神威を訪れる場面(⑦)でも、「わたし」の目に映るのは「まっくろい川」ではなく「まっくろい川にかかった橋」なのであろう。

一方、「朝鮮」に関しては、三人の朝鮮人生徒について詳しく描かれる。一味唐ガラシ粉をくれた男の子のエピソード③は晩年のエッセイ「予期せぬ来訪者たち」にも描かれ、朝鮮語を話そうとしない女生徒宮本のエピソード④もやはり晩年の対談「三浦綾子さん、『銃口』を語る」で繰り返し語られる。また、風呂敷を振って見送ってくれたイチちゃんの帰国を案じるエピソード⑥も、中期の小説『青い棘』で「日本人が来るよ」の逸話と共に「朝鮮民族は二つに分割されるに至った」とも描写され、同じく中期のエッセイ「母国を引き裂かれた人々」ではその悲劇を詠じた歌が紹介される。そして『銃口』執筆期のエッセイ「歌志内と私」には、この三つのエピソードが全て描かれるのみならず、「わたしにとって、歌志内線は、実にこの一瞬に凝縮されている」と回想するほど、朝鮮の子どもたちとの思い出が忘れがたく大切な出来事であったことが窺える。と同時に、エッセイや対談で繰り返し返されることから、③④⑥の内容は、実際にあった出来事を基に綴られたノンフィクションの描写であると言える。

さらに、当時の「わたし」の思いと、執筆現在の「わたし」の考えとの差異が明確に表出されている点に、『石ころのうた』の特徴を見る。例えば、青年「E」を慕う「わたし」の生徒「N」が橋の上で、「国のために死ぬって、そんなに、名譽なことかなあ」と迫るが、「わたし」は「しどころもどろな返事をした」り②、同じく橋の上で朝鮮人とEが「何か」話し合っているが、「わたし」の関心はそこへは向かず、Eや文殊の街との別離への感傷があるのみである⑤。この、朝鮮人とEが何を話していたのが「見えていないわたし」の描写は、暗い橋の上で「その下を流れる炭塵に汚れた川」が「わたし」には見えていないという描写②と同様に、時代に押し流され時代が「見えていなかったわたし」のメタファーでもあろう。なお、「黒い川」と「朝鮮人」が同時に描写される場面⑤にEが登場するが、この人物

については第三、四章で詳述する。

二一三、『石ころのうた』以後、『銃口』執筆前（一九七四～一九八七年）作家歴二一～二四年

・一九七七（昭和五二）年、綾子五五歳。

賀川牧師は（略）特に中国、朝鮮、東南アジアの諸国のために、毎日熱い愛の思いをもって祈ったという（略）ソ連のため、アメリカのため、中国のため、韓国のため、北朝鮮のため、台湾のため、東南アジアのため、ヨーロッパのため、南米のため、オーストラリアのため、すべての人々のために、愛と謙遜をもって、祈っていききたい。

〔エ〕「祈りは世界を変える」<sup>(29)</sup>

・一九七九（昭和五四）年、綾子五七歳。

まず朝鮮の釜山に上陸し、北支の塘沽タンクウに着いたわけです。

〔伝〕「岩に立つ」<sup>(30)</sup>

・一九八〇（昭和五五）年、綾子五八歳。

① 鬼が来ると言っても韓国の子は泣きやまない。しかし日本人が来ると言えば、その恐ろしさにおのいて、幼子はびたりと泣きやむ。

〔小〕『青い棘』壺<sup>(31)</sup>

② 朝鮮民族は二つに分割されるに至った。（略）北朝鮮と韓国が血を流し合う事態が惹き起こされた。悲劇の朝鮮動乱がこうして始まったのである。（略）「国境って、何だろうなあ、お父さん」（略）「（略）三十八度線を境に、南北に幅二キロの非武装地帯があるんだよね、お父さん」（略）「そうだ。ここは

北朝鮮でもなければ、韓国でもない。だから、税金もないんだって」(略)「そうだ、天国だ。それが半島全体に及べば大したもんだけどな。とにかくここが、南の人間と北の人間が会うことのできるま、救いのような場所だな。

(「小」『青い棘』視点<sup>(32)</sup>)

③「アメリカ人であろうと、日本人であろうと、朝鮮人(韓国人)であろうと、支那人(中国人)であろうと、人間であることに変わりはない」

(「講」『生きるということ』<sup>(33)</sup>)

・一九八一(昭和五六)年、綾子五九歳。

やがて、この方は、韓国で敗戦の日を迎えました。そしてソ連の捕虜収容所に入れられたのです。

(「エ」『真の平和を願って』<sup>(34)</sup>)

・一九八二(昭和五七)年、綾子六〇歳。

① 宮城県在住の金興坤氏(きんこうくん)もまた、久蔵の底知れぬ愛に触れた一人である。(略)(略)当時私たち朝鮮人に対する日本人の多くは(略)吾々朝鮮人を野蛮人か何かのごとく、劣等視していたのであります。(略)故に私たち朝鮮人に与えられる仕事は、常に汚い上に、危険を伴う仕事でありました(略)。／しかるにこの私を、西村久蔵先生は拾い上げてくれたのであります。(「伝」『愛の鬼才』<sup>(35)</sup>)

② もろともに同じ祖先をもちながら／銃剣取れりここの境に

孫戸妍

(「エ」『牢に満つるとも』<sup>(36)</sup>)

・一九八三（昭和五八）年、綾子六一歳。

① 大正十二年関東大震災の折、どれほど多くの朝鮮の人々が、あらぬデマのために殺されたことでしょうか。身に何の覚えのない、無抵抗な朝鮮の人々を、あるいはくびり、あるいは突き刺して殺した当時の日本人の姿、そして戦時中の南京虐殺等々。

② アイヌの人たちを侵略し、韓国、朝鮮、中国と、その飽くなき侵略はひろげられていったのです。

〔「エ」目をさまして！〕<sup>(37)</sup>  
〔「エ」少数者に目を注めよう〕<sup>(38)</sup>

・一九八四（昭和五九）年、綾子六二歳。

① 今から十五年程前、韓国の木浦市<sup>モツポ</sup>という所で、一人の人が亡くなりました。その人の葬儀には三万人近い人が駆けつけ、その人田内千鶴子<sup>たうちちづこ</sup>さんのために、心から泣き悲しみました。

〔「エ」愛は国境を越えて〕<sup>(39)</sup>

② 登録手帳に記す国籍はいずれにせん／韓国とせんか朝鮮とせんか 川野順（略）

憎み合い罵り合<sup>ののし</sup>える南北の／朝鮮放送夜々つづく 同前（略）

外国人登録証を交付さると／指紋取られ居き並ばされて我は リカ・キヨシ（略）

日本人らしく擬装する民族の／哀しみもちて吾は生き来し 韓武夫（略）

皆同じ人間なのだ。その筈なのに、しかし、皆同じ人間として扱ってはいないのだ。／新潮社から韓国人女流作家車潤順<sup>チャユンスン</sup>の「天来の声」<sup>(40)</sup>が出版された。（略）彼女は戦時中日本にあって、嫌いなもの

のが幾つかあった。それは、ニンニクであり、両親の母国語であった。

〔エ〕「母国を引き裂かれた人々」〔41〕

③ 辿り着きし釜山に野宿の群の中／狂ひたるあり自殺せしあり 〔エ〕「死を越えるもの」〔42〕

④ 川の水は汁粉のようにどろりとしていた。決して清い流れではなかったが、それでも炭鉱の川には炭鉱の川の風情があった。 〔エ〕「川の歌」〔43〕

・一九八五（昭和六〇）年、綾子六三歳。

旭川のすぐ隣りに東川という町がある。ここに中国人の慰霊碑が建っているが、戦時中日本人は、韓国人や中国人を、人さらいがさらうようにして日本に連行し、奴隷同様に酷使した。人件費を浮かすために、まさに「正しい者を」このような目に遭わせたのである。 〔エ〕「賄賂と不正な裁き」〔44〕

・一九八六（昭和六一）年、綾子六四歳。

① 保郎たちは、船で対馬海峡を渡り、釜山からまた汽車に乗った。次いで朝鮮を北上し、鴨緑江を越え、北支那鉄道に乗り継ぎ、 〔伝〕『ちいろば先生物語』黄塵 〔45〕

② 朝鮮や満州の各地から、若い幹部候補生が集まった。（略）「うん、この凶們からは朝鮮が近い。さつきは朝鮮行きに乗り換えたにちがいない」 〔伝〕『ちいろば先生物語』敗退 〔46〕

③ 声高に日本人を罵る中国人や朝鮮人の声が病室の中まで聞こえてきた。（略）中国人や朝鮮人が、今までの日本人の暴虐に対して報復を始めたのだ。 〔伝〕『ちいろば先生物語』破片 〔47〕

④ 「朝鮮人が日本人を皆殺しにする」とか、流言蜚語がしきりに飛んだ。／するとすな、人間とい

うものは妙なもので、たちまちそれを信じてしまう。

〔伝〕『夕あり朝あり』大震災<sup>(48)</sup>

⑤ 「何ですって！ キリスト教会に伊勢神宮のお札を飾らせ、拝ませるのですと？」〔略〕北は樺太から、南は台湾に至るまで、むろん朝鮮も、すべてのキリスト教会に〔伝〕『夕あり朝あり』試練<sup>(49)</sup>

中期に至り、「黒い川」の描写は一九八四年のエッセイ「川の歌」で「汁粉のようにどろりと」が確認できるのみだが、むしろ「朝鮮」に関する描写は一気に多様性を帯び、主に次の三点に大別できる。

一点目は、「朝鮮」を固有の国としてではなく他国と併記し、「すべての人々」「人間であることに変わりはない」という文脈で用いる描写である。そしてそれを実践したキリスト教社会活動家の賀川豊彦や、韓国の木浦市で始めた共生園で生涯をかけて孤児たちを育てた田内千鶴子を紹介し、講演「生きるということ」やエッセイ「母国を引き裂かれた人々」でも、「皆同じ人間なのだ」と繰り返し述べる。小説『青い棘』で韓国旅行から帰国した「寛」の「国境って、何だろうなあ」という問いや、「お父さん」が三十八度線の非武装地帯に「天国」や「救い」を見る眼差しも、同様の世界観によるものであろう。そして晩年の『銃口』で、竜太の父が金俊明に「たとい朝鮮人でも同じ人間だ」と言う場面の原形が、ここに窺えるのである。

二点目は、一点目とは逆に「朝鮮人」を差別視した史実の描写である。その際、差別された朝鮮人の側からも描く点にその特徴がある。例えば、伝記小説『愛の鬼才』では、西村久蔵に救われた朝鮮人「金興坤」が書簡の中で差別の苦しみと久蔵への感謝を述べ、エッセイ「目をさまして！」や伝記小説『夕あり朝あり』でも、関東大震災で「あらぬデマ」や「流言蜚語」のために殺された朝鮮人の側から史実

が描写される。この繰り返し用いられる関東大震災の描写では、日本人の側から捉える場面と、朝鮮人の側から捉える場面とが明確に使い分けられている。これは、次節に挙げる『銃口』において、金俊明に対し「でも、こいつは朝鮮人で……」と言う「関東大震災の時の事件を忘れていない」「良吉」①に当時の日本人の視点を投影し、一方で、「彼らは、関東大震災の時に、何の罪もないわれわれの同胞を流言飛語をまきちらして六千人も殺した」と、満州で再会した敗走中の竜太に述べる「金俊明」⑤に朝鮮人側の想いを投影する、という描写に繋がるものである。

三点目は、エッセイ「死を越えるもの」に紹介された短歌や、伝記小説『岩に立つ』『ちいろば先生物語』の主人公が出征する際の中継地点として釜山などが描かれる、地名としての描写であり、次節の『われ弱ければ』②の描写も同様である。これは、この時期に相次いで執筆された伝記小説の各主人公を、朝鮮や朝鮮人との関わりからも照らし描き出しているということであり、舞台が満州に移る『銃口』後半の執筆にも反映していると思われる。

## 二一四、『銃口』資料調べ・執筆・連載中（一九八八～一九九三年八月）作家歴二五～三〇年

・一九八八（昭和六三）年、綾子六六歳。

①遊郭に売られる女たちにも、貧しさがつきまとい続けた。（略）なんの不自由もなく学校に通って、勉強している生徒たちとは別世界に住んでいるのだ。／（人間はみな等しく神の子だ）

（「伝」『われ弱ければ』苦界<sup>50</sup>）

②満州・朝鮮への旅は、満州・朝鮮に婦人矯風会の支部を開くためであった。

〔伝〕『われ弱ければ』 天洋丸<sup>51)</sup>

③戦争中日本人は本当にひどいことをやったわけですけど、そのときにその子は「アメリカ人も日本人も朝鮮人も、みんな同じ人間や」と言った。  
〔エ〕「命・この尊きもの」<sup>52)</sup>

・一九八九（昭和六四・平成元）年、綾子六七歳。

①何とその川は、汁粉のように黒くねっとり流れ回っていたのだ。／きれいな川の町旭川に生まれ育った私には、この真つ黒い川は異常であった。（略）こんな汚い川のそばで、どうして人間は生きて行けるのかと思った。／それから二年四カ月、この黒い川を見て暮らした。町の中の一本道には幾つかの木橋があった。その木橋の欄干に、よく朝鮮の男の人たちが寄りかかって、ひそひそと話し合っていた。今思えば、昭和十五、六年のその頃、朝鮮から連行されて来た人たちであったのかも知れない。欄干に寄りかかり、道に背を向け、じつと黒い川を見つめていた朝鮮の人たちは、一体何を思っていたのだろうか。  
〔エ〕「黒い川の思い出」<sup>53)</sup>

②そして、私の勤める神威小学校も、その山腹に建っていた。山間を炭塵に汚れた黒いどろりとした川が蛇行し、ところどころに粗末な木橋が架かっていた。／ああそれらは、私の生涯にとつて何と懐かしい光景であることか。僅か二年半に満たぬ任期だったが、この町には私の愛する生徒たちがいた。それ故に、この風景は今も私の胸に、かつきりと彫りこまれているのだ。／そんな転校生たちの中に、朝鮮の子が目立つようになった。隣のクラスに、Kという体の大きい一年生がいた。十歳ぐらいでもあったのだろうか。はなはだしい薄着で、冬でも学生服一枚であった。／「Kさん、

寒くない？」と尋ねると、彼は人なつっこい笑顔を見せて、セルロイドの筆入れの蓋をあけ、／「先生やるか。あつたかくなるぞ」と言って、なめて見せた。筆入れには赤いなんばん粉があふれそうに入っていた。／五年生のM子もまた朝鮮の子であった。(略)時折教師たちが、朝鮮の言葉を教えて欲しいと言ったが、その度に彼女は途端にぴたりと口を閉じた。それが朝鮮の人々から母国語を追求し、日本語を強制した日本政府への恐怖からであったことを、愚かにも私は知らなかった。／私の受持ちにも朝鮮の子Sがいた。突然私が辞めることになった時、彼は私に、「本当にやめるの」と幾度も念を押した。私の宿舎にまで来て同じことを聞いた。(略)のろろと走り、やがて人家も途絶え、汽車が速度を上げた頃、大きな風呂敷を振る少年の姿があった。「Sだ！」そう叫んで身を乗り出し、私は夢中で手を振った。／わたしにとって、歌志内線は、実にこの一瞬に凝縮されている。

〔エ〕「歌志内と私」(54)

・一九九〇(平成二)年、綾子六八歳。

①「でも、こいつは朝鮮人で……」／良吉は関東大震災の時の事件を忘れていないのだ。(略)「馬鹿というんじゃない。たとい朝鮮人でも同じ人間だ」／凜りんと言いつ放った政太郎の言葉に、男の顔に安堵あんどの色がみなぎった。(略)男の体温が竜太の手にあたたかく感じられた。不意に竜太は、どんなことがあってもこの男を無事に逃がしてやりたいと思った。(略)おそらく父母もきょうだいもいるにちがいない。政太郎が言った「同じ人間だ」という言葉が、改めて竜太の胸を打った。

〔小〕「銃口」縁えん(一)(55)

②両親と共に、幼い頃に日本に來たこと、(略) タコ部屋に叩きこまれたこと、棒頭の一人に、朝鮮人ということで悉く目の仇にされたこと、毎日のように棍棒で殴られたり皮靴で蹴られたりして、危険を感ずるようになったこと、遂にタコ部屋を逃げ出したこと等々を、ぼつりぼつりと言葉少なに語ったのだった。(略) 俊明のすることには真実味があった。俊明は、朝誰よりも早く起きて、ひそやかに廊下を拭き清めたり、庭の掃除をしたりした。(略) もしかしたら、美千代は同じ屋根の下に起き臥しする俊明に、心を惹かれはじめたのかもしれない。そこまで考えて、竜太は再び、(まさか！ 民族がちがうんだ) /と、強く否定した。(略) 美千代は政太郎の影響を受けて、人間は皆同じだ、と時折言う。「愛には国境がない」/ナイチンゲールの好きな美千代は、(略)「懐かしいなあ」(略)「イノック・アーデンか」/と、低い声で読み出した。(略) 流暢に英語を読む俊明に、美千代の目が輝いた。

(「小」『銃口』縁(二)(56))

③ 一九三七年(昭和十二) 九月五日、この日竜太は、その赴任地、空知郡幌志内に着いた。(略) 炭塵に黒く濁った小川が流れている。

(「小」『銃口』炭塵(57))

④ 黒い川に渡した橋の上から、下をのぞきこんでいる二人の子が描かれ、(「小」『銃口』初出勤(58))

⑤ 満州のこの地で、自分の肩を抱いて、「竜太君か」と叫んでくれる人がいようとは、(略)「竜太君！ わたしだ。金俊明だ。覚えていますか！」(略)「(略) わたしのたったひとつしかない命を助けてくれた恩人の息子さんだ。(略) 彼らは、関東大震災の時に、何の罪もないわれわれの同胞を流言飛語をまきちらして六千人も殺した。(略) しかし、北森一家は、命懸けでわたしをかばい、肉親にも及ばぬ愛を注いでくれたのだ。わたしが思うに、もし北森一家のような人が、日本にもっといたなら、

朝鮮と日本の国民は兄弟のように愛し合うことができたと思う。日本人のすべてが極悪非道なのではない。(略)「あの聖台土功の貯水池の工事は、無事完成したのですかね」／「いや、たくさんの人が死んだということですから、(略)「(略)鞭むちで叩たたかれ、棒で殴られる労働も辛かったが、もつと辛かったのは『チョーセン、チョーセン』と、同じタコにも馬鹿にされることでした。民族がちがうというだけで、なぜこんなに馬鹿にされなければならないのかと。しかし、竜太君のお父さんは、『人間に変わりはない。人間は皆同じだ』と、(略)。それがどんなにうれしかったか……」

〔小〕『銃口』邂逅かいこう (59)

⑥ 日本兵が朝鮮人になりすまして、今ひそかに満州を脱出しようとしているのだ。(略)「(略)人間の真実は国境を超えて通ずるものがあると思います」

〔小〕『銃口』羅津まで (60)

⑤ 下関まではおよそ二昼夜を要するが、(略) 何れも朝鮮人で、(略) 頼もしい男たちであった。(略) マリ子は抗日義勇軍のシンパだった。(略) ただ一人の姉は、白昼日本軍に連行された。慰安婦にするためであった。以来マリ子の日本人への憎悪は凄まじいものとなった。

〔小〕『銃口』祖国の土 (一) (61)

⑥ 〇月〇日／韓国の牧師であり、かつキリスト教出版の事業をしておられる金昭暎氏と、その夫人で翻訳者の李再信氏、青山四郎牧師ご夫妻と共にご来宅。同じクリスチャンと思えば、国籍の違いなど少しも障りとならず。

〔日〕『この病をも賜ものとして』第2章 (62)

⑦ 〇月〇日 (略) 韓国から作家車潤順チャユンス女子が来ておられたことも喜びの一つ。

〔日〕『この病をも賜ものとして』第3章 (63)

・一九九一（平成三）年、綾子六九歳。

私にとって中国とか韓国とか朝鮮という国は（略）おじさん、おばさん、あるいはお祖父さん、お祖母さんばあの国みたいに思えるのです。日本にとっての親戚の国であり、他のどこよりも濃い親しみと尊敬を感じています。ですから、ああいうふうになってしまつて、何とも言えない、何もしてあげられないという思いでいっぱいです。／でも、人間は抑えられても抑えられても、聖書（ルカ伝一九の四〇）に「このともがらまた黙さば石叫ぶべし」とあるように、本当に石が叫び出すように、純粹に自分たちの信じることを実現しようとする。権力を持っている人は、このことをよく考えてほしい。権力をもつことの恐ろしさ、軍隊がどちらに銃を向けるのかわからないというのは、とても怖いことです。

〔対〕「核状況を超える視点」<sup>(64)</sup>

・一九九二（平成四）年、綾子七〇歳。

○月○日／午後小熊秀雄賞受賞パーティー（略）特別受賞者は、有名な在日詩人、韓国人金時鐘氏なり。  
〔日〕『難病日記』第一章<sup>(65)</sup>

この時期の「黒い川」の表現に変化は見られないが、エッセイ「黒い川の思い出」には、それを見た当初の違和感（「この真つ黒い川は異常」「こんな汚い川のそばで、どうして人間は生きて行けるのか」）が初めて明確に綴られる。だからこそ、そこで暮らした後には「懐かしい光景」（エッセイ「歌志内と私」）

へと変化する様子が印象付けられる。

また「黒い川」の木橋で朝鮮人がひそひそと話し合っていた光景は『石ころのうた』⑤でも描かれているが、「じつと黒い川を見つめていた朝鮮の」連行されて来た人たちは「何を思っていたのだろうか」という問いへの答えは、『石ころのうた』では鉦夫、対して『銃口』ではタコ部屋労働者、という違いはあるものの『銃口』のハイライトにおける金俊明のセリフ②⑤となり表出される。加えて、「朝鮮人」は竜太と山田の帰還を助ける「頼もしい男たち」としても描かれるが、中期作品から『銃口』に至るまで通底する「同じ人間だ」「真実は国境を超えて通ずる」という綾子の人間観は、『銃口』では竜太の朝鮮人観の変化として丁寧に描かれる。「良吉」同様に、タコ部屋を脱走したこの「朝鮮人」を恐れていた竜太が、金俊明に「同じ人間」を実感する①のは、俊明の体温のあたたかさを感じ、「父母もきょうだいもいるにちがいない」一人の人間なのだと気付いた時、として描かれる。

さらに、「マリ子の日本人への憎悪」の要因として、「慰安婦」の記載がここ⑤で初めて用いられる。この「軍慰安婦」問題が浮上したのが一九九一年であり⑥、それを一九九三年（本の窓）六月号）掲載の「祖国の土（一）」の描写に反映させたと思われる。

加えて最も着目すべきは、『銃口』執筆中（一九九一年）の黒古一夫との対談「核状況を超える視点」で、『石ころのうた』の終盤に引用した聖書ルカ伝一九章四〇節（このともがら黙さば石叫ぶべし）を綾子は再引用し「権力を持っている人」にメッセージを伝え、「軍隊がどちらに銃を向けるのかわからない」恐怖について語る点である。『石ころのうた』の末文で提起した「権力の非情さ」を念頭に置きながら、また当時の情勢を踏まえながら⑥『銃口』を執筆していたことが窺えるのである。

二一五、『銃口』連載終了後（一九九三年九月～一九九九年）作家歴三〇～三六年

・一九九三（平成五）年、綾子七一歳。

①〇月〇日（略）旅行者の中には堺からの丁弘鎮・韓吉順チシロコトシご夫妻を始め（一日『難病日記』第二章<sup>68</sup>）

②本当にみんな礼儀正しくて頭がよくて、いい子たちだったですよ。ですから私の中で朝鮮の人に對する印象はとてもいいんです。本当に優秀だという感じがします。（対）『銃口』を完結して<sup>69</sup>）

③一人の朝鮮の子が職員室で二～三人の教師に囲まれて、何か聞かれています。見ると朝鮮語の習字の**手本**でした。先生方がその字の読み方を尋ねていますが、その子はおびえたように返事を**しない**んです。／私はその時まで、朝鮮人は母国語を使つてはならないという日本の法律を知りませんでした。（対）三浦綾子さん、『銃口』を語る<sup>70</sup>）

・一九九四（平成六）年、綾子七二歳。

私は『銃口』の中でこんなことを書いていたんです。／ある朝鮮の男の人が戦時中（略）、働いていたタコ部屋から逃げるんですね。（略）ある日本人が二十日間ぐらい彼をかばって、無事に朝鮮へ帰してあげるんです。／その後、助けた日本人の息子が兵隊として満州へ行き、敗戦に近いころその朝鮮の人に偶然出会うわけです。そのとき日本人は手を縛られて、たくさんの朝鮮兵の銃口に囲まれながら、その人の前に据えられる。朝鮮の人は名前を聞いたときに恩人の息子だと分かって、日本人を助けるんです。（対）「生命・愛が問いかけるもの」<sup>71</sup>）

・一九九五（平成七）年、綾子七三歳。

「うまいぞう先生、これやつか」と、筆入に一杯詰めた唐辛子の粉をつまんで私の口に入れた朝鮮の子、みんなみんな可愛かった。素直だった。優しかった。〔エ〕「予期せぬ来訪者たち」<sup>(72)</sup>

・一九九六（平成八）年、綾子七四歳。

炭鉱町の小学校だったから朝鮮人の子どもたちも沢山いた。みんな素直で本当に立派な生活態度だった。しかし、植民地にされていた国の人々の宿命だったのか、次から次へと入ってきては出ていくという状態だった。炭鉱から炭鉱へと流れて行っただけです。（略）朝鮮の人々はわたしが下宿をしていた家のすぐ後ろの崖の上に住んでいた。大変礼儀正しく恐怖など全く感じることはなかった。崖の上からパタパタ降りてくればわたしたちの部屋にすぐ入れるけれど、そんなことは心配無用だった。先生に対する尊敬も日本人より強い、と感じていました。世間では「朝鮮人は怖い」という風潮があつたが、わたしにはそんなこと全然感じられなくて、噂さというもののいい加減さを考えさせられた。関東大震災の時に、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などという流言蜚語が飛びかい、そのために多くの朝鮮人が日本人に殺されたことを思うと、本当に風評というもののデタラメさを感じ、怒りさえ憶えます。

〔イ〕「生きる」<sup>(73)</sup>

最晩年に至り、「黒い川」の描写は見られなくなるが、「〈黒い川の時代〉」の「朝鮮人」生徒との思い出

を再び『銃口』執筆後の対談、エッセイ、インタビューで語っている。また、エッセイ「生きる」に綴られた、綾子の下宿の後ろの崖の上に住んでいた朝鮮人に「恐怖など感じることはなかった」思いは、既に『石ころのうた』の、特に次章第一節で取り上げる場面で効果的に用いられている。

### 三、『石ころのうた』におけるEの人物造形

本章では、前章二―⑤に引用した「黒い水の流れる川にかかった橋の上で、朝鮮人と」「何か話し合っているE」なる人物にみる造形の特徴を検証する。夕張から歌志内に移ってきた鉱夫Eは、二十代くらいの青年であり、移り住んだ長屋では「危険思想の者」などと噂されていた。

一九四一年、生徒数の増加に伴い、神威尋常高等小学校の分教場が文殊地区に増設され、四月、綾子はそこに転任する。文殊での暮らしは、同年九月に旭川市立啓明国民学校に転任するまでのわずか四カ月であり、『石ころのうた』一四章中二章（七、八章）に描かれるのみであるものの、Eの描写全一四カ所中の四カ所を占め、手紙や回想ではなく対面して対話する貴重な場面として描かれるのが、この文殊での四カ月である。

まず、朝鮮人と共にEが現れる次の場面を考察する。

### 三十一、あの人たちに、たんぼぼぐらい

五月のある日、住宅の庭の芝生に人の声が聞こえ障子をあけてみると、朝鮮服を着た婦人たち三、四人が、一面に咲き群れている庭のたんぼぼを摘んでいる。「(無断で、人の家の庭に入って……)」とムツとする「わたし」に婦人は、「塩漬けにすると、おいしいんですよ」と、素直なのんびりとしたやさしい声で返答する。そこにEが現れる。

婦人たちが口々に「こんにちは」とEに声をかける様子から、既に顔見知りだったのだろう。Eは「わたし」に新居の住み心地を尋ね、庭の上の山を指し、あの「飯場は独身者ばかりの集まりだから」「いつ襲いに来るか知れない」と忠告する。これは先述の一九九六年のインタビューでも述べていることから、実際の状況を描写したものであろう。だが、次の場面はどうか。

朝鮮の婦人たちは、彼とわたしに挨拶をして、立ち去って行った。すると彼はまた口をひらいた。「あの人たちに、たんぼぼぐらい自由に取らせてやってくださいよ。日本は、あの人たちからふるさとを奪い、そのふるさとを、どれほど踏みこじっているか、わからないんですからね」

わたしは、彼と話している間中、絶えず聞きなれぬことを聞かされた。誰も語らぬことばかりだった。それは不安をもたらしもし、また、つまらぬ心配だと笑いたくもなかったが、どこか心のひかれ、温かさといおうか、誠実さといおうか、心にひびくものを感じないではいられなかった。(七)

ここでEは、この婦人たちと親しい間柄であり、「あの人たちからふるさとを奪い」「自由」を奪って

る「日本」が見えている人物として造形されている。それは、逆にそのEの言葉を「聞きなれぬこと」としか聞けていなかった「わたし」を効果的に対称化して浮かび上がらせる、本作に通底する二重構造と言えよう。

また、三浦文学において「ふるさと」は、『続泥流地帯』や『銃口』の重要なモチーフでもあり、朝鮮人の描写は、二章に挙げた朝鮮描写同様に、それを奪われた側に読者の想像を喚起させる役割をも担っているだろう。

とはいえ、人々から「危険人物」と言われ、「わたし」が文殊の新居に移り同僚の三人と住んでいることをいつの間にか知っているほどに情報網を張りめぐらし生活している立場の青年Eを、その人物造形から左翼思想のオルグのような人物<sup>(74)</sup>と想定するなら、このEのセリフは実際のものであろうか。命懸けで<sup>(75)</sup>活動の使命を背負い生きる青年が、若干一九歳の一小学校教師「わたし」の自宅に来て、ここまで付きまとうだろうか。虚構性のあるこの場面を、実際の出来事の中に織り交ぜることにより、あたかも現実の描写であるかのように印象付けている。

次節でも、「わたし」の目を開かせようとするEの鋭い言葉を考察する。

### 三二二、ひどいなあ、愚民もいいところだ

ある日の放課後、「わたし」の教室にEが現れる。毎夜南京虫に刺され包帯を巻いていた「わたし」にEは、「ま、南京虫のみならず、せいぜいいろいろなものに食われてみるべきですね、あなたは「全くの話、ひもじいなんてこと、あなたは知らないでしょう」と迫る。小学校四年の時から教師になるまで牛

乳配達をした、と返す「わたし」に対し、「それにしても生活の意識が低すぎる」と、なおも責める。次いで、「でも、金持ちに生まれたかったとは思わないわ」と自身を「貧しい」ものとして語る「わたし」に、Eは迫る。

「どういふんだらう！ ひどいなあ。愚民もいいところだ」

呆れて彼はわたしを見、

「話にならない」

といった。

「仕方がないわ。わたしとあなたは人生観がちがうのよ」

「冗談じゃない。あなたは、人生観なんて持ってやしない」

「天皇陛下の役に立つ国民を育てるといふ、使命を持っているわ」

「そんなの人生観じゃない。いわば戦争のための国家の標語ですよ。標語と人生観はちがいますよ」

(一八)

「役に立つ国民を育てる」ことを「使命」とする「人生観」を疑いもせず全うしていた自身の愚かさ  
を照らし出す役割として、Eが造形されている。実際本作では、このようなEのセリフの前後に、「わたし」が当時の自身を内省する描写が多く見られる。

例えば、このEのセリフの直後にも、次のような自己凝視の描写を綾子は配置する。

与えられた仕事を、国家のために忠実にするというだけなら、あのガス室の大量殺人の仕事を持たされても、黙々と従うだけのことになりかねないのだ。(略) わたしの立つべき立場を、わたしは当時、全く持つてはいなかった。ただひたすら、天皇のために、よい教師であろうという、当時としてはごく一般的な立場に立っていたのだった。(略)

(この人のいうことは、何の戦力にもならない)

わたしは、音もなく流れる大きな時流に巻きこまれていて、芥あぐたのような存在だった。せつかく、わたしの目を開こうとして近づいてきたEを、わたしは危険な人間としか判断できなかったのである。

(一八)

この、「ただひたすら、天皇のために、よい教師であろうと」したことが、結果的には「あのガス室の大量殺人の仕事」にもなりかねないものであった、とまで自己を断罪する「わたし」の中に、もう一つの想いが見て取れる。それは、このような「愚民」なる「わたし」は、「当時としてはごく一般的な立場にたっていた」だけなのだという意識であり、自身が「音もなく流れる大きな時流に巻きこまれて」いたことへの気付きである。作品の終盤でも、「わたし」は自身を「溝の中に落ちた小さな石」や、「ブルドーザーのような権力」におしつぶされた「石ころ」に喩えているものの、この「音もなく流れる大きな時流」こそ、『銃口』創作ノートの表紙に記されていた「昭和の暗い川」のイメージと重なるのである。

### 三十三、視線と視線がからみ合い

わずか四カ月にして、思い出深い文殊分校を去る日がやってきた。この別れのシーンをとりわけ印象づけるのは、先述の朝鮮人「Iちゃん」が棒につけた大きな風呂敷を振り、「わたし」を最後まで見送ってくれたことである。戦後、このIちゃんが帰国した故国が南北に二分されたこと、その思いを綴った韓国誌を読んだIちゃんが載った号が送られてきたという、後のエッセイにも記された出来事の描写の直後に突如、登場するのがEである。「わたし」を乗せた汽車が神威駅を出発し、砂川駅に着いた次の場面である。

と、その時、わたしはホームに立つEの姿に、思わずハツとして足をとめた。Eはわたしをじつとみつめたまま、近づいてこようともしない。わたしもまた、Eのそばに近づこうとしてなぜか近づけなかった。(略)

とうとうEは、一言も話しかけはしなかった。発車の瞬間、Eの視線とわたしの視線がからみ合った。

(これでいいのだ)

手を振る長田家の人々のうしろに、手をさえ振ろうとせずに立ちつくすEの姿を見つめながら、わたしはそう思った。

(「八」)

ここで八章が終わり、続く九章は「昭和十六年九月一日、予定通りわたしは旭川市の啓明小学校に勤

めることになった」と始まる。つまり、Eが突如現れるこのシーンは、朝鮮人Iちゃんとの思い出と、実録的に始まる次章との間に配置されることにより、あたかも実際にあつた場面であるかのような印象を抱かせる。「Eの視線とわたしの視線がからみ合」うなど、Eの立場や太平洋戦争開戦前夜というこの場面の時代背景を踏まえるなら到底不自然であろうが、そこに気付きにくくさせる仕掛けが施されている。そして、二人が言葉を交わすことなく別れることで、旭川に移りEの元を離れてもなお、「わたし」がEを度々思い出す伏線としていのである。

もちろん、「わたし」の身边に「危険思想」と人々から噂されるEと思しき青年が実在していたことは想像に難くない。だが、綾子はディテールを変えEの人物像を際立たせ、小説としての起伏を創作していったと思われる。そこで次章では、フィクションとしてのEの役割が最も効果的に作品を動かす、「Eからの手紙」を検証する。

#### 四、Eからの手紙、それから

前年の一二月八日、太平洋戦争に突入し、日本の戦局が大きく変わり出した一九四二年の八月末、二学期が始まったある日、夕張の住所から届いたEからの手紙を「わたし」は受け取る。その全文を引用する。

「御無沙汰しました。この間、神威にあなたが現れたことを友人から報せてきました。お元氣の御様子で何よりです。

ミッドウェーの海戦にあなたは何を思われましたか。また、ガダルカナルの戦いをどう思っていますか。恐らく、あなたは何も思わずに生きていたのでしょうか。

今、こうして、ぼくがペンを走らせている時間にも、人が戦争で死んで行く。しかも無駄な戦争で死んで行く。そう思いつつ焦燥を覚えるぼくらの口惜しさなど、あなたにはわかりません。

人間は、わかるべきことを、あまりにもわからなさすぎる。そうした怠惰への怒りを、ぼくはあなたにぶつけたくなる。一体それはなぜだろう。なぜあなたに怒りを覚えるのだろう。

それは、ぼくが非としてしていることを、あなたは是としてしているからだ。ぼくが命を賭して否と叫ぶことに、あなたが無関心でいるからだ。

あなたはぼくにとって無縁の人だ。ちがう世界の人だ。疾とうにそう知っていながら、今更、ぼくは何を書こうとするのだろう。

お元氣で。そのうち、あなたも、つまらぬ男のところへ嫁ぐことになるのでしょね。

堀田綾子さん

（「十一」）

E

この手紙を文体、内容、そして手紙を出すという行為の三点において検証する。  
まず文体に着目した際、男女別に教育が施され、道ですれ違っても言葉も交わさぬほど男女に距離感

のあった当時において、知り合いとはいえ「堀田さん」ならず「あなた」という親密な呼称を、しかもこの短文にして執拗に一〇回も綴るだろうか。

また内容では、日本の戦局が急転直下していた状況下で使命を担っていたであろうEが、「何を思われましたか」「何も思わずに生きていますでしょう」「あなたにはわかりませんが」「あなたが無関心でいるからだ」などと、文殊を去り一年が経過し既に同じ生活空間にさえいない「わたし」の心情に執拗なまでの関心を持ち、これほどまでに介入してくるだろうか。Eは「客観的に見ての、富の不均衡」を問題視し、「社会科学的な視点を持つこと」を「わたし」に迫る人物としても造形されているが、そうであるなら、この手紙の文体は、むしろ「わたし」の感情に過度に迫る点において、物語のすぎると言えないか。さらに、国家総力戦体制が強化された昭和一七年にあつて、大敗に帰した「ミッドウエーの海戦」や「ガダルカナルの戦い」の真偽を問う手紙を送った際、その保持が見つければ「わたし」は官憲に捕えられるかもしれない。逆に、Eが「非としていることを」、「是としている」「わたし」にこのような反体制の、しかも住所氏名が書かれた手紙を送れば、Eの身に危険が及ぶ可能性もあろう。

以上の三点において、Eからの手紙は、明らかにフィクション性を帯びたものと考えられる。

次に、Eからの手紙を読んだ後の「わたし」の意識の変化をたどり、その創作意図を考察する。

「二度、三度、Eの手紙を読み返した」「わたし」は、「この人は、わたしを好きなのではないか」と思うつまり、手紙の末文を「お元気で。そのうち、あなたも、つまらぬ男のところへ嫁ぐことになるのではありませんか」と結び、「わたし」に「女としての読み方」ができるような文面として描かれている。

そして、『天皇陛下の赤子<sup>せきし</sup>を育てる』／という、錦の御旗をかかげた教育の在り方に情熱は持つていても、その天皇がいかなる存在か、また、戦局がいかに動いているかを知る、聡明な触覚は持つてはいなかった」と述べる執筆時の「わたし」の自省が、ここでも綴られる。

ところが、手紙を初読してから六年後の冬に、「わたし」はこの手紙を偶然再読する。敗戦直後に発症した結核のため、一九四八年八月に再度、自宅近くの結核療養所に入所したが、冬のある日、探し物があり、実家に帰った際、タンスの中に敷いた新聞紙の破れ目から見えたEからの「昭和十七年八月二十七日付の」あの手紙を見つける。「Eを懐かしく思い出しながら」再読する。その直後である。

読み終えたわたしはしたたかな一撃をくらったような気がした。七年前に読んだ筈の手紙だが、その時はじめて読んだかのように強烈だった。

七年前には見えなかったものが、今はつきりと見えるのだ。

「無駄な戦争で死んで行く」

わたしはこの言葉を再び読み、三度見つめた。

(「十四」)

一度目に手紙を読み終えた時の「わたし」は、確かに「二度、三度、Eからの手紙を読み返し」ている。しかし、再読後の「わたし」の視線は、「無駄な戦争で死んで行く」の一点に焦点化されている。ここには伏線があった。二人が重逢って間もない一九四〇年、「天皇の立派な赤子を育てるために教えています」(「五」)と答えた一七歳の「わたし」にEは、「だから日本はだめになる」と吐き出すように言っ

いた。また一九四一年時点でもEは、朝鮮服の婦人たちがたんぼぼを摘みに来たあの庭で、「国は興りも、亡びもするもんなんですよ。いつまでもこの炭鉱が栄えるわけじゃないんですがねえ」(七)とも言うていた。「わたし」を慕う生徒「N」が満州の少年義勇軍に入る際、「満州国は砂上の楼閣に過ぎない」(七)とも言っていた。そして、その都度反発を覚える「わたし」を対称化し、浮かび上がらせるために、綾子はEの語りを効果的に配置していったと考えられる。

執筆時の「わたし」が、作中の「わたし」に、このEからの手紙を再読させた意図と効果は、もう一つ考えられる。敗戦を迎え「わたし」は、「(とうとうわたしも肺病になった) / 内心、『ざまあみろ!』と嘲笑し」自暴自棄に陥っていた。療養所内で大学生や新聞記者や詩人やヒューマニストたちが唾を飛ばしながら語り合っている、「わたしには一様に不安定に見え」「渴きを覚えて行つた」ほどに、虚無的に鬱々とした二年が流れていたのである。

見聞きする一切から心を閉ざしていたこの「わたし」の心に風穴を開け、躍動させる存在としてEの手紙を用い、「わたし」に再読させたのだろう。ここから作品は、加速的に終焉を迎える。「わたしはふいに、自分が路傍の小さな石ころのように思われた。いや、それはわたしだけではない。同時代に生きた多くの人の姿なのだ」。

ただし、「わたし」は自身を、踏まれ蹴られ溝どぶに落ちた「小さな石ころ」と重ね、「石ころのわたしの青春」の愚かさを悔いるのみではなく、聖書ルカ伝一九章四〇節との出会いが「石ころのわたし」を叫ばせ、この書を書かせたことを明るみにする。

「此のともがら黙さば石叫ぶべし」（ルカ伝第十九章四十節）

弟子の口を封じようとした人々に、キリストの答えた言葉である。

故に、わたしはこの書を記した。叫ぶほどではなくても、どんなつまらない石ころもまた、歌うものであることを人々に知ってほしいが故に。そして、すべての石ころをおしつぶすブルドーザーのような権力の非情さを知ってほしいが故に。

（「十四」）

「わたしは何のために自伝を書こうとするのであろう」から書き起こされた本作品で、これが「わたし」が見出した答えである。その執筆契機は、黙されても「石」は「叫ぶ」と語ったキリストの言葉との出会いである。そして、作家三浦綾子として生きる現在の自身に繋がる原点が、Eからの言葉や手紙に映し出されるという手法を用いて、「石ころのわたしの青春」のあった「黒い川」の時代を、本作で蘇らせたと言えよう。

ただし、末文にある「すべての石ころをおしつぶすブルドーザーのような権力の非情さ」に関しては、その存在を場面、場面ではのめかしつつ、特に手紙の再読場面で提起されるものの、「権力」及び「権力の非情さ」の正体自体は本作では展開されずに作品が閉じられる。これは単行本の「あとがき」<sup>(76)</sup>で、「私が育った時代、その時代の流れは、決して自然発生的なものではなかったと思う」と述べているように、綾子の脳裡には、本作では描かなかつた「権力を動かす者たちが、強引に一つの流れをつくり、その流れの中に、国民を巻きこんで行った」時代について、やがて明かしていこうという構想が既に生まれていた、と考えられる。そして今度は、「おしつぶ」された「わたし」以外の「すべての石ころ」の叫びを、

北海道綴方教育連盟事件を軸に据えた『銃口』において蘇らせていくのである。

## 結

本研究は、三浦綾子の自伝小説『石ころのうた』における「Eからの手紙」のフィクション性を論証した、初の試みである。

序では、作品末文に問題提起された「権力の非情さ」は実は本作では描写されておらず、綾子が造形した「Eからの手紙」を戦後「わたし」に再読させるといふフィクションを用いて「わたし」に「一撃をくらわせ」、それから最後の長編小説『銃口』が生まれたのではないか、という仮説を提示した。

そこで第一章では、今回『石ころのうた』に『銃口』前史としての位置づけを見出すに至った『銃口』の一次資料調査結果を示した。『銃口』創作ノート表紙の「昭和の暗い川」や、その時期の日記抄の「黒い河の流れ」及び「朝鮮人」に関する記載に、『銃口』の核心に繋がり得るものがあることを発見すると同時に、「暗い川」「黒い川」「黒い河」などタイトルの原形に揺れが見られる点にも着目した。

つづく第二章では、三浦作品から「黒い川」及び「朝鮮」に関する描写を掘り起こし、「黒い川」が流れる歌志内での教師時代も、作家人生を歩み始めてからも、「朝鮮」への想いが生涯貫かれていたことを確認した。それらがいつからどのように展開してきたのかを、長くはなつたが詳述せざるを得なかつた。だが、その結果を踏まえ、第三章では『石ころのうた』において朝鮮人に対する「わたし」の目を開

かせてくれたEの言動を取り上げ、そこにフィクションとしての造形を確認した。もし『石ころのうた』にEがいなければ、朝鮮人を描写することが唐突になっていたかもしれない。つまり、『石ころのうた』におけるノンフィクションとしての「朝鮮人」描写は、Eというフィクションナルな存在を媒介することにより、作品化されたのである。

さらに第四章でも、「Eからの手紙」にフィクション性を確認した。それを「わたし」に再読させ、一撃をくらわせる。「石ころ」の「わたし」は「叫ぶ」者でもあることを、聖書のキリストの言葉と出逢わせ知らしめるためである。また、『石ころのうた』で問題提起はされたが描かれなかった「権力の非情さ」は、後に『銃口』で像を結ぶ。

「これまで「自伝」小説四部作の一つとして位置付けられてきた『石ころのうた』に、本稿では、Eを造形した作家のストラテジー<sup>(7)</sup>という新たな側面を見出したが、他の自伝小説及び伝記小説にもこの手法は用いられているのであろうか。その検証を、今後の課題としたい。

(はやし かなえ・文学研究科日本文化専攻博士課程一年)

凡例

- ・ 底本として、『三浦綾子全集』（全二十巻、主婦の友社、一九九一年七月―一九九三年二月）を使用した。ただし、同全集に収められていない作品からの引用は、註に記す通りである。
- ・ 三浦綾子『銃口』上下巻の引用は、小学館（一九九四年三月）に拠った。
- ・ 『石ころのうた』『銃口』及び、複数回引用した作品のみ、章または章タイトルも明記した。
- ・ 単行本化された作品名を記載する際は、雑誌掲載作品または全集掲載作品であっても『』、単行本のタイトルにされていない作品名の表記は「」に統一した（第二章、註も同様）。
- ・ 引用文における傍線は、筆者が施した。
- ・ 引用文において、改行箇所には「／」を付した。ただし略または中略箇所の「／」は省略した。
- ・ 略及び中略箇所は、いずれも「（略）」で記した。
- ・ 初出の副題及び連載期間等で現物を確認できなかったものは、監修黒古一夫 著岡野裕行『三浦綾子書誌』（勉誠出版、二〇〇三年四月）に拠った。
- ・ 未発表原稿のエッセイ「歌志内と私」は、所収『国を愛する心』（小学館新書、二〇一六年）に倣い、初出は「黒い川の思い出」の次に位置付けた。
- ・ 文芸評論家等の敬称は略した。

[註]

- (1) 田宮裕三「解説『石ころのうた』」角川文庫、二〇一二年、三六一頁。
  - (2) 水谷昭夫「燃える花なれど」新教出版社、一九八六年、二二一―二二二頁。
  - (3) 小田島本有『三浦綾子論 ―その現代的意義―』柏艸舎、二〇二二年、二二―二六頁。
  - (4) 佐古純一郎『三浦綾子のこころ』朝文社、一九八九年、七―九頁。
  - (5) 高野斗志美『評伝三浦綾子―ある魂の軌跡 旭川叢書第27巻』旭川振興公社、二〇〇一年、七八―九三頁。
  - (6) 三浦綾子「短歌に寄せて」川の歌「初出、ベルママン」一二月号、学習研究社、一九八四年(一月一日)。本稿では『三浦綾子全集 第十九巻』所収の『白き冬日』を使用、二八四頁。
  - (7) 黒古一夫『三浦綾子論 ―「愛」と「生きること」の意味― 増補版』柏艸舎、二〇〇九年、一六〇頁。
  - (8) 上出恵子『三浦綾子研究』双文社出版、二〇〇一年、一六一―一六三頁。
  - (9) 石川明人「三浦綾子の軍国教師時代とキリスト教」(桃山学院大学キリスト教論集)第50号、桃山学院大学、二〇一五年三月(三日)一―三―三八頁参照。なお、本稿では触れていないが、本来「自伝小説」として書かれた『石ころのうた』を、軍事・宗教学史の観点から論じる石川の見解は、綾子の自伝小説のみに、氏の求める戦争問題の答えを見出そうとする点において、筆者(林)とは異なる。その一例として、次に二点挙げる。
- ① 石川は、日本基督教団はその成立から敗戦まで、戦時体制に巻き込まれ、教会も牧師も信者も戦争に協力していった「綾子もこうしたプロセスを知らないはずはなかったと思われるが、彼女はそれについての思索を深められない」(二二三頁)、「綾子はこうした矛盾に十分気付いてはいたが、直接的にはそれについての思索を深められなかった点は、彼女の平和論の限界だと言わざるをえない」(一三三頁)と記す。だが、仏教学者ひろさちやとの晩年の対談で綾子は次のように述べ、信仰を持つ者が戦争を繰り返す矛盾について問題提起する。「三浦 私が不思議に思うのは、この世には神仏を信じている人たちがたくさんいるのに、どうして戦争が認められているのか――ということなんです。人間の世界では歴史上こうなっているとかが、経済上こうなっているとかがいい」とお答えになった神様はいないと思うんです。それなのにキリスト教の国でさえ戦争をする。(略)どうして誰も止

「められないのでしょうか。」(キリスト教・祈りのかたち)主婦の友社、一九九四年、九四―九五頁。)

② 石川は、「そもそも、綾子はその自伝の全体において、戦争という事象を通して見出される人間、ないしは自身の本来的な弱さ、愚かさを告白したわけであり、それは信仰的な次元に立ったうえでの反省でもあった。」(一三四頁)と記す。だが、『石ころのうた』に描かれた当時の綾子は受洗以前であり、キリスト教の神ではなく天皇を神と崇めていた。したがって、石川が述べる「信仰的な次元に立ったうえでの反省」はあくまでも執筆時のそれを指すはずである。だが、同書で綾子が追究を試みるのは、情報が厳しく統制され「戦争反対」を唱える者は弾圧された当時において、それでも軍国主義の誤りに気付く手段はあったのか、という自らへの問いであり、さらには、誤りに気付いた者が声を挙げて「非情」なまでに押しつぶした「権力」はいかにして生まれたのか、という「時代」への問いである。石川は、「彼女が『戦争』をあくまでも国家や政府を枠組みとした営みだと捉えていた」(一三三頁)と記すが、『石ころのうた』(一九七四年、三二―四頁)のあとがきに綾子は、「私が育った時代その時代の流れは、決して自然発生的なものではなかったと思う。時の権力者や、その背後にあつて権力を動かす者たちが、強引に一つの流れをつくり、その流れの中に、国民を巻きこんで行ったのだと思う」と記す。つまり、石川が述べる「枠組み」としてではなく、綾子は「権力」を「人間」の仕業と考えていることが見て取れる。クリスチャン作家として以後、綾子は人間の罪深さ(原罪)を作品で提示し、そこからの救いを全ての作品において追求する。また、「権力の非情さ」の実態は『銃口』において像を結んだ、との立場を筆者はとる。

(10) 註(5) 同書、一〇八一―〇九頁。

(11) 註(3) 同書、二二二―二三頁。

(12) 田中綾『あたたかき日光ひかげ 三浦綾子・光世物語

(北海道新聞社、二〇一三年)は、光世日記を基に創作された物語であり、同日記の調査・研究により明らかになった一四の新資料が作中に用いられている。

(13) 眞杉章からの三浦綾子宛書簡(一九八八年九月二日発信、三浦綾子記念文学館所蔵)には、次のように記されている。――『氷点』にはじまる先生の「神」と「人間」という基本的なモチーフを軸として、混沌の二十世紀が、二十一世紀へ贈るメッセージとしていただきたいということです。／舞台背景は、激動と混沌の『昭和』という時代です。

- (14) 三浦綾子「生かされてある日々」(「信徒の友」日本基督教団出版局、一九八七年四月—一九八九年九月に連載。) 本稿では『三浦綾子全集 第二十卷』所収の『生かされてある日々』を使用、八六頁。
- (15) 三浦綾子「黒い川の思い出」(初出、「FRONT」7月号、財団法人リバーフロント整備センター、一九八九年七月一日。) 本稿では『国を愛する心』(小学館新書、二〇一六年) 所収の「黒い川の思い出」を使用、一三二—一三四頁。
- (16) 三浦綾子「生かされてある日々」(「信徒の友」日本基督教団出版局、一九八九年一月—一九九二年八月に連載。) 本稿では『この病をも賜ものとして 生かされてある日々2』(日本基督教団出版局、一九九四年) を使用、二九頁。
- (17) 註(16) 同書、一九一—三〇頁。
- (18) 註(16) 同書、三〇—三二頁。
- (19) 光世日記「一九八九年八月二日(木)」の欄に、「吾らはNHKの放送車(キャンピングカー)で、聖台ダム建設に関する情報を集めなければならなかった」「聖台ダムでは、高藤氏から、建設に関することをたくさん聞いた」とある。実際は、英語表記である。
- (20) 林香苗「宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』——タイトル「銃口」における一考察——」(『年報 新人文』第二十一号、北海学園大学大学院文学研究科、二〇二四年二月二五日)、一一二—一五八頁参照。
- (21) 初出、「井戸」(「オール読物」一〇月号、文藝春秋社、一九六五年一〇月。) 本稿では『三浦綾子全集 第二卷』所収の「井戸」を使用、一〇頁。
- (22) 初出、「どす黴くさき流れの中より」(「小説宝石」一二月号、光文社、一九六八年一月。) 本稿では『三浦綾子全集 第三卷』所収の「どす黴くさき流れの中より」を使用、一九九、二一九頁。
- (23) 初出、「チミケツプ湖」(「旅情 主婦と生活社、一九六九年三月一五日。’) 本稿では『一日の苦勞は、その日だけで十分です』(小学館、二〇一八年) 所収の「チミケツプ湖」を使用、五三—五四頁。
- (24) 初出、「奈落の声」(「小説宝石」四月号、光文社、一九六九年四月。) 本稿では『三浦綾子全集 第四卷』所収の「奈落の声」を使用、八、三一—三二頁。
- (25) ミシエル・フイエ著 武藤剛史訳『キリスト教シンボル事典』白水社、二〇〇六年、六一頁。
- (26) 同新聞に、「希望と力にみちた舞台 在日朝鮮中央芸術団の公演をみて」と題した三浦綾子の寄稿が掲載されている

る。その一部を次に引用する。「長い苦難の歴史を知るゆえに、感動は大きかった。／日本人の一人として、日本の侵略を心から恥じ、おわびしたい思いでいっぱいである。／それにしても故国を一度も見たことのない人々に、何がこの歌を、踊りを育て上げさせたのか。」この運動がどうか世界のすべての人にうったえるものとなるように。そして、朝鮮に自由に往き来することのできる真の平和が一日も早くきますように、心から祈らずにはいられない。」

(27) 初出、「石ころのうた」〔短歌〕角川書店、一九七二年四月―一九七三年八月に連載。本稿では『三浦綾子全集 第五卷』所収の『石ころのうた』を使用、二三〇頁。

(28) 註(27) 同書、二二七、三二七、三三四―三三五、三五一、三六六―三六七、三八九頁。

(29) 初出、「天の梯子」祈りは世界を変える(二)主婦の友区 一二月号、主婦の友社、一九七七年二月。本稿では『三浦綾子全集 第十七卷』所収の『天の梯子』を使用、二二五―二二六頁。

(30) 初出、「岩に立つ」講談社、一九七九年五月二四日。本稿では『三浦綾子全集 第九卷』所収の『岩に立つ』を使用、五四九頁。

(31) 初出、「青い棘」〔ベルママン〕学習研究社、一九八〇年一月―一九八二年二月に連載。本稿では『三浦綾子全集 第十一卷』所収の『青い棘』を使用、七二頁。

(32) 註(31) 同書、九七頁。

(33) 講演「生きるということ」(明石上ノ丸キリスト教会にて、一九八〇年四月一八日。本稿では『愛すること生きること』(光文社、一九九七年) 所収の「生きるということ」を使用、七一頁。

(34) 初出、「綾子からの手紙」真の平和を願って(「マミイ」七月号、小学館、一九八一年七月一日。本稿では『三浦綾子全集 第十八卷』所収の「真の平和を願って」を使用、一五一頁。

(35) 初出、「愛の鬼才」(小説新潮)新潮社、一九八二年六月―一九八三年九月に連載。本稿では『三浦綾子全集 第十一卷』所収の『愛の鬼才』を使用、四九二―四九三頁。

(36) 初出、「短歌に寄せて」牢に満つるとも(「ベルママン」八月号、学習研究社、一九八二年八月一日。本稿では註(6) 同書、一三四頁。

(37) 初出、「目を覚まして!」(「オリブ通信」オリブの会、一九八三年三月三日。本稿では註(15) 同書、六一頁。

- (38) 初出、「綾子からの手紙」少数者に目を注めよう」(「マミー」八月号、小学館、一九八三年八月一日。)本稿では註(34)同書、一七八頁。
- (39) 初出、「愛は国境を超えて」(「クリスチャン・グラフ」クリスチャン・グラフ社、一九八四年二月)一九八三年八月中央法規出版刊・森山論著「真珠の詩」から再録)、本稿は註(15)同書、五八頁。
- (40) 車潤順「天来の声―日韓をつなぐ愛の50年」(新潮社、一九八三年四月一日)の発刊に際し、既に一〇年来の信仰の交わりを持つていた三浦綾子は、書評「民族の痛みを映す優れた自伝 車潤順『天来の声―日韓をつなぐ愛の50年』」(「波」新潮社、一九八三年四月一日、三五―三六頁。)を執筆している。その中で綾子は、潤順一家が戦前の日本と戦後の韓国で受けた迫害と、「わたしたちはみんな同胞きょうたいでしょう!」という潤順の叫びを記し、「すべての日本人はこの書を読む義務がある」と結ぶ。
- (41) 初出、「母国を引き裂かれた人々」(「ベルママン」三月号、学習研究社、一九八四年三月一日。)本稿では註(6)同書、二六八―二七〇頁。
- (42) 初出、「死を越えるもの」(「ベルママン」六月号、学習研究社、一九八四年六月一日。)本稿では註(6)同書、二七五頁。
- (43) 註(6)同書、二八四頁。
- (44) 初出、「賄賂まぐわいと不正な裁き」(「宝石」一〇号、光文社、一九八五年一〇月一日。)本稿では註(6)同書、四五〇頁。
- (45) 初出、「ちいろいろ先生物語」(週刊朝日)朝日新聞社、一九八六年一月三二―三〇日―一九八七年三月二七日に連載。)本稿では「三浦綾子全集 第十三巻」所収の『ちいろいろ先生物語』を使用、七七頁。
- (46) 註(45)同書、九三、九五―九六頁。
- (47) 註(45)同書、一〇三頁。
- (48) 初出、「夕あり朝あり」(「北海道新聞」北海道新聞社、一九八六年九月三日―一九八七年五月三日に連載。)本稿では註(45)同書、五四三―五四四頁。
- (49) 註(45)同書、五六九頁。
- (50) 初出、「われ弱ければ―矢島梶子伝」(「幼児と保育」小学館、一九八八年四月―一九八九年七月に連載。)本稿では「三浦綾子全集 第十四巻」所収の『われ弱ければ―矢島梶子伝』を使用、二四八頁。

- (51) 註(50) 同書、二七〇頁。
- (52) 講演(第30回全国自治体病院学会特別講演、旭川市にて、一九九一年九月二一日。) 本稿では『キリスト教・祈りのかたち』(主婦の友社、一九九四年) 所収の「第1部 2命・この尊きもの」を使用、三七頁。
- (53) 註(15) 同書、一三二―一三三頁。
- (54) 註(15) 同書、一三五―一三七頁。
- (55) 『銃口』上、一三〇頁。
- (56) 註(55) 同書、一三九、一四〇、一四五、一四八頁。
- (57) 註(55) 同書、一六六頁。
- (58) 註(55) 同書、一八九頁。
- (59) 『銃口』下、一三三、一三七―一三八、二四三―二四四頁。
- (60) 註(59) 同書、二五〇、二六〇頁。
- (61) 註(59) 同書、二六五、二六七頁。
- (62) 註(16) 同書、一〇九―一一〇頁。
- (63) 註(16) 同書、一五三頁。
- (64) 初出、『異議あり! 現代文学』(河合出版、一九九一年三月。) 本稿では『三浦綾子対話集1 人と自然』(旬報社、一九九九年) を使用、一二二頁。
- (65) 初出、「生かされてある日々」(「信徒の友」日本基督教団出版局、一九九二年八月―一九九五年三月まで連載。) 本稿では『難病日記』(角川文庫、二〇〇〇年) を使用、四〇頁。
- (66) 吉見義明『日本軍慰安婦』(岩波新書、二〇二五年)、二頁に、「『軍慰安婦』問題が人びとに強いインパクトを与え、解決すべき問題として浮上したのは、被害者として韓国人の金学潤キムハクジュンさんが名乗り出た一九九一年から」とある。
- (67) 竹林一志「三浦綾子文学と戦争―戦争の描かれ方の変遷を中心として」(「キリスト教文学」第四十一号、日本キリスト教文学会、二〇二四年五月二一日)、一〇七頁に、「『銃口』連載中の一九九〇年、イラクがクウェートに侵攻した後、日本政府が自衛隊海外派遣のためにPKO協力を成立させようとしていたときも、三浦は『戦争への道

を許すわけにはいかない』として『自衛隊の海外派兵は反対』との声明を出す（三浦綾子「一九九〇、一八頁」）とある。

(68) 註(65) 同書、一四八頁。

(69) 初出、「対談 特別連載小説『銃口』を完結して」三浦綾子、黒古一夫、司会眞杉章（『本の窓』9・10月号、小学館、一九九三年一〇月一日。）本稿では『三浦綾子対談集 希望、明日へ』（北海道新聞社、一九九五年）を使用、一三三頁。

(70) 初出、「私と生徒たちとの個人的な出会い 三浦綾子さん、『銃口』を語る」（『エデュカス』第5号、大月書店、一九九四年七月。）本稿では、註(69) 同書、一六三頁。

(71) 註(52) 同書、第2部 生命・愛が問いかけるもの 三浦綾子・ひろさちや対談「一五二―一五二頁」。

(72) 初出、「〔命ある限り〕予期せぬ来訪者たち」（『野生時代』5月号、一九九五年、五月一日。）本稿では『命ある限り』（角川文庫、一九九九年）を使用、一〇九頁。

(73) 三浦綾子『さまざまな愛のかたち』（ほるぷ出版、一九九七年）、九三―九四頁。同書の「まえがき」に、一九九六年十一月、三浦綾子宅にて黒古一夫によるインタビューが収録されたことが記されている。

(74) 上杉朋史著 荻野富士夫解説『西田信春——蘇る死——』（学習の友社、二〇二〇年）第四章「九州地方オルグとして」、二二〇―二四六頁参照。

(75) 明石博隆・松浦総三編『昭和特高弾圧史 1——知識人にたいする弾圧上』（太平出版社、一九七五年）第二部「支那事変」下の弾圧の強化——一九三七年七月～四一年二月、一一一―一三二頁参照。

(76) 三浦綾子『石ころのうた』角川書店、一九七九年、三一―四頁。

(77) 田中綾「三浦綾子『道ありき』（『青春編』）の引用歌——小説における短歌引用という戦略」（『編集 公益財団法人北海道文学館「図録・作品集 北方文芸 2017」北海道文学館、二〇一七年、一七三―一七九頁）の中で、自伝小説『道ありき』（『青春編』）における「作家のストラテジー」については、その小説的效果と共に既に詳述されている。



# 翻刻『八雲路日記 三上』(一)

武田 佑希子

本稿で翻刻を行った『八雲路日記 三上』は、安芸国山県郡本地村の国学者・後藤夷臣（一七九一—一八四一）が、天保四年（二八三三）に出雲へ因幡方面へ遊歴した際の紀行文である。既に前号（二十一号）において前半部（主に出雲・伯耆）を翻刻したが、本号では後半部にあたる因幡・但馬までを対象とする。底本は東京大学国文学研究室（本居文庫）所蔵写本によった（底本の書誌情報は前号を参照されたい）。

本資料は「日記」と題されてはいるものの、詳細な日付の記録は乏しい。旅の逐一を克明に記したというよりは、各地の寺社・霊跡参詣や伝承の聞き書きを記録したものと、いう性格が強い。滞在期間についても「三日ばかり」「日を重」といった表現にとどまる。ただし、逗留の様子を詳しく残す箇所もある。たとえば、もろ磯に滞在した際には「こゝにしばらくありて、古き代の事とも解さとしければ、人々あまたなれしたしみて来む。春までもなとときこえけれど、急かるゝ事のありて強て立出は」とあり、夷

臣が訪問先にて古代の事柄を説くなかで、人びとに親しまれたことがわかる。夷臣の人物を伝える印象的な一節である。

天保四年の夷臣の紀行は、六月二十三日に安芸国を出発し、本文によると最終目的地は紀伊国である。そのうちの安芸から但馬までを『八雲路日記 三上』に著し、続く丹後から紀伊までの旅程を『八雲路日記 三下』、さらに翌夏からの旅を『八雲路日記 四』として書き継ぐ構想をもっていたことがわかる。

前号でも述べたとおり、『八雲路日記 三上』の前半部（主に出雲・伯耆）は出雲大社の社家出身で千家俊信らの門人である富永芳久によって写されているが、舞台が出雲を離れたためか後半部については省略されている。その後半部では、各地の神社参詣に加え、葬送儀礼や死体に関する風俗・怪異譚の収集が目立つ。これらは、文政七年（一八二四）成立の思想書『泉国弁』に見られる死生観・靈魂観と通じるものであり、夷臣が文献上の他界観を实地の見聞によって検証しようとしていたことを示している。夷臣の信仰を考える上では、但馬国大屋郡での北垣方照との再会が特に重要である。夷臣はすでに出雲国水の浦で北垣と知遇を得ており、両者は久計門（加賀の潜戸）をともに訪れ、杵築大社を敬うという大国主信仰を共通基盤として交流した。北垣邸に滞在した夷臣は、北垣に乞われて「八雲立出雲国は八百丹杵築の里の大宮に鎮坐給へる」と歌を詠んでいる。このような信仰を媒介とした交流は、夷臣が在地の知識人や神職との結びつきを深めつつ国学的関心を展開していたことが読み取れる。

夷臣の大国主信仰を念頭に置くと、前半部で見られた揖夜神社への参詣の理由が見えてくる。オホナムチ（大国主）が根堅州国から逃れ、スサノヲに追われて黄泉比良坂を通過したという神話を踏まえれば、夷臣にとって揖夜神社は、オホナムチの霊跡＝黄泉比良坂の現地として認識されていた可能性

が高い。また、夷臣は揖夜神社のほかにも静間神社や因幡の白兔神社などオホナムチにまつわる霊跡を訪れている。つまり、『八雲路日記 三上』は、単なる社寺巡礼の紀行文ではなく、大国主の霊跡調査の一環として著されたものといえることができるのである。こうした視点は、夷臣のなかで死生観の探究と大国主信仰とが緊密に結びついていたことを示すものといえよう。

このように『八雲路日記 三上』は、近世後期における死生観や黄泉比良坂の比定をめぐる言説を考察するうえで貴重な史料であるとともに、夷臣の信仰実践と知的交流の広がりを示す資料として、後藤夷臣研究に新たな視座をもたらすものといえることができるのである。

(たけだ ゆきこ・文学研究科日本文化専攻修士課程二年)

## 参考文献

- 桐原朋夫「皇学者後藤夷臣(一)」、『鮑薇』鮑薇同好社、第十卷二号、一九三四年) 一一―八頁。
- 桐原朋夫「皇学者後藤夷臣(二)」、『鮑薇』鮑薇同好社、第十卷三号、一九三四年) 五―一三頁。
- 新見吉治「後藤夷臣」、『尚古』第一年第五号、一九〇七年) 五―一〇頁。
- 新見吉治「後藤夷臣(承前)」、『尚古』第二年第一号、一九〇七年) 五―一〇頁。
- 鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』(塙書房、二〇一二年)
- 千代田町役場『千代田町史 近世資料編(下)』(一九九〇年)
- 名田富太郎『山県郡巡り道中記』(広陵社、一九三一年) 五―二五頁。



凡例

本文表記については、読解の便宜のため次の方法をとった。

1. 漢字は原則として新字体に統一したが、一部の漢字は原本の用字に従った。
2. 変体仮名は原則として平仮名に改めた。
3. ルビは、原本によるもの以外は打たなかった。
4. 本文中に適宜句読点、中点（・）を加えた。
5. 不明な文字は□で示した。
6. 二行割注は「」で示した。
7. 明らかな誤字・脱字等は右傍に（ママ）と傍注した。

庚申堂の法師（ママ）きとふらへり。御熊野神社に詣。此山に柱石といふあり。珍らしきものなり。一山ことくく材木を積重ねたるかことく「長一丈より三四丈にいたる角面尺はかりなり七八寸」、柚人の業も及はぬはかりいさゝかもゆかめるなく、奇しきものなり。御社に詣る山路の雁岐カンキといふもの、みなこの自然の角石なり。

此処より白兔の神社に詣。此処は気多か崎にはあらで、うつみ浦と云。渚近き松原の中に御社はたゝせ給へり。古より、此地にまつる御社とも見えまうす。されとも気多崎には御社はなしと云り。里俗云、かの御熊野大神、気多

勝見  
和名抄勝見  
式云 加知見神社

因幡川

六帖 読人知ず  
いなは河いなどしつひに  
いひはてはなかれて世に  
もすましと思ふ

和名抄私都

崎より隱岐の嶋に一夜のほとに石の橋を渡さむと思ひて、神奴に仰せて、御熊野社より氣多崎までかの角石を置せ給ふに、神奴いたつきて、夜はまたきに鶏の鳴けるよしいひければ、竟に其功ならずして止りぬとて、御熊野の角石、氣多崎の海濱に数多ありと云云。

是より濱嶋の加呂の神社に詣。祭れる神は吉備大臣なり。此臣、唐より帰朝の時、御船この処に着ぬとなむ。委しき事とも問ほつかりしかとも、神主大殿こもりして、あれははたさずして過ぬ。古きことに因幡河とよみしは、取鳥のこなたの河なるへし。こゝより勝見神社に詣。神主飯田秀雄はかねて聞しれる人なれば、ふりはへて訪らひけるに、主は紀国に往てありけるよしにて家にあらず。此処に温泉のあれば、遠近人あまたつとひをれり。三日はかり湯あみて又近きわたり吉岡の温にゆく。これより私都キヤイチの里をたつねゆく。此所の寺に入て、古きことともを問かくものする故は、養和の帝安徳天皇軍人になやされ給ひて、長門国檀浦にて海に入崩御ぬといふは、いとまかしこき事にて、実には此私都の里に御供仕へまつりて、竟にこゝにて崩御ましぬとなむ。於此この帝の御陵二位尼の墓といふもありて、御遺物にもこの寺に残れり。但馬国に平氏の人々の跡もあれば、とかくに定めかたくなむ。そも此帝の海に入て崩御まし、といふ事は、うつなくそら言にして義経深くいとはり奉りて、軍の中より供奉し奉りしかは、御飾をおろし給ひて、筑紫の

こなたにて崩御し給ふなり。其御跡は今の安徳寺なりと云。或云、檀の浦より供人あまた仕へ奉り、肥後国の山中五箇庄〔八里より山中に入ること七里〕にのかれ給ひて、彼地にてかくれ給ひ其処の氏神とあかめまつるは養和帝なりと云。其外、この帝の御跡といふことあまたあるか中に、近き頃瀧澤氏か書る玄同放言といふものに珍らしき説を云り。其書に云、文化十四年<sup>丁丑</sup>の秋、撰津国能勢郡出野村、農夫勸兵衛といふ者の家の天井より奇書一通あらはれたり。其書は竹の筒にこめて水銀を以て充塞<sup>ミチ</sup>たり。打破て見るに、寿永の鬪戦に、安徳天皇の従亡の忠臣なる左少弁藤原朝臣経房の遺書なり。其書曰、三月十八日石見国をさして潜幸なし奉りしこと、五月卅日に但馬の国府に近づき、十五日能勢の長尾といふ処より野間の里へわたらせ給ふよしを云り。此道すから、先帝御脳の事七月二日に至て、里人与三丁太らか議によりて、竟に此里に潜せ奉りし事をいへり。是より後、岩崎といふ処へしはく御幸なりしこと、長月廿日あまり紅葉を御覧とて河合へ御幸の事。寿永五年、<sup>二</sup>都は丈治三年<sup>二</sup>といふ。條下に春は日毎に岩崎へ御幸なりし事、卯月の始より御腦しきりにして十七日のあした霞登<sup>カケ</sup>給ふと云り。御衣調度などを岩崎に齋祀世をはかりて八の宮と申せしを若宮八幡宮と合せ祭るといふ。條下に典侍も吾もさまかへて都の大原に参らむ○<sup>○</sup> よういしあへと、種長・景家しひてと、め形<sup>サマ</sup>かへはのちたえむ。典侍をめとりて○<sup>○</sup> に仕へ奉るこそ臣たる

職なれといひしらす。御社はなれむも心うく、里のものになりて、小家しつらひ田かへし業として田しろをひらき、末の年御国意ミコキタマはて、典侍にミコキタマかたらひ御社に仕奉る種長は、君の来見ケルミの御歌を京にもて来見権現とあかめまつれり。あなかしこ此書人に見することなかれ。

建保五丑年九月二日從四位上侍從行左少弁藤原経房

元仁元辛甲申八月行年八十三歳 左磨へ 録

右は玄同方言本文を略要をとりてしるせり。かく此帝の御跡のこと、さま／＼にいへれと、いつれか実の御跡ならむ。かにかくに長門国にて崩御のことは、いともかしこき空言にこそあらめ。寿永の乱は此帝の御心より起りし事にはあらず。よし経も、罪なき帝を海には入奉らむ。軍師にて後は人々源家の稜威をかしこみて、軍よりのかれし平氏の人々またこの帝の御事を人しらすして過行まに／＼。竟に其御跡御名代ナシロたに拝り給はず。いとも悲しむべき事なり。

是より菖蒲シャウフむら座光寺にゆく。こは京の因幡葉師この寺より飛行せしとて、この寺には蓮坐と後光はかりあり。

取鳥近き摩尼山にまうて、これよりさぬきといふ処にたつねいきて八上比女神社にまうつ。かつて岩井の里の温泉に日数を経て、但馬国にうつる。千谷とふ処を過るに、このわたり式内の神社あれともいたく雨ふれはまうてす。

さぬき

和名抄

郡散岐

古事記云稲羽

之八上比女

懷中抄

心してもろよせ河の水な  
らは淵瀬もわかす思ひわ  
たらむ

このうた諸儀をよみたる  
なりと或書に云り

湯村とふ処にきて、また温泉に浴して、しはし日を重て宿りけり。こゝより、もろ儀といふ処に往て医師何某か家に宿る。こゝにも来たる故よしは、この諸儀の里、正月の連繩かさり・門松、其外いはひ飾りしものを佐義長に焼はせしけるに、其灰にことゝく凝かたまりて、碧色皆剛にして、好事の人愛翫すへきものなりときゝて、宿のあるしに問きゝけるに、定にしかりとこゝ年毎の佐義長に灰は一握もなくことゝくに凝て、鍛治の火床の底になりいつる金屑カネクサといふものによく似たり。おのれも此家にて一つを得て愛もてり。同し里にても、この奥もろ儀といふ処のみにて、海辺のもろ儀にはかゝる事なしと云り。いとも怪しきことなり。村岡にいたる。この村岡君は、大江戸にましゝて国人とはしけしとおもほすこと親の子をひたすよりも厚しとて、国人みのりをよく守り、おのかとちむつひしたしみて、國中富業種物よく熟り、蚕年サニことによく生たちて、いと豊かなる事難波の都のむかしそ思ひたちつらる。こゝにしはらくありて、古き代の事とも解さとしければ、人々あまたなれしたしみて来む。春までもなとゝきこえけれど、急かるゝ事のありて強て立出は、妙見社にまうつ。いとも高き山のいたゝきに御社はたゝ替給へり。当山の杉の木、世に珍らしきものなり。こゝを下りて八木八鹿ヤキヤウカなどいふ処を過て、大屋上山ウヤマ村北垣方照許訪らひつ。この主は前に出雲国水浦にて始めてあひて、久計門の御神にもいさなひたり。また杵築の御神を敬ひ奉ること

和名抄  
養父郡養者ヤキヤウカ  
同 大屋

も同じ志なれば、かくはろくくと、ひ来しなり。この主か齋祭る御社に詣てけるに、この家にたゞにむかへる山の面に造りまうけたる御社は、飛驒人の手をちらし、高御座には金銀をちりはめたり。花表には卜部兼良のかゝれたる額を高らかにかけたなり。こゝにて主のこへるまゝによめりし歌。

八雲立出雲国は八百丹杵築の里の大宮に鎮坐給へる

大汝持神の命は大御矛手に執持て、葦原の荒ふるものを悉にことむけまして現世のあらはに事は畏も繕に恐き天照神の命の皇御孫にまつり給ひて、幽事をしらし給ふと百不足八十隈路の常宮にかくり給へり。今もかも人の目に見ぬよきあしき事なりゆくは、此神の心なりけり。あやにあやにきけは、尊し十寸鏡見ればかしこし荒玉の年の一日もこの神の御蔭かとへは、須更もかくてあらしと霰降。但馬国北垣の方照主は吾家にいす。かふ山に宮柱太布建て、大神をいはひ祭て常明にみてくらまつり、朝夕にをかみ奉れば向峯に出る朝日のゑみ栄也。正木のかつら長世も五百代も千代もとこ濱のうごく事なく、生の子の八十嗣にても家は栄えむ。

此里のうち中村影向か岡といふ処に、日の神の御像朝霧の中に見えさせ給ふを、遠近より拝に来る人多し〔こは影向か岡の西の山より故は前東なる谷より朝霧深く立おほひたるに其東の峯に朝日の登るまに／＼音の中に虹のことくわたり二三丈もあるまとかにいろとりたる中に立像の御かけのなれ給ふな

り」。これ昔よりかゝる事のあるや、其伝もなく、後の世にしもなりて物ごとうつりかはり、跡かたもなくなりなは、かゝる奇き事の伝しになくなりなむことをうれたみて、此方照主こゝに石碑を建むと思ひおこして、たゝ人のさとりやすき文かきてとらへるまゝに、かくものしつ。

千早振神代に有し事ともを、語つゝ、覺たることにくたちゆく今の世に至て、見もし聞もせさることをたゝ怪き事とのみ思ひ過すは、いとおろかなる事なり。吾国、古より今に至まで神のまにゝ、なし給ふことの何の怪しき事かあらむ。さるに、異国よりいと怪しき事をいひ渡してこゝの人にをしへまとはしぬるとぞ、あやしくにくむへき事にはありけれ。於此但馬国養父郡大家中村の里影向か岡とふ処に奇く妙なる事そあなる。そは、四月五月のころ朝霧深く立覆ひたる日、朝日子の豊榮登大御影まとかにうつりたる中に大御像のあらはれて、たゝに見えさせ給ふはいともかしこき事になむ有ける。かゝる事、今の世にては奇き事となりと遠近の人々、朝毎に来集ひて拝奉り。此処にもかしこにもきこえぬるを、末の世に至りて消失なむ事もあらは、人になほあやしとやいはむ。此里人北垣方照こをうれたみて事のよしを石に彫て、竟に其こと竟けれど、そはことさしく唐言にしあれば、なへての人の見し、ましきことをなげき、皇国言にして天保四辛巳年ふたゝひこの石碑なむたつる。

当国二方郡の内人死て埋葬するに、半月過て死骸さらになくなるとぞ。これを  
仏氏の族さまくにいへれと、そはうへなは□す。いかなる故にかゝるいふ  
事をしらす。此故に、この郡里にては、埋葬の地に骸骨を見ることがなしとい  
へり。また、丹波国半蔵原村日中に死体の失ること、美作国寺本村長国助次  
郎か家の埋葬の死体を狼の喰ふこと、又紀伊国高野山近或村の天葬といふ事  
ありて、死体を木の股すまにうけ置に、夜中に死体の失ること。或は中古水葬の  
事などさまく怪き事ともあること泉国弁後編に云り。当国朝来郡桑市村  
に経雅大明神といふ有。参儀経雅を祭る。神主昔より次郎兵衛と云。また二  
方郡余戸村御崎平内大明神は、伊賀平内左衛門を祭る。神主昔より平内と云。  
また越中次郎兵衛は、八嶋の乱れより当国湯の嶋にかくれたるをさかし捕れ  
て謀せられしとて、今も其処に墓あり。其外、平氏余願の墓遺跡に、当国こゝ  
かしこに有と云り。前にいふ隣国稻羽国私都のこと考合すへし。

かくてこの北垣の家にて日を重、今はとて立出、城の崎の温泉にゆき丹後・  
丹波・若狭・近江とありきて、紀の国若山に至り、次のとし三月に帰りしま  
ての初末は次巻にいふへし。

抑この日記を次々ものせしは、吾里より杵築大社まで三十里はかりなれば年  
毎に詣て奉るなり。また式内の神社をことく記して、式内神社聞見録を  
著さんと思ひおこして、年ころ遠き近き拝み巡りけるに、其国々にて怪き奇

きと思ふかきりは自ら往見てかくしらせるなり。そは鈴屋翁はやくみれしことく、上つ代の事のたえてなき事を怪しと思ふはをこなり。すへて人の力智の考のおよはぬこととも、ちかき世には物産学蘭学などいふことのはやりて理をきはめて、いつれてさらに安からぬ事なり。そは此巻に云ることとも、又次巻に云る事など、いつれもみな神のまにくなし給ふ事、何の怪しきことかあらむ。



令和六年度 大学院文学研究科

◆学位論文題目一覧

修士学位論文

●日本文化専攻修士課程

氏名	修士論文題目
多米 玲奈	幻想の装置としての短歌——葛原妙子を中心に
武田佑希子	近世国学者における黄泉比良坂の解釈 ——後藤夷臣『八雲路日記 三上』と『泉国弁』 を中心に——
太田 幸夫	芥川龍之介の「女」論 ↳「詩的精神」と「ジヤアナリスト」の視点から
林 香苗	三浦綾子『銃口』 試論——研究史とその課題——

●英米文化専攻修士課程

氏名	修士論文題目
城田 龍星	現代英語における発音と綴り字の不一致
福井 花也	レッシングによるイソップ的寓話において 古代ギリシャ・ローマの神々が与える効果

## ◆ 授業科目及び担当者

### ● 日本文化専攻博士（後期）課程

授業科目	担当教員
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅡA	鈴木英之教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅢA	田中 綾教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅢB	田中 綾教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅢC	田中 綾教授
論文指導Ⅱ	田中 綾教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅣA	徳永良次教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅣB	徳永良次教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅣC	徳永良次教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅦA	大石和久教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅦB	大石和久教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅦC	大石和久教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅠA	片岡耕平教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅠB	片岡耕平教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅠC	片岡耕平教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅡA	郡司 淳教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅡB	郡司 淳教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅡC	郡司 淳教授
論文指導Ⅰ	郡司 淳教授

授業科目	担当教員
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅢA	手塚 薫教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅢB	手塚 薫教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅢC	手塚 薫教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅣA	須田一弘教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅣB	須田一弘教授
日本語、思想文化論文指導特殊演習ⅣC	須田一弘教授

●英米文化専攻博士（後期）課程

授業科目	担当教員
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅠA	田中洋也 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅠB	田中洋也 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅠC	田中洋也 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅡA	岩田 哲教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅡB	岩田 哲教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅡC	岩田 哲教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢA	上野誠治 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢB	上野誠治 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢC	上野誠治 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅣA	佐藤貴史 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅣB	佐藤貴史 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅣC	佐藤貴史 教授
論文指導Ⅱ	佐藤貴史 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅤA	渡部あさみ 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅤB	渡部あさみ 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅤC	渡部あさみ 教授

授業科目	担当教員
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅦA	森川慎也 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅦB	森川慎也 教授
欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅦC	森川慎也 教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅠA	柴田 崇教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅠB	柴田 崇教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅠC	柴田 崇教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡA	大森 輝教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡB	大森 輝教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡC	大森 輝教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢA	小松かおり 教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢB	小松かおり 教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢC	小松かおり 教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣA	仲松優子 教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣB	仲松優子 教授
欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣC	仲松優子 教授

# ● 日本文学専攻修士課程

授業科目

担当教員

日本文学特殊講義Ⅰ	関本真乃 准教授
日本文学特殊講義演習ⅠA	関本真乃 准教授
日本文学特殊講義演習ⅠB	関本真乃 准教授
日本文学特殊講義Ⅱ	田中 綾教授
日本文学特殊講義演習ⅡA	田中 綾教授
日本文学特殊講義演習ⅡB	田中 綾教授
日本文学特殊講義Ⅲ	月岡道晴 講師
比較文学特殊講義Ⅱ	杉江聡子 准教授
比較文学特殊講義演習ⅡA	杉江聡子 准教授
比較文学特殊講義演習ⅡB	杉江聡子 准教授
日本思想特殊講義Ⅱ	大石和久 教授
日本思想特殊講義演習ⅡA	大石和久 教授
日本思想特殊講義演習ⅡB	大石和久 教授
日本語研究特殊講義Ⅰ	丸島 歩 准教授
日本語研究特殊講義演習ⅠA	丸島 歩 准教授
日本語研究特殊講義演習ⅠB	丸島 歩 准教授
日本語研究特殊講義Ⅱ	徳永良次 教授
日本語研究特殊講義演習ⅡA	徳永良次 教授
日本語研究特殊講義演習ⅡB	徳永良次 教授

授業科目

担当教員

日本史特殊講義Ⅰ	片岡耕平 准教授
日本史特殊講義演習ⅠA	片岡耕平 准教授
日本史特殊講義演習ⅠB	片岡耕平 准教授
日本史特殊講義Ⅱ	郡司 淳教授
日本史特殊講義演習ⅡA	郡司 淳教授
日本史特殊講義演習ⅡB	郡司 淳教授
日本史特殊講義Ⅲ	東 俊佑 講師
環境文化特殊講義Ⅰ	手塚 薫教授
環境文化特殊講義演習ⅠA	手塚 薫教授
環境文化特殊講義演習ⅠB	手塚 薫教授
環境文化特殊講義Ⅱ	須田一弘 教授
環境文化特殊講義演習ⅡA	須田一弘 教授
環境文化特殊講義演習ⅡB	須田一弘 教授

## ●英米文化専攻修士課程

授業科目	担当教員
英米文学特殊講義 I	渡部あさみ教授
英米文学特殊講義演習 I A	渡部あさみ教授
英米文学特殊講義演習 I B	渡部あさみ教授
英米文学特殊講義 II	森川慎也教授
英米文学特殊講義演習 II A	森川慎也教授
英米文学特殊講義演習 II B	森川慎也教授
英語研究特殊講義 I	上野誠治教授
英語研究特殊講義演習 I A	上野誠治教授
英語研究特殊講義演習 I B	上野誠治教授
英語研究特殊講義 II	岩田 哲教授
英語研究特殊講義演習 II A	岩田 哲教授
英語研究特殊講義演習 II B	岩田 哲教授
英語研究特殊講義 III	田中洋也教授
英語研究特殊講義演習 III A	田中洋也教授
英語研究特殊講義演習 III B	田中洋也教授
欧米思想特殊講義 I	小柳敦史 准教授
欧米思想特殊講義演習 I A	小柳敦史 准教授
欧米思想特殊講義演習 I B	小柳敦史 准教授

授業科目	担当教員
欧米思想特殊講義 II	佐藤貴史教授
欧米思想特殊講義演習 II A	佐藤貴史教授
欧米思想特殊講義演習 II B	佐藤貴史教授
欧米思想特殊講義 III (環境文化特殊講義 e III)	瀬名波栄潤講師
欧米史特殊講義 II	大森一輝教授
欧米史特殊講義演習 II A	大森一輝教授
欧米史特殊講義演習 II B	大森一輝教授
欧米史特殊講義 III	仲松優子教授
欧米史特殊講義演習 III A	仲松優子教授
欧米史特殊講義演習 III B	仲松優子教授
環境文化特殊講義 e I	小松かおり教授
環境文化特殊講義演習 e I A	小松かおり教授
環境文化特殊講義演習 e I B	小松かおり教授
環境文化特殊講義 e II	柴田 崇教授
環境文化特殊講義演習 e II A	柴田 崇教授
環境文化特殊講義演習 e II B	柴田 崇教授



文学研究科教育・研究発表活動

◎二〇二五年度 第一回全体ゼミ（中間報告）

七月五日（土） 9：55～14：50 21番教室にて開催された。修士課程と博士（後期）課程に在学する六名の院生が次の題目の論文の構想とその内容の一部を発表した（参加者約25名）。

渡辺 駆 「中原中也の詩の音楽性―ベルクソンの〈時間〉をめぐって―」

藤野戸 柺希 「特定技能2号を目指す外国人のための適切な日本語学習支援のあり方―農業分野における耕種農業を中心に―」

武田 佑希子 「近代における神話的場所の形成―黄泉比良坂伝承碑を中心に―」

國岡 健 「尾崎三良の上院構想―通款社・華族会館を通して―」

伊藤 翔太 「平安時代における仏教的天皇観の形成について」

孔 継金 「蓮如の宿善観」

◎二〇二五年度 第二回全体ゼミ（中間報告）

十一月一日（土） 10：00～11：45 22番教室にて開催された。修士課程と博士（後期）課程に在学する三名の院生が次の題目の論文の構想とその内容の一部を発表した（参加者22名）。

坂本 渚月 「石狩市浜益区における祭りの継承と地域資源化―川下八幡神社例大祭を中心に―」

中嶋 奏子 「啓蒙時代の植民地インドにおけるイギリス人女性旅行作家の言説の揺らぎ―イライザ・フェイ著『インドからの手紙』を手がかりに―」

林 香苗 「三浦綾子『銃口』生成研究―〈境界を生きる『銃口』―」

\_\_\_\_\_

●『年報新人文学』第二号をみなさまにお届けします。本号は巻頭言、論文三編、資料紹介一編を収めています。本号の論文は北海学園大学大学院文学研究科に在籍し、現在講師を務める研究者や現役の大学院生によって執筆されたもので、いずれも地道な調査・研究活動の成果となっています。執筆者のみなさまの厳正な査読を引き受けてくださった査読者の方々には心よりお礼申し上げます。

●巻頭言は、大森一輝教授による「天に唾する——排外主義にまつわる国民的自画自賛と健忘症／怒りと笑いと憂いのA I 狂騒曲」です。自分とは異なる他者へ寛容のまなざしを向けることにより、共感の基盤を築くヒントが詰まっています。国内における昨今の目に余る排外主義の対象となる「文化の違う外国人」の振る舞いは、かつての己の先達の海外旅行におけるそれと二重写しであることを、数々のエビデンスをもとにご指摘いただきました。これらは日本人が犯した戦争加害という過去を、戦後八〇年足らずで、すでに省察するちからを喪なつてきていることも通底しています。戦争を引き起こした主体がいつの間にか抜け落ち、あたかも天変地異のごとく悲劇に巻き込まれたと他人事にしてしまふ雰囲気や支配的になりつつあるのではないのでしょうか。歴史を安易に修正するのではなく、歴史の経験から真摯に学び、現在や将来に活かすことの重要性を再認識しました。言葉がかつてないほどちからをそがれ、「考える」ことより「思う」ことを優先する風潮が広がっているのは、テクノロジーの進展にともなう生成AIの普及と濫用が、ヒトのみが有するとされてきた「考察・省察するちから」を衰えさせていることに起因しているとの懸念を、教育現場で痛感することも確実に増えているように思います。自然科学の成果による先端技術の拡張と人間を取り巻く社会・経済情勢の急激なうねりのなかで、人間に対する想像力と感性を研ぎ澄ませつつ、多様な価値観やウェルビーイングの在り方を追求していくことにおいて、人文学が果たせる役割は決して小さなものではありません。本号に収められたそれぞれの論考は、これからの社会を考えるうえでも、すでにオリジナルな輝きを放っています。

●今号からはペーパーレス化に移行し、オンライン上のジャーナルにかたちを変えますが、その価値が減じることはありません。本研究科には今号のように優秀な投稿者の他にも着実に研究を進めている大学院生が多数在籍しています。本誌は、姉妹誌である『人文論集』とは異なり、査読を経て論考が掲載される学術誌です。大学教員からの珠玉の論文投

稿以外にも大学院生からの投稿も歓迎しています。みずからの研究を振り返りつつ、鍛錬するのに最適な「道場」です。ので、大学院生の皆様も奮ってご投稿ください。

(手塚薫・岩田哲)

## 『年報 新人文文学』投稿規定

- 一、『年報 新人文文学』は、人文文学に関する広範な分野の研究成果を掲載し、内外の研究交流を図ることを目的とし、年一回発行を原則とする。
- 二、投稿原稿の著者は、人文学部及び文学研究科の所属者でなければならない。ただし編集委員会が認めた場合はその限りではない。
- 三、原稿は日本語、あるいは英語とし、種類と分量はそれぞれ次のとおりとする。
  - ①原著論文で未発表のもの、日本語なら二〇、〇〇〇字、英語なら一〇、〇〇〇字程度。
  - ②研究ノート・資料・報告など、日本語なら一二、〇〇〇字、英語なら六、〇〇〇字程度。
  - ③書評など、日本語なら四、〇〇〇字、英語なら二、〇〇〇字程度。
  - ④その他、編集委員会が必要と認めたもの。
- 四、原稿は編集委員会で厳正な審査を行い、採否を決定する。編集委員会は査読結果に基づき、原稿の一部変更を求めることがある。

北海学園大学大学院文学研究科  
『年報 新人文文学』編集委員会

◆表紙の「ふくろう」について

表紙に描かれている「ふくろう」には、二重の意味が込められています。ひとつは古代アテネの「ミネルヴァのふくろう」に由来する、「知恵ないし学問」の象徴という意味です。哲学者ヘーゲルが、「ミネルヴァのふくろうは、日の暮れ始めた夕暮れとともに、はじめてその飛翔を始める」と述べたことは、つとに有名です。

もう一つの意味は、北海道に生息する天然記念物「シマフクロウ」に由来しています。

シマフクロウは、北海道のなかでも手つかずの自然が残っている場所にしか生息しませんが、その表情には思慮深い哲人を思わせる威厳があります。古来アイヌの人たちは、この鳥をコタンコロカムイ（村の守護神）と呼んで神聖視してきました。

本誌は、この「ミネルヴァのふくろう」と「シマフクロウ」にあやかっつて、北の大地から新しき学問の地平をきり拓くべく、大いなる飛翔の場たらしめとするものです。

年報 新人文学〔第二十二号〕 Annual Bulletin of the New Humanities

発行日——令和七（二〇二五）年十二月二十五日 発行

編集者——北海道大学大学院文学研究科「年報 新人文学」編集委員会

北海道大学大学院文学研究科内

〒〇六二―八六〇五 北海道札幌市豊平区旭町四丁目一 番四〇号

電話（〇一一）八四一一―二六一〔代表〕 FAX（〇一一）八二四―七七二九

編集委員——手塚薫 十岩田哲

発行者——郡司淳

発行所——北海道大学大学院文学研究科 札幌市豊平区旭町四丁目一 番四〇号 電話（〇一一）八四一一―二六一〔代表〕

